
突然の彼女・エピソード2

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然の彼女・エピソード2

【Nコード】

N0411C

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

ハッピーエンドで結ばれた森田卓とゆりかが結婚してから1年半を迎えていた。相変わらずドジが治らない卓。にも関わらず、彼には更なる災難が待っていた。そしてそれは同時にゆりかにとっても試練になる出来事であった。でもそれが仕組まれた罠の始まりであることなど二人はまだ気づきもしない。。。

その1 トラブルメーカー（前書き）

この作品は前作、『突然の彼女』の続編になります。
前作をお読みいただけたら、主人公の二人の性格、出会いから今に至るまでの経緯がよくわかると思います。

その1 トラブルメーカー

その1

トラブルメーカー

●森田卓の視点
もりたすぐる

空からパンツが降ってきた。しかも明らかに女性のだ。(^ □ ^ ;

A

朝の出勤途中、たまたま大あくびをしながら上を向いていた僕の顔の上へそれはまともに被さった。

「うわっ！こ、これ・・・ど、どこから飛んで来たんだ？」

辺りは10階建てが並ぶマンション群。

今日のこの風だと、どこから飛ばされて来てもおかしくない。

僕はその下着を手に持ち替えて、あちこちの高層マンションを見上げた。

でも、ベランダに干し物をしている家庭は10件や20件ではきかない。

「参ったなあ・・・まさか下着に名前なんて書いてないだろうし。」

そう思いながらも一応確かめてはみた。広げてみたり、内側を確認してみたりしたけど 当然のごとく名前なんかありやしない。

『僕もバカだな。介護施設にいるお年寄りでもあるまいし。ハハ・

・(^ | ^ ;) 』

何はともあれ、このまま僕がこのパンティを持ってるわけにはいかない。

『そうだっ！近くに交番があつたはずだよ。そこに届ければいいんだ！』

僕はとりあえず下着をカバンに詰め込み、足取りを速めた。

途中、道筋を1本間違えて、交番を探すのに5分ほど手間取ったけど、なんとか入り口までたどり着いた。

そしてまさに僕がそこに入ろうとする瞬間、遠くから叫び声が聞こえた。

「ドロボー！下着ドロボー！」

若い女性の声だ。こちらに全力疾走で走って来るのが見える。

(。○。;)ハッ！・・・なんかこれはまずいような気が。。。)

そしてその予感は見事に的中した。

その女性は走って来るなり、僕の腕を捕まえて交番の入り口まで引っ張って行く。

「おまわりさんっ！この人下着ドロボーです！」

「ちょ・・・ちよつと待って下さいよお。誤解ですよお。」

興奮気味の女性は僕の言葉など寝耳に水。

そして中からおまわりさんもタイミング良く出てきた。

「こりゃ驚いた。お嬢さんがこの下着ドロボーを捕まえたんですか？」

「だから僕は違う・・・」

「はい！たった今捕まえました！」

「Σ―11(;)――1んなアホな！」

僕は気が動転すると、表情がこわばって余計に怪しくなる。

だから何を言っても言い訳がましく聞こえるらしい。

「ぼ、僕はや、やってません。下着なんか捕ってません・・・とは言えないけど。」

「ほらー！やっぱり！私ちゃんとベランダから見てたんだから。」

「いや、捕ったって言うんじゃないって・・・拾っただけで。」

おまわりさんが鋭い眼差しで僕を見ている。

「君！言い訳はいいから。ドロボーはみんな最初はそう言うんだ。」

論より証拠。カバンの中を開けなさい。」

(Σノ。)(ノハウツ！ますます僕はヤバイじゃん！)

そう言われて拒否るわけにも行かず、僕はカバンの中から下着を取り出した。

「もう言い逃れはできないぞ！君は下着集めが趣味なのか？」

「だから違う・・・」

「お嬢さん、お手柄でしたね。怖い思いもしたでしょうに。」

「はい。でも私、一目でこの人が変態だってピンと来ましたから！」

(Σ―11)(；)――1なんでだよおお！僕ってそんなに
変態顔かああ？)

「君、名前を言いなさい。」

「でも・・・」

「とにかく名前！」

「はい・・・もじたずくる森田卓です。」

「年齢は？」

「29歳です。」

「仕事は？」

「ちよつと待つて下さいよ！僕を犯人と決め付けないでちゃんと説明を聞いて下さいよ。これには訳があるんですから。」

「下着を盗まなければならなかった訳かね？」

「いや、だからですね・・・(＾□＾；A」

次にすぐ口を開いたのは若い女性の方だった。

「説明なら私がきちんとできます。」

「お、そうかい。ではお嬢さんの話をじっくり聞きましょう。」

(何で僕の話はじっくり聞いてくれないんだよ・・・)(・-・)(

「この変態さんは私の下着を手に取るとすぐに広げたり匂いを嗅いだりしてました。」

「あのー、僕を変態さんと呼ぶのはやめてくれます？」

「その通りですお嬢さん。変態に『さん』付けはいりません。」

「いや、そういう意味じゃなくて・・」
「D」 ; ; ; 「」

「わかりました。で、それを見ただけで私は鳥肌が立ちました。」

「なるほど。お気持ちお察します。森田と言ったな。何か言い訳はできるのか？」

「あ、はい。それは・・その下着に名前が書いてあるか調べてたんです。」

「匂いを嗅いだら名前がわかるのかね？」

「嗅いでませんってば！内側に名前が書いてあるかどうか確認しただけですよお。」

「信じられんな。どこの誰が下着に名前を書く若い女性がいるのかね？」

（ホントそうだよ）
「D」 ; ; ; 「僕がバカだった。余計な行動をしてしまった。」

「私、その後もこの変態がカバンに急いで下着を押し込むのを見ました。」

「（・。・） ほー。慌てて下着をね。。証拠隠滅か。」

「だからですね、それはこの交番に届けようとしたからなんですって！」

「本当にそうなのかね？信じられないが。」

「信じて下さいよお。」

「私、もうこの変態に近寄りたくありません。おまわりさん何とかして下さいー！」

（この子、よっぱど気の強い子だなあ。。うちのゆりかちゃんとい
い勝負かも。。）

「ところで・・森田と言ったね？今一緒に住んでる家族は？」

「え？・・家にはうちの奥さんと・・娘がひとり。。」

「Σ（´・´・*エエツ！？奥さんがいるのぉ？独身で超オタクのド
変態かと思っただわ。」

（言ってくれるねえこの小娘（´・´・；　いくら大人しい僕でも限
度ってものが。。）

「じゃあ君、奥さんをここに呼びなさい。」

「（・―・）エツ？ここへですか？」

「仕方ないでしょう。君がしたことは家族にもちゃんと知ってもら
わないとね。」

ガ　ΣΣ（。D´・´）　ン！！ゆりかちゃんをここへ。。

僕は動揺した。彼女をこんなことで巻き込みたくなかった。
でも今の僕の現状は非常にまずい。助けてくれるのは・・信じても
らえるのはゆりかちゃんしかない。。

僕は彼女の携帯にメールした。

「おい森田。メールより直接電話で呼びなさい！」

「あ、はい。すみません。。^―^」

（続く）

その2 救いの神ゆりか

その2

救いの神ゆりか

●森田ゆりかの視点

私は職場に着くなり、卓さんからの着信を受け取った。
どうやらまた不審者と間違われたらしい。

すぐさま私は上司に適当な理由を言って一時職場を離れる許可をもらった。

もちろん旦那様が交番で捕まっているなんてバカ正直な報告はしなかった。

20分後、彼のいる交番にたどり着くと、20代前半と思える女性と、イブシギンで頑固そうな警官が座っていた。

特に会話をしているふうでもなく、もうすでにしゃべり尽くしたという雰囲気。

卓さんは私を見るなりペコペコ謝りはじめた。

「ゆりかちゃんごめん。ホントにごめん。もう職場に着いてたんじや・・・？」

「ええ。ちょうど着いたところだったの。」

「いやホントに申し訳ない。」

「そんなに謝らなくてもいいよ。まるで自供してるみたいじゃない。」

「いやいやいやいや、決してそんなんじゃないよ・・・」

私は警官の方を向いて問いかけた。

「すみませんが、とにかく詳しい事情を教えてくださいませんか？」

警官は呆然と口をポカンと開けた状態で固まっていた。

その隣にいる女性も目を見開いて私を食い入るように見ている。

「あ、あの・・・あなたがその・・・森田卓の。」

「はい。家内ですけど。」

「いやー、びっくりしました。あまりにもお綺麗なもんで。」

「それはどうも。」

「まさかあなたとこいつ・・・いや、森田がご夫婦とは・・・（＾―＾；）」

「よく言われるんですけどね（Д；；」と卓さんが言う。

そばにいる女性も間に口を挟んできた。

「美女と野獣っていうんじゃくて、美女と草食動物みたいw」

「大きなお世話ですっ！」

私はその子に一喝した。だがその子も結構気が強いようだ。

「本当の夫婦にしては呼び方がおかしいんじゃないですか？」

「これがうちでは普通です。」

「旦那さんが奥さんをゆりかちゃんて呼ぶのキモい！アタシだったらヤダな。」

「あなたは私じゃないんだから例える必要もないでしょ！」

「それもそうね。アタシが選ぶタイプの人とはかけ離れてるし。」

「、（、ノムキイ！私は外見で人を判断してないのっ！」

ここでイブシギンの警官が止めに入った。

「まあまあそのへんで。本題からそれで来ましたので事情の説明を私から始めましょう。」

「あ・・・すみません。」

数分間の説明のあと、警官が改めて言った。

「こんな綺麗な奥さんがいるのに、君がくだらない下着ドロボーするなんて考えにくくなって来たなあ。」

「でしょでしょ！」と卓さんがすかさず同調する。

すると若い女性の方も反論を始める。

「意味が違っわ。変態は色んな下着を集めるのが趣味なのよ。地味で毎日見慣れてる下着なんかに興味はないわ。」

私は机の上に置かれている下着を見て、またカツとなつてしまった。
「こんな下着、彼がわざわざ捕らなくても私の方がもっとすごい
持ってますっ！」

一同哑然。。私としたことが・・（^□^；A

●森田卓の視点

さすがに僕も驚いた。

（こんなに熱くなるゆりかちゃんを見るのも久しぶりだな。それにしても、そんなすごい下着持つてるとは知らなかった。家で見たことないけどなあ。。あ、僕のバカ！今そんなこと考えてどうすんだよ！）

おまわりさんが体裁悪そうに話し出した。

「えーっ・・また本題がズレてしまったようなので元に戻しましょう。とにかく、彼の力バンの中に彼女の・・失礼、お嬢さんのお名前をまだ聞いてませんでした。教えていただけますか？」

「えっ？・・それはちよつと。」

「何か問題でも？」

「もしこの人がストーカーだったら電話されても困りますし。。」

「だから僕はそんなんじゃない。」

「下着が力バンの中にあつたのは事実なんですから、それだけで決まりじゃないんですか？おまわりさん。」

「まあ、ひとつの証拠にはなるんだが・・確定的とは。」

その時、僕のゆりかちゃんが割って入った。

「ちよつと名無しのあなた！うちの主人があなたの下着を盗んだ瞬間を目撃でもしたんですか？」

「瞬間は目撃してませんけど・・」

「見てないなら、決め付けることなんてできないでしょ。」

「でも匂い嗅いだり広げたり急いでカバンに隠すのは見ました。」

「その理由は私が来る前に彼が言ったんでしょう？持ち主の確認とこの交番に届けるためだって。」

「信じられません。」

「その信じられない理由が私にはわかりません。盗んだ瞬間を見ていないのに言い張るあなたの発言こそ私は信じられません。」

「あなたは奥さんだからかばいたいただけなんですよ？アタシなら旦那でもとくにキレてるけど。」

「私は彼の奥さんだからわかるの。主人はこんな大胆なことが出来る器じゃないわ。」

（「D」……これってほめられてるのかな？

「それに今日はこんなに風が強いじゃないですか。ベランダに干していた下着が風で飛ばされたと考えた方がごく自然だと思いますが？あなたが目撃したとき主人はどこにいましたか？」

「・・・ベランダから見える下の路地ですけど。」

「あなたのマンションは何階？」

「2階。」

「ほらね。主人がわざわざ朝からマンションをよじ登って大胆にベランダから下着を盗むなんて話の方が信じられないでしょう？」

「でも空き巣とかドロボーは真昼間に起こるものじゃないですか！」

「主人は出勤途中だったのよ。いつもギリギリに出社するの。そんな主人がロスタイムを作るはずありません。」

（ここでギリギリ出社って言わなくても・・・「D」……）

「だってこの人、動きも不審だったし・・・顔も。」

ゆりかちゃんはこのぞと言わんばかりに語気を強める。

「主人が信用されないのは顔のせい？」

「ええ。一番の理由はそうよ。」

（（ノーω））ノバタ 僕はそれだけで。

「おまわりさんもそうなんですか？」

「いや、なんというかその。。」

（キツパリ違うって言うてくれないのか（ - ; ）

「確かに主人は変態みたいな顔してるかもしれませんが。」

（Σ―11（ ' ; ）――1ゆ、ゆりかちゃんまで。

「でも主人は心優しい気立ての良い人なんです。自分にウソもつけませんし、飾ることもしません。小心者ですが人に迷惑をかけることだけは絶対しないというポリシーを持っています。」

（えと・・・僕はどう考えたらいいんだろ？（「！」；）

「おまわりさんは人を顔で判断してるんですか？名無しのあなたはどうせ第1印象で全てを決め付けるんでしょうけど。」

「・・・・・・」

「最後に言わせてもらいますが、以上の点からして、主人がわざわざベランダをよじ登って捕ったとでも？それとも超能力で下着を路地まで呼び寄せたとでも？家には私がいるんだし、隠してもおけないでしょう。主人がそんなことをする理由ありません。私はそんな人を結婚相手として選んだ覚えはないですから。」

「でも・・・」

「それでもあなたは主人を訴えますか？それならそれで私は堂々と受けて立つわよ。そして絶対勝ちます！いかが？」

(すごい・・・(^| ^;)さすがゆりかちゃん。たたみ掛ける口撃だw)

僕は彼女を尊敬の眼差しで見ていた。決めるところではキツチリ決める。

でもこうして助けてもらうのは独身のころから含めて何度目だろう。

僕自身、もうちょっとしっかりしなければゆりかちゃんに愛想つかせれちゃうかもしれない。ホントしっかりしないと。

結局、名前の明かさなかった若い女性は訴えを退けた。

僕はゆりかちゃんのおかげでめでたく無罪放免となったのだ。

交番を離れてホツとしながら僕たちは並んで歩いていた。

結婚してから一年半、いまだに行きかう人たちは僕たち夫婦を見る視線が驚きの眼差しだ。そんなに違和感あるのかな。(- - ;)

「ねえ、卓さん。」

「ん？何？ゆりかちゃん。」

「その呼び方なんだけど、もう呼び捨てでいいよ。」

「え？でも僕は人呼び捨てにする習慣ないし。」

「でもさっき言われたじゃない。あの子に。」

「うん。。」

「それに私が卓さんを尻に敷いてるってまわりに思われたくないのわかる？」

「そ、そりゃ。。」

「なんかすごく気の強いタカビーな女に見られてそれでイヤなの。」

「ごめんね。僕がもっとしっかりしていればこんなことにはならないのに。」

「それが卓さんだもの。気にすることないわ。でも・・・ちよつとはすっかりしてねw」

「はい。。」

「はいじゃなくて、『ああ、わかった』とか言つのよ。」

「なんか照れちゃうよw」

「徐々にでいいから。」

「うん。でもあの言葉にはびっくりしたなあ。」

「どんな？」

「私もつとすごい下着持ってますってw」

「あー、あれはハッタリよ。」

「（ノー――）ノコケッ！！やっぱり。」

「だって家で見たことないでしょ？」

「どこかに隠し持ってるのかとw」

「バカね！」

「あ、じゃあ僕はこっちの道から職場に戻るから。」

「うん。じゃあね。いずみのクリスマスプレゼント考えててね。」

「あ、ああ・・・わかった！」

「（o^_^o）ウフツ うまく言えたわよ。」

「（ノノノノ）デヘヘ。」

ここまでの僕たちは、多少トラブルもありながらも順調に幸せな結婚生活を送っている。誰がどう思おうが僕は構わない。けど、彼女は僕と一緒にいるところ人に見られて全然平気なんだろうかと思うこともある。いつかこの幸せが崩れはしないかと頭をよぎる不安も僕にはつきまとっていた。

道を二手に分かれて行く森田卓とゆりかを車の中からじっと見ている人物がいた。

サングラス越しに、その一方の後姿を目で追っていた。
「森田卓・・・あれがターゲットね。」

（続く）

その3 嫉妬渦巻く社内

嫉妬渦巻く社内

●森田卓の視点

「あれ？森田。自慢の愛妻弁当はどうしたんだ？」
思った通り、早速同僚から茶々が入った。

僕は今日から社員食堂で日替わり定食を食べている。

この1年半続いたゆりかちゃん・いや、ゆりか手作りの弁当が終わったからだ。

と言ってもケンカして彼女がやめたいと言ったわけではなくて、僕が遠慮したからだ。

なぜならお互い共働きなのに、特に朝の弱い彼女が今まで毎朝早起きして弁当作りなんて、だんだん気の毒に思えて来たからだ。

僕はこれまで彼女に自分のドジで負担ばかりかけて来たし、こんな性格ではドジは治りそうもない。

だから彼女に何のお返しもしていない。せめて朝はバタバタさせずに、もう少し時間のゆとりを持たせてあげようと思ったのだ。

そのことを同僚の黒崎君に言つと予想外の返答。

「バツ力だなあ森田。だったらお前が弁当作ってやったらいいだろうが。」

「Σ（・・・エエッ！？僕が？・・そ、そんなこと考えもしなかった。（^ー^;）」

「アホか。できなくても考えるくらいしろよ。」

「でも僕、カップめんしか得意じゃないし。」

「それ得意って言わねえし。」

「でも・・ゆりかちゃ・・ゆりかにそれで納得してもらったからいいんだ。」

「じゃあ嫁さんの昼メシはどうしてんだ？」

「向こうにも社食があるって言ってたから。」

「ふうん。でも喜んで作ってもらってるうちは遠慮することないと思うけどな。」

「そうかなあ。。」

「ヘタするとお前の浮気疑惑の原因になるぞ。」

「（□、；）！！えっ？そうなの？」

僕は一瞬ドキッとした。

「（　　）ぶあっはっはっ！！バカだなお前も。森田と不倫する女なんているわけねえじゃん。お前が今の嫁さんもらったのだって奇跡なのによ。」

結構な言われようだが、事実だから仕方がない。（・・；）
ゆりかちゃ・・いや、ゆりかと結婚してから職場では、ずっと世界の不思議のように言われ続けている。

男の嫉妬とでも言うのだろうか、何かにつけて同僚たちは、

「珍しいもの好きな嫁さんなんだな。」とか

「そんなんじゃ嫁さんに逃げられるぞ！」とか

「嫁さんのことばっか考えて仕事してんじゃねえぞ！」などと言われ続け、

“世界一不釣り合いな新婚さん”のレッテルを貼られていた。

こんな奴ら結婚式に呼ばなきゃよかったよホントに。。

黒崎君にからかわれた後も、社食を食べに来た同じ部署の田嶋君や白石君たちから茶々が入った。

「お？森田がここでメシ食ってるぞ。どした？とうとう夫婦間に亀裂が入ったか？やっぱりなあ。そうだと思ったんだ。」

「いや、違うつてば。僕が作らなくていいって言っただよ。」

「（。。）ほー、そうか。嫁のご機嫌取りか。」

田嶋君がしつこく絡んでくる。

「もうどうにでも受け取っていいから僕に構わないでくれる？メシ

くらい静かに食べたいんで。」

「俺たちはにぎやかにメシ食った方が楽しいんだけどな。なあ白石。」

「そうだぞ森田。コミュニケーションは大事なんだぞ。」

「。。。。」僕は返事をしなかった。

「まあお前たち夫婦も時間の問題だと思っけどな。あと1年つてとこかな。」

「俺は半年に賭ける！」

「お、いくら賭ける？白石。」

せつかくの焼きたて塩さば定食が味もそっけもなくなってしまうた。

これから毎日こんな奴らと一緒にここで食べなきゃなんないのか？
仕事中はあまり私語をしないから我慢できるけど、こんなランチタイムならまっぴらごめんだ。明日から近くの弁当屋で買って外で食べよう。

僕はほぼ丸呑み状態でごはんをかき込んだ。早くこの場所から逃げたかったからだ。

でもそれが災いして、思いっきりのどにつかえてむせてしまった。

ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！う・・・ゲホッ！ゲホッ！

ごはんを口に入れたままむせたので、かなり嘔出してしまった。
しかもタイミングの悪いことに、ちょうど僕の正面に自分のお膳を運んで来た是枝君これえだの顔にモロぶっかけ状態。

「ああっ！ご、ごめん。ゲホッ！是枝君・・・大丈夫？」

「（「」； いや、大丈夫じゃないけどね。」

後ろからウケまくる田嶋君と白石君。

「ぎゃはははは（「」）ミバンバン。やっぱり森田だ！」

（；Ａ）トホホ・・・これだから僕はダメなんだな。

その時、ごはん粒だらけの顔を拭き取った是枝君が僕に小声で言った。

「気にしなくていいから。森田君もあんな田嶋たちの言葉に耳を貸すんじゃない。」

「え？う、うん。」

是枝君はつい最近、他の部署から移動して来たばかりの人だった。年齢も僕よりひとつ上の30歳。おとなしめで真面目な人という印象がある。

「森田君、僕もね、田嶋たちは大嫌いなんだ。人をコケにする奴らは軽蔑するよ。」

「是枝君。」

なんか嬉しかった。こんな些細なことだけど、この職場にひとり仲間ができたような気がした。

それから、是枝君は立ち上がって、田嶋君たちへ向って言い放った。「君たちは森田君に嫉妬してるだけだろ？」

「なんだと？！」田嶋君が怒り出す。

「僕は彼の結婚式に出てないから、どんな奥さんは知らないけど、超美人なことは社内の噂でも有名だ。だからって森田君に嫉妬するのは男としてみっともないことなんじゃないかな？」

「嫉妬なんぞしてるかよ！」

「じゃあなぜいつも彼の奥さんを話題のおかずにして彼をバカにしてるんだ？」

「そ、そりゃ。。。」

「結局さ、君たちは未だに独身。まあ僕もだけど。とにかく君たちは森田君に負けたんだよ。合コンによく行くそうだけど、彼女を仕留めたのは森田君だけじゃないか。」

「森田はまぐれだ。」白石君が苦々しく言う。

「まぐれでも事実は事実だろ。森田君の良い所はわかる人にはわか

るってことさ。」

「いくら森田の内面が良くなったって、その前に外見でキャンセルされるのが森田だったんだ。それなのに。」

「それなのに？ほら、嫉妬してるのが今その言葉で証明されたじゃないか。」

「チクシヨウ・・是枝め。お前が森田に味方したって何もいいことないんだからな！」

「僕は誰の味方でもないさ。正論を言ってるだけだよ。」

「かつこつけやがって。森田はいずれ嫁さんに捨てられるさ。そして二度とモテるはずがないんだっ！」

そう田嶋が言い放つと、二人は何も言わずに静かに定食を食べ始めた。

「是枝君・・なんかごめん。僕がもっと強かったらいいのに。」

「僕だって強かあないよ。今だって実はかなりの勇気だったんだ（

・・」

「でも言えるだけすごいや。」

僕は彼を尊敬の眼差しで見っていた。

この時の僕はまだ何も知らなかった。

僕の平穏なプライベートが、緻密な陰謀の渦に巻き込まれてゆくな
んて。。

（続く）

その4 恩人・美智代登場

恩人・美智代登場

●森田ゆりかの視点

仕事からの帰宅途中、私の携帯に卓さんからメールが来た。

“ごめんなさい。今日残業だから遅くなります。”

彼のメールはいつも丁寧語。そして何かにつけ謝るクセがついている。

性格上、どうしようもないことなのかもしれないけど、少しぐらいのぶつきらぼうさがあってもいいと思うのは私だけなのかな？

家路に向かう路線バスの中で私は返信をする。

“どのくらい遅くなるの？いずみと先に夕飯食べてるよ？”

間もなくして彼から返信が来る。

“いつもより2時間遅くなるくらいです。先に食べてて下さい。”

(; - -) 3 フウ・確かに彼は優しいけど、私に遠慮し過ぎてストレスが溜まってそうな気がするんだけど。

それとも私がリーダーシップ執りすぎるからかな？彼をもっと前面に押し出してあげれば変わってくれるかな？

そんなことを思いめぐらせながら私はバスから下車すると、夕飯の買出しのために近所のスーパーマーケットに立ち寄った。

とりあえず、家の冷蔵庫に不足している野菜の補充分とお買得品

の品定め。

ちょうどその時、店内ではタイムサービスが始まって、おばさま主婦連合がコーナーにどどつと詰め寄り、押しも押されぬ状態の中で必死に豚バラのブロックを手に入れようとしている。

私はそういうのが苦手。あのパワーの波の中には入ってゆけない。品物をGETした人を遠目で少しうらやましく思いながら、私は他の通路へ移動した。

すると突然、私の視線の死角方向からショッピングカートの中にいきなりボンと豚バラが1パック飛び込んで来た。驚いて振り向く私。

「美智代!!」

「ゆりかお久しぶり。元気？」

「うん。元気だよ。ホントひさしぶりね。この店よく来るの？」

「まあね。この近くに引っ越して来たの。彼と一緒に前のアパートは手狭だね。」

そういえば美智代は半年ほど前から同棲を始めたことをメールで知らされていた。

「二人だけなのに手狭だったの？」

「ほら、あのアパート壁が超うすいしさ、寝室の壁の向こうは隣の家茶の間じゃない？私声大きいし。」

「ちょ・・ちょっと美智代、こんなとこで何言ってるのよ!（^□^ ; A」

私が変わりをチラッと見渡すと、そばで買い物をしている主婦が数人クスクス笑っていた。

「アハハ。アタシとしたことがww」

「いえ、それが美智代よw」

「そのうちゆりかんに遊びに行くね。豚バラはお近づきの印にどろぞろ。」

「うん。ありがと。さすが美智代ね。あのタイムサービスの中に

紛れ込んでたなんて。」

「ええ。奪い取って来たわよ。なんせ彼、今プーだし生活かかってるもん。」

「じゃあこれ返そうか？」

「いいのいいの。いずみちゃんに食べさせてあげて。それとあのチンチクリンにもw」

「相変わらず彼の名前言うてくれないのね（^ー^；）」

「ごめん。なんかこの方が言いやすいの。」

「（o^_^o）ウフツ。それは大目に見るけどね。美智代のおかげで彼と縁りを戻せたご恩は一生忘れないわ。」

「それが良かったんだかどうかかわからないけど、今のゆりかが幸せなら正解だったわけね。」

「ええ。おかげさまで。」

「もう例のクリニクには行つてないんでしょう？」

「もうこりこり。いい先生だったんだけどね。」

「それ聞いて安心したわ。まだ催眠術にかかってるんだったら大変だもんw」

「安心して。これは今の私だから。」

「アタシはどうなるかわかんないけど、成り行きに任せるわ。」

「美智代なら大丈夫よ。」

「修羅場に慣れてるからね。」

「そういう意味じゃなくて・・・」

「わかってるよ。アタシは平気！じゃあ今度、絶対遊びに行くからね。」

「私も遊びに行くかも。」

「うちには来ないで。ヤバイんだ。」

「散らかってるのなんて気にしないよ。」

「それもあるんだけど、うちの彼、昼夜見境なく襲って来るのよ。こないだも宅急便来たとき、アタシ息あがっちゃって・・・」

「Σ—1（；）——そ、その話はもうおしまい！わかった。」

行かないからw
「ごめんね。」

美智代と話すといつも刺激的だ。でもいざというときに機転が利く尊敬すべき友達。

彼女も幸せになつて欲しいな。。

そう思いながら私は100g10円の豚ロースをホクホク顔で眺めていた。

私が卓さんの異変に気づくのはもう少し先のこと。。。

(続く)

その5 仕事にならない残業

仕事にならない残業

●森田卓の視点

「ぶはーっ！すきっ腹には効くわねー！すいませーん。生おかわりー！」

同じ部署の園崎頼子さんそのまきよりこが豪快に中ジョッキを一気飲みした。

「Σ―11（；）――1え？お、おかわりするんですか？」
おごり役の僕は冷や汗ものだ。今月のおこづかいも底をついてしまっ

「あんだバカじゃないの？今は乾杯の1杯でしょ！これからじゃないのっ！」

「はあ・・・しかし。。」

「ちよつとスポンサーしっかりしてよね！あんだが悪いのわかってるでしょ！」

「はい。。確かに僕が迷惑かけましたから。。（- -；）」

「じゃグチグチ言わないの！安い焼き鳥屋で我慢してんだから！ね、三木さん。」

「え、ええ。。（^―^；）」

（；）A、（）トホホ。。参ったなあ。

この場にいるのは僕を含めて3人。この姉御肌的な園崎頼子さんと、逆に控えめでおとなしい三木綾乃さんみきあやの。

まさにさっきまで一緒に残業をしていたメンバーなのです。

園崎さんは言いたいことを平気で言える勝気な人なのはわかって

る。
でも三木さんに関してはまだ何も知らないし、これまで会話もろく

にしていない。

まだ来たばかりだからなのかもしれないけど、僕にも親切にお茶を入れてくれるし好感が持てる。

しかしながらやつと残業が終わったというのに、僕が彼女たちにおごらなければならいなんて本当についてない。

そもそもこうなった原因は、僕たち残業組が会社でやらかしたこと。てゆうか、園崎さんが言ったように僕がやらかしたことにある。(

；

――今から1時間前――

「ε - (^、^ ; ふう・・・のど渴いちゃった。三木さんなんか飲まない？」

「え？あ・・・はい。じゃあ私、下の階の自販機でなんか買って来ます。」

そう言つて彼女がイスから立ち上がるとした。

年齢的にも幾分年下の三木さんが先輩の園崎さんに氣を使つているのだ。

「ちよつと待つて三木さん。」

「はい？」

「ねえ森田、ちよつとひとつ走り行つて来てくれない？」

いきなり僕にお鉢がまわつてきた。

「あー・・・僕もつすぐで終わりそうなんです。」

「終わりそうなら今すぐ行けるじゃない。アタシたちまだまだ終わらないんだからあんたが行くべきでしょ？」

「は、はあ・・・」

なんとも妙な理屈があるものだ。でも彼女に逆らつてもいい事は何もない。

「アタシ、缶コーヒーがいい。エスプレッソね。ホットで。三木さん？」

「私は・・・じゃあカフェオレがいいかな。森田さん、私が行ってもいいですよ?」

「いえ、僕が買ってきますからいいですよ。仕事続けてて下さい。」

「そうよ三木さん。森田に任せとけばいいのよ。森田だってここから離れてこっそり奥さんと携帯で話したりメールしたりしたいはずだから。」

『へ（「ω」——）へぎくツ!・・・当たりだ。やっぱり鋭いな園崎さんは。』

給湯室はあるけれど、上司や来客のためにだけお茶が用意されているだけで、僕たち自身が利用することはまずなかった。まして園崎さんが自分でお茶を入れたり人に入れたりするなど想像もつかない。彼女はそういうキャラなのだ。

少し薄暗い廊下を小走りして、突き当たりのエレベーターに乗り階下に下がる。

そして僕は自分の分と、リクエスト通りの缶コーヒーを買って、来た道を折り返す。

『しまった・・・上着脱いできちゃったよ。。』

これが失敗の素だった。部屋の暖房が効き過ぎて、つい上着を置いて来たため、熱くたぎった缶コーヒーを入れるポケットがなかったのだ。

「あちちちちつ・・・!!」

僕は手の上で3本のホット飲料をお手玉のようにもてあそぶ。人から見たら芸をしてるように見えるかもしれない。だが僕は必死だった。

途中、ズボンのポケットに入れてはみたものの、太ももが火傷しそうですぐにまた出してしまふ始末。

それでもなんとか熱さに耐えながらもエレベーターに乗り、部署の

階に着くまでじつと待つ。

「よしっ！ドアが開いたら部署まで猛ダッシュだ！」

確かにここまでの意気込みは良かった。

だが僕のことだから当然のように今回も空回りしてしまった。

エレベーターのドアが開いた瞬間、予定通りにスタートをきった。もう缶コーヒーが熱くて一刻も早く手放したい。そんな思いが先走りして、前傾姿勢のまま足がもつれて僕は前のめりに廊下に倒れた。当然のように缶コーヒーたちはコロコロと床を転がってゆく。

だがそれだけならまだマシだった。

エスプレッソだけが一直線に部署のドアの前まで勢いよく転がり、更に運の悪いことにちょうどドアから園崎さんが出ようとしているところだったのだ。

彼女は床下など何も気づかずに、ドアから第1歩を踏み出した瞬間、その足がエスプレッソに乗り上げた。

「¥（○）／キヤーーッ！！」

園崎さんの足が前にズルッと開脚して廊下にベチャッ叩き付けられた。

おすもうさんに例えるのも何だけど、まさに股割り状態。

「うぐっ！！・今グキッっていったああ（ＴＴ）」

そのあと彼女はバランスが取れなくなり、足を開いたまま後方へ倒れた。

僕は目のやり場に困った。たくしあげられた制服のスカートの中身は丸見え。

すぐに半身だけ起き上がったものの、どうやら彼女は自分の内ももの筋を痛めたようで手で揉んでいる。

「痛あああ！森田のバカあ！筋違えちゃったかもしれないでしょ！」

「す、すいません。。僕どうすれば・・・さすってあげたり・・・できないですね?」

「当たり前でしょ! えっち!!」

「(; ˘ ˘) ごめんなさい。。」

「(。○。;) ハッ!」

園崎さんはすぐに開いている足を閉じて僕を睨んだ。

「森田、ずっとアタシのパンツ見てたでしょ?」

「いえいえいえいえ、とんでもない。」

「じゃ全然見てないってわけ?」

「はぁ・・・目を伏せてたんで。。」

「見たたから目を伏せたんでしょ!」

「いやその・・・それは成り行きで・・・」

「全くもっつ!」

騒ぎを聞きつけた三木さんが中から出てきて、園崎さんに肩を貸して起こした。

「大丈夫ですか?」

「・・・ええ、まあなんとか歩けるわ。ありがとう。」

僕は園崎さんにかけてあげる言葉が何も思い浮かばなかった。ただ、何か言わなくてはいけないと漠然とした思いがあって、廊下は寒いから中に入りましょう。」

と言ってみた。

「あんたのせいでしょうがっ!! へ(、(ノムキイ」

「そうでした。ハハ(- ˘ ˘)」

(続く)

その6 お詫びのやきとり接待

お詫びのやきとり接待

●森田卓の視点

こうして僕はお詫びの印に、この焼きとり屋さんで1杯おごつて
るというわけなのだ。

園崎さんは酒豪で有名だから、当然1杯で済むはずもないことはわ
かってるんだけど（＾―＾；）。

一方、三木さんはこの場でも口数少なくしておとなしかったが、特
に緊張してるふうでもなく、表情は楽しそうに飲んでいた。
そんな彼女が囁くように僕に話しかける。

「森田さん、私の分は自分で払いますから心配しないで下さい。」

「えっ？ いいんですか？」

でもそれを聞き逃すはずのない園崎頼子さん。（「D」；；；

「三木さん、ダメだって！ 森田に甘い顔してちゃセクハラされるよ

！」

「し、しませんよっ！ 僕はっ（＾□＾；A」

「わかってるわよ。ふざけただけよ。あんたにそんな度胸あるはず
ないじゃん。」

「（ノ――ノ）ノコケッ！！」

「アタシはあんたに男としての甲斐性を勉強させてるんだからね。」

「は、はあ。。」

「そんなんでよくあんたが結婚できたかと思うと不思議でしょうが
ないわ。ねえ三木さん。そう思わない？」

「わ、私まだこの部署に来て日が浅いので・・・よくわかりません。」

「

「そのうちわかるわよ。」

園崎さんは酔いが回ると毒舌が増すという社内での評判なので、

僕は早くお開きにしたいくてたまらなかった。

「おい森田！きれいな奥さんもらったからって調子ぶっこいてんじゃないわよっ！」

別に調子ぶっこいてなんかいないんだけどなあ。。（「」；

「あ、そうだ！森田、クリーニング代はここのお勘定とは別だからね！」

「え？一緒じゃないんですか？」

「何図々しいこと言ってるのよっ！人の制服まで汚しておいてこんな三流の店でチャラにする気？」

彼女の声は大きかった。僕はすぐに焼き鳥屋のご主人の顔を覗くと、なぜか僕に向って睨みをきかせていた。

なんで僕になんだよお・・（「」）園崎さんが言ったじゃんかあ。。

「ありがたく思いなさい。痛めた足の治療代までは取らないから。」

「なんか取り立てやに言われてるみたいだ。」

「なんですって?！」

「うわっ！小声で言ったのに聞こえてた（^□^；A」

「制服についたコーヒーのシミは誰のせい？」

「は、はい・・それは僕の・・」

「声が小さいっ！」

「僕のせいですっ!。。（。´Д。）。」

「じゃ弁償するのが当然よね？」

「はい、そういうことになりますですね。。（；- -。）」

「よろしい。じゃ飲みなおし！オヤジさん、生おかわり！」

「Σ—11（「」）——1知らないうちにもう飲み干してるう」。

ほんと僕はいつまでたってもドジが治らない。熱い缶コーヒーを廊下にはら撒いたあの後も、更に追い討ちをかけるような失態を繰り返していたのだった。

（続く）

その7 陰謀のきざし

陰謀のきざし

● 森田卓の視点

「あーもうっ！仕事する気なんて失せちゃったわ！」

自分のデスクに戻った園崎さんの怒りはそう簡単に収まるものではなかった。

「ホントにすいません。。でもあのう・・・この缶コーヒードうしまししょう?」

「そんなのもういらぬ！ 缶だつて凹んでるし。」

「それは園崎さんが踏んだから・・・」

「誰のせいで踏んだと思うてんのよっ！、（、ノムキイ」

「あ・・僕でした。ハハ（^| ^;）」

「あんたって腰は低いけど、癪に障ることもよく言ってるのよ！ 反省しなさい！」

「はい。」
「;」
「Д、」
「」

また怒られてしまった。僕はため息をつきながら、彼女の席からひとつ離れた自分の席に座り、自分用を買った缶コーヒーを開けてグツと一息口に入れた。

「……、……、……」
（；；Ж；；）ブツ
！！まだあちいっ！！

これが更なる間違いの元だった。コーヒーがあまりにも熱く、反射的に噴き出してしまったのだ。でもまだこれだけなら人に迷惑はかけない。

僕は目の前にある大事な書類の山を見て、噴き出す直前、とつさに首を横にそらしたまでではないけど、その先に園崎さんが立っている

ことには気づかなかった。

制服にコーヒ―が飛び散ったまま呆然と立ち尽くす園崎さん。

「森田・・・（――）」

でも彼女は悲鳴をあげるところか、目をギラギラさせながら笑みを浮かべている。それが余計に恐怖感を倍増させた。

彼女はその後、怒りを爆発させることもなく、深い深呼吸を何度も繰り返したのち、少し震えた言葉ながらゆっくりとした口調で話した。

自分の怒りを懸命に封じ込めてるといった感じた。

「三木さんが頼んだカフェオレを取りに来ようと思ったら・・・あんなホントによくやってくれるわね（――）」

園崎さんのこめかみがピクピク動いているのがわかる。

「す、すいません。。謝ってばかりでまたまたすいませんけど。。」

「もう謝られ飽きたわ。森田を殴っても仕方ないし。」

「じゃあ僕はどうしたら・・・？」

「この残業終わったら飲みに行くから全額おごりなさい。いいわね？」

「いや、でも僕・・・手持ちのお金がありません。給料まであと1週間もたさないと。」

「お嫁さんに頭下げてもらえばいいでしょ！そんなに奥さんてケチなのっ？」

「いえ、うちのお嫁さんは言えばすぐお金もくれるんですけど、自分のことを犠牲にして僕に尽くしてくれるんで、なんか逆に悪くて。」

「あっそ！別にあんたんちのノロケ話なんか聞きたくないわよ！さつさと仕事終わらせて飲みに行くわよ！三木さんもね。」

「私も・・・ですか？」

「そうよ。都合悪い？アタシが森田とツーショットで飲みに行けるはずないじゃない！超恥ずかしい！」

「でも・私は森田さんに迷惑かけられてないし。」

「いつか間違いなく迷惑かけられるから前払いしてもらいなさい。」
三木さんは困ったように僕の方を見つめる。

「い、いいですよ。僕がみなさんの分、おごらせてもらいますから（^ー^;）」

「ね、森田もこう言ってるし。」

「というか、園崎さんに言われたようなもんだけど。」

「はあ・早く園崎さん、飲み終わらないかなあ。」

家でゆりかがごはん作ってくれてるのに早く帰れないなんて。。

やきとり屋で小1時間ほど経ったころ、園崎の携帯に着信があり、彼女は一旦外に出て電話にでた。

「園崎さんですね。うまくおびき寄せてくれたようね。ありがとう。」

「おびき寄せたというか、森田にはいつも迷惑かけられてるので、今日もアタシが仕掛ける前に彼が墓穴を掘ったような感じなんですよ。」

「??意味がわからないけど。」

「彼と行動を共にしたらわかると思います。とにかく森田には精神的にイライラさせられるので気をつけて下さい。」

「ええ、じゃあとは私が引き継ぐわ。ありがとう。お金は50万振り込んでおくから。」

「ありがとうございます。ちなみに・なんでこんなことするのか理由は聞かない方がいいんですよね？」

「お金欲しいんならね。」

「わかりました。。」

『ではこれで。』

(続く)

その8 その頃の森田家

その頃の森田家

●森田ゆりかの視点

卓^{すぐる}さんの帰りが予定より遅い。

残業が更に長引いちちゃってるのかな？もう一度メールしてみようか。。

でもあまりしつこいときつと卓さんに迷惑かけるかもしれないし。うん・・やっぱりもう少し経ってからメールしてみよう。

私はリビングでバランスボールに乗りながらそんなことを思っていた。

今日はあまり面白いテレビ番組もないし、いつも聴いてる癒しのCDをかけるとすぐ眠くなってしまう。

結婚して卓さんやいずみと3人で一緒に暮らすようになってから読書もしなくなった。

『なんか集中力に欠けるわ。。雑念も多いし。。』

そう自分で自覚していた通り、私はバランスボールで安定感をなくし、床にしりもちをついてしまった。

「キャハハハ！ママかつこ悪うい。」

知らぬ間にいずみが部屋からリビングに来ていた。

「あのね、けっこう難しいのよこれ。足浮かせとくのって。」

「コケそうになったら無理しないで足着けばいいのに。」

「なんとか耐えてみたかったの！」

「あんまりドジると卓くんに似てきちゃうよママ。」

「だから難しいんだって！」

この1年半、いずみは卓さんのことをまだ一度も“パパ”ともお父さん”とも呼んでいなかった。

それは決して彼のことが嫌いなわけではない。むしろ友達感覚で家では楽しく会話している。だからいずみは彼のことを卓くんと言う。

でもこれはあまり良いことではないと思い始めている私。ある程度、父親の威厳がないと家庭がまとまらない気もする。

いずみに過去何回かは言った。卓くんじゃなくて、パパと呼びなさいと。でも彼女は“卓くん”が言いやすいからと拒否した。

さすがに私はいずみを怒ってまで、強制的に呼び方を変更させることはできずに現在に至っている。

「あ、そうだいずみ。今度の日曜、父親参観なんですって？」

「・・・え？誰から聞いたの？」

「連絡網で玉木さんから電話が来たときに偶然聞いたのよ。お知らせのプリントもあるんでしょ？」

「・・・なくしちゃった。」

「全くもう。だったら口ですぐ言えばいいのに。」

いずみはやや下に顔を向けてモジモジしていた。

「ママ・参観日にはママが来ることできないの？」

「えっ？なんでよ？パパだって休みよ。きつと行ってくれるわよ。」

「・・・ママの方がいい。」

「Σ（・・・*エエッ！？どうして？パパが嫌いになったの？」

「そうじゃないけど。。学校には来て欲しくないんだもん。」

「なんでそんなこと言うの？嬉しくないの？」

いずみは少し間をおいてから、言いづらそうに話し出した。

「だって・・・卓くんブサイクなんだもん。」

「ブ、ブサイクって・・・（ハ―ハ；）人は顔じゃないのよいずみ！」

「でも、みずほちゃんのパパや奈緒美ちゃんのパパはカッコ良くて

優しいもん。」

「うちのパパだって優しいでしょ！」

「でもチンチクリンな顔だもん。奈緒美ちゃんが卓くん見たときそう言ってた。」

「そんなのいつ見たのよ？」

「前にみんなでジャスコに行ったときあったでしょ。」

「え？ええ。行ったわね。で？」

「そのとき奈緒美ちゃんの家族と偶然会ったの。」

「ママ知らないわよ。そんなことあったの。」

「ママと卓くんはバーゲンに必死だったもん。それを奈緒美ちゃんに見られてたんだよ。」

「そのとき言ってくれたらご両親にもご挨拶したのに。」

「でね、奈緒美ちゃんが言ったの。いずみちゃんのパパってチンチクリンな顔だねって。」

「・・・そう（^ー^;）」

「ねえ、卓くんが学校来たら恥ずかしいよお。」

「はつきり言うのね） - ;」

「卓くんは仕事っていうことにしてママが来て。お願い。」

（ ; - - ） 「 3 フウ。私はため息をついた。

「いずみ、他のお父さん達だってカッコいい人ばかりじゃないのよ。」

「ママ見たことあるの？他の子のお父さん。」

「ええ、あるわよ。去年のいずみの運動会のとときかね。」

「へえ、そのときだった？」

「結構、お腹の出てるお父さんが多かったわよ。」

「それだけなら平気だけど、卓くんてチビ・デブ・ハゲなんだもん。」

「ハゲって言わないの！パパは短髪なだけなの！」

「はあい。」

「大丈夫よ。パパは人前ではおとなしいから目立たないわよ。」
「そうかなあ。。。」

その後、卓さんが酔って帰って来たのは、こんな会話から1時間程経った頃だった。

(続く)

その9 隠しごと

隠しごと

●森田卓の視点

帰宅が遅くなった僕は今、ゆりかちゃ・いや、ゆりかが作ってくれていた晩ごはんを黙々と食べている。

さすがにお酒や焼きとりを食べた後だから食欲があるはずもないんだけど、彼女が用意してくれたごはんを無駄にすることなんて申し訳なくてできない。

お腹が苦しくても全部食べてあげなくちゃ・

そういつた僕の表情がどうやらゆりかに見透かされたらしい。

「卓さん、無理して食べなくていいよ。お腹減ってないんでしょ？」

「・・そ、そんなことないよ（^ー^;）として？」

「だって卓さん、食べながらため息ついてるじゃない。」

「・・それは疲れてるから。」

「いつも早食いなのに今日はゆっくりだし。」

「味わって食べたいんだよ（^ー^;）」

「じゃあもつとおかわりする？」

「う・うん。も、もらおっかなあ。」

ゆりかはやれやれといった顔で僕を見つめている。もうバレバレかもしれない。それにしても彼女はどんな表情をしても可愛い。

（*^・^*）

「お酒飲んで来たんでしょ？匂いでわかるよ。」

「へ（ω）——（へぎくツ！ちよ、ちよつと無理矢理誘われて1杯だけ。」

「何食べたの？」

「いや僕はビール1杯だけ・・・」

「焼きとりおいしかった？」

「Σ―11（ ; ）――1な、なんでわかるの？見てたの？」

「いいえ、そういう匂いがスーツからしたただけよ。どうやら当たり前w」

「すごい鼻だ・・・」

「ビールは何杯飲んだの？」

「いやだから1杯。」

「え？聞こえない。何杯だつて？」

「・・・中ジョッキで4杯です。」

「（o^ - ^o）ウフツ。正直でよろしい！」

「ごめんね。ゆりかちゃ・ゆりか。」

不思議そうな顔をする彼女。

「どうして謝るの？お仕事の付き合いなら仕方ないじゃない。私、そんなことで怒ったりしたことある？」

「ないけど。」

「卓さん、私ってそんなに怖い女？」

「それはないけど。」

「ならどんなことでも正直に言つて。隠し事されると私悲しい。」

「ご、ごめん。ただ、僕のためにせっかく用意してくれた食事に手をつけないなんてできなかったんだ。」

「そう・・・そう思ってくれてたんなら嬉しいけど、食べなかったら明日の朝に出すだけだから構わないのよ。」

「そ、そうだったのか。（ ; ）」

「じゃこの話はもう終わりね。それより今度の日曜にいずみの父親参観があるのよ。」

「（ ; ）！えっ？」

「そんなにびっくりするもん？」

「そ、そりゃ驚くよ。僕が行かなきゃなんないんだろ？」

「一応決まりは父親だから私が行くよりはね。」

「うわっ、もう緊張して来た。」

「じゃあ行ってくれるのね？」

「行かなくていいんなら行かないけどw」

「ダメよ。いずみの勉強ぶりもしっかり見てやって。本当の父親以上に立派な父親になってあげて。」

「なんかプレッシャーだなあ（「」；ヒヤリ」

「別に卓さんが手をあげて発言するわけじゃないから。」

「そりゃそうだけど。」

僕の苦手な公の場。参観日なんて未知の世界。当日まで眠れない日々が続きそうだ。

それにしてもゆりかは僕のことをどれだけ期待してるんだろう？もし僕が彼女の期待に添えなかったら、僕なんて愛想尽かされてしまうのかな？

ゆりかは僕に何でも正直に話して欲しいと言った。

焼きとり屋のことはバレたけど、その後の出来事も話した方がいいのかな？

大したことじゃないから隠し事にもならないし、別にいつか・ウソもついてるわけじゃないし。。

●森田ゆりかの視点

洗い物を片付けた後、私は卓さんが着ていた焼きとり臭いスーツの匂いを消臭スプレーで消そうとしていた。

「けっこっ、匂いって染み込むものね。」

そう思いながらスプレーを噴射する直前、私はかすかに別な匂いを嗅ぎ取った。

「・・・香水。。。女？」

(続
く)

その10 作戦決行・・・のはずが。

作戦決行・・・のはずが。

その夜、倉沢まりもは寝付けなかった。寝付けるはずもなかった。
「なんなのよあの男は・・・もうっ！」

そんな悔しさでいっぱい思いが彼女を寝かせなかったのだ。

午前3時20分・・・もう何度寝返りをしただろう。安定剤でも飲もうか？でも今からでは朝が起きなくなる。

「参ったわ・・・アタシがこんな目にあうなんて。」

まりもはつくづく園崎頼子が言った言葉を思い知らされた。

“ 森田には精神的にイライラさせられる ”

まさに今夜はそれだった。しかもまりもは森田卓をオトセなかった。つまりあんなブ男にコケにされたのも同然だ。

今まで男を誘惑することに失敗したことがない彼女にとっては屈辱な出来事。

ベッドの中で忘れようとすればするほど、鮮明にそのときの光景が閉じた目の中で再生されていた。

――約5時間程前――

森田卓・園崎頼子・三木綾乃の面々は、飲み会がお開きになるとすぐに現地解散となり、それぞれの家路へと消えて行った。

森田卓の足取りは重かった。なんせ今日はおごり役。少ないこづかいの穴埋めをこれからどうしようかと悩みながら歩いていた。

そこへ前方から少しフラつきながら歩いて来たのが倉沢まりも。

そして森田とすれ違う10メートル手前付近でよろめいて倒れる演

技をする。

ドラマでありがちなベタな方法ではあるが、これが森田に近づける確実な策だとまりもは思っていた。

仮に逆ナンなんかしても疑われるに決まっている。事前調査で多少彼には自虐の気があることがわかつている。

つまり自分のルックスにモテる要素などないことくらい身の程を知っているということだ。

他の手としては、仕事面での付き合いから徐々に・・・という作戦もあるが時間がかかりすぎる。森田ごときの男にそんな時間は割いてられない。

倉沢まりもは予定通りに路上で気分悪そうにうずくまり、地面に落としたバッグの中身も撒き散らすようにした。

『さあ森田・早く私を助けに来なさい。』（「うふふ・」）
しかし近づいてくる足音は、すれ違いざまに大きくなったかと思うと、そのまま徐々に小さくなって行く。

『（・・）エッ・・・・・・・・？』

そう、森田は全くまりもに気づかずに通り過ぎてしまったのだ。

『Σ―11（「」）――1ちよつと何なのよっ！！信じられない！！』

このままじゃ、まりもは単なるおバカ。彼女はすかさず“助けを求めるセリフ”を去ってゆく森田の背中に浴びせる。

「すいませえくん。ちよつと誰か・・・」

だがこんな中途半端な声では過ぎ去る森田を止めることなどできない。非常に不自然ではあるが、まりもは駆け足で彼の背後まで近寄ってから改めてその場で倒れる。

しかし無残にもそれすら気づかれない。彼女は怒り心頭して語気を強めて叫ぶ。

「ちよつとそこのあんたっ！！助けてっばっ！！」もう演技など忘れていた。

「・・・えっ？」やつと立ち止まり、まりもに気づいて近寄って来る森田。

「ど、どうかしましたか？」

「ちょっと目まいがして・・・うつ！足もくじいちゃったみたい。」

「

まりもはすぐに弱々しい口調に戻った。

「はあ。。えと・・・僕はどうしたらいいんでしょう？」

まりもはあぜんとした。

「どうしたらって・・・立てないし。。」

「誰か呼んできましょうか？」

「あのー・・・誰かじゃなくてあなたが私を立てて下さらない？」

「ーハハ；）」

「あ、これは気づきませんで。。」

気づけよこのバカ男っ！、（、（ノ

内心そう思ったものの、態度に出すわけにはいかないまりも。

森田卓は彼女に肩を貸し、ゆっくり起き上がる。まりもはわざと彼に体を預けるようにもたれかかりながら立ち上がる。

そして再びよろめいて森田に抱きつく。まさにドラマのワンシーンかと思いきや、それにびっくりした森田は慌てて自分の体を引いてしまい、まりもはまたび地面に崩れ落ちる。

「痛ったあああい（Ｔ　Ｔ）」

「ああー、す、すいませーん。僕としたことが。。」

「もうっ！男ならちゃんと支えて下さらない？！」

「は、はいっ・・・」

森田は再び彼女を起こす。今度は丁寧な。

「あの・・・僕、ドジがクセみたいなもので・・・ホントにすみません。」

「

「いえ、いいのよ。ちゃんと助けてもらったし・いきなり声かけてごめんなさい。あなたが怖い人だったら私、大変な目に遭ったわ。優しい人で良かった。」

「まりもは心無いことを言うのが得意中の得意だ。」

「そ、そんなことは。」

「寒いわ。ゆっくりだったら歩けるからこのまま肩を貸して下さらない？」

「ええ、それはいいんですけど。」

「けど何？私とじゃ嫌？」

「そうじゃなくて・・ひとつ聞いてもいいですか？」

「??ええ?なにかしら？」

「あなたはここで倒れたのに、バッグの中身が向こうに散らばってるのはなんでかなあと思って。」

「Σ―11(;)―11」

「まあ、とにかく僕が拾って来ましょう。ここにいて下さいね。」

「え、ええ(^ □ ^ ; A」

森田は小走りで10メートルほど離れた所でバッグを拾い上げ、まわりに散らばった中身も丁寧に回収した。

『私としたことが・・ちょっとミスったわ。』

(続く)

その11 眠れぬ森田卓

眠れぬ森田卓

●森田卓の視点

僕は寝室で横になりながら考え込んでいた。

ゆりかはとなりで静かな寝息を立てて気持ち良さそうに寝ている。

『いつも可愛い寝顔だな。』（*^・^*）』

僕にはゆりかという素晴らしい女性がいてホント幸せだと思う。だから逆にこの幸せが夢じゃないかと急に怖くなるときもある。もし夢ならどうかいつまでも覚めないで欲しいと。

そして今まさにそんな不安が一気に押し寄せてきていた。

『こんなミテクレの悪い僕を選んでくれて、ゆりか自身は幸せを感じてくれるのかな？彼女は後悔してないんだろうか？』

僕はまだゆりかを守るなんて立派なことが言えた義理じゃない。むしろこの前の下着泥棒の一件といい、彼女に守られ、救われてるくらいだ。

愛想を尽かされたとしても文句言える立場じゃない。ドジが治らない今でもゆりかは僕を支えてくれている。なんでだろう？

僕は更に深く考え込んでいった。

考えれば考えるほど悪いことばかりが思いつく。

ゆりかはまだ暗示から解けていないんじゃないか？

最初の出会い合コンでいきなり僕に告白してくれたことから始まった。まさに夢のような話。でもそこから間もなくして僕は奈落

のどん底に叩き落された。

でも考えてみれば本来はこれが当然の形なんだ。暗示から覚めれば僕を好きになる要素なんてない。それなのにゆりかは再び僕のところに戻って来てくれた。

『まさか・・・暗示が解けてないんじゃないかと、再び催眠をかけられたんじゃない？』

そう思い始めると更なる不安と恐怖が僕を襲う。

『ダメだダメだ！プラス思考でなきゃダメだ！もつと良い解釈すりゃなんてことないんだ。過去にあった忌まわしい暗示のことなんて断ち切ってしまうおう！』

僕はふと、今夜の帰り道での出来事を思い出した。

『あのときだつて・・・そうさ、きっと僕は意外とモテるのさ。倒れた女性を起こしたくらいで、相手から携帯番号とメルアドを教えてもらえるんだ。』

僕は改めてあの場面のことを頭の中で再生した。

「一応、全部拾ったと思いますけど・・・バッグの中身に不足してるものはないですか？」

「ええと・・・あつ！アレが・・・ないわ。」

「アレ・・・ですか？」

「ええ・・・アレが・・・その・・・」

その綺麗な女性は路上をキョロキョロ見渡した。僕も釣られて一緒に彼女の目線を追う。

すると二人同時に、落ちている“ある物”を発見して声を出した。
「あつたー!!」

綺麗な女性はそれを見つけるや否や、素早く拾い上げ少し顔を赤

らめている。そう、彼女が拾った自分の持ち物は避妊具だったからだ。

僕はどうリアクションすればいいのかわからないのが災いして、逆にとんでもないことを口に出してしまった。

「それって、丈夫そうでいい品物ですね（^| ^;）」

「（*v・v）恥ずかしい・・・」

「（。○。;）ハッ！ご、ごめんなさい。失礼なことを。」

「い、いえ、いいんです。落とした私が悪いんだもの。あなたはとても親切で優しい人だわ。」

「いえいえ、僕なんか・・・」

「あの、もし良かったらお名前教えてくれませんか？私は倉沢まりもといします。」

「まりも・・・さんですか？ペンネームとか？」

「いえ、本名です（^| ^;）昔からよくそう言われるんですよ。」

「すみません。また失礼なことを・・・」

「いいのいいの。もう何十回も言われてるから。私、釧路出身なの。阿寒湖の近くに住んでたので両親が。単純よね。」

「あーはいはい、なるほどねえ。阿寒と言えばまりもですもんねえ。」

「そんなに感心することでもないと思うけど） - ;」

「いえいえ、とても素敵な名前で・・・」

「ありがとう。で、あなたのお名前は？」

「僕なんか名乗るほどでも。」

「あのー、私が名乗ったんだからあなたも教えてくれない？（^| ^;）」

「あー・・・それもそうですね。不公平ですもんね。」

「ええ。」

「森田卓って言います。でも僕、名前の由来は親から聞いたことないですよ?」

「誰もそこまで教えてくれとは言ってませんから。(´ー´) ;」
「あ、そうでしたか。なら良かった。」

その後、僕はまりもさんを少し先の大通りまで肩を貸して、タクシーを呼び止めることにした。その短い道中、なぜかまりもさんは僕に果敢に話しかけてくる。というか要求してくる。

「お願い。森田さんも私の肩に腕をまわして支えて。でなきゃ私、倒れちゃう。」

「は、はあ・・・そういうもんですかねえ？」

僕はとりあえず言われるがままにしてみた。

「森田さん、手が震えてるわ。緊張しなくてもいいよ。(o^ ^o) ウフツ」

別に緊張などしていなかった。どのくらいの力で支えたらいいのが要領がつかめないだけだった。

まりもさんが僕にどんどん寄りかかってくる。よっぱど足が痛いのかな？

僕はあまり背が高くないから、彼女の吐息が僕の顔のすぐ横に吹きかかる。

「森田さんの好きな女性のタイプってどんな人かしら？」

「んっ・・・どっちゃかって言えば、可愛いより綺麗系ってゆうか・・・」

僕は横のまりもさんをチラ見すると、彼女は僕の顔をじっと見ながら一緒に歩いていた。

「私は森田さんのタイプに当てハマるかしら？」

「そりゃ、まりもさんは見ただけで綺麗な方ですから。。」

「じゃ当てはまるのね。嬉しいわ。」

「は、はあ・・・(^ー^;)」

「こんなに親切にしていただいて、私に何かお礼をさせて下さいね。」

「いやそんなことは・・・」

まりもさんはおもむろにバッグから携帯を取り出す。

「私のメルアド、赤外線送信するから森田さんのと交換してくれませんか？後日またお礼をさせていただくのに、会う約束をして欲しいの。」

「はあ、それは構いませんが・・・」

こうして僕は倉沢まりもさんとアドレス交換をしたのだった。

でもこれって本当に僕はモテたのかな？僕のどこを気に入ってくれたのかな？暗いから僕の顔がわからなかったのかもしれない。それに彼女がタクシーに乗ったときはなぜか機嫌悪くなつてたし。

まあ、想像してもしようがないからな。もう寝ないと明日の仕事に支障が出そうだ。

ふとんの中でずっと考え込んでいた僕は、次第に心地よい睡魔と共に深い眠りに就いていった。

一方、自室ベッドの中の倉沢まりもは未だ寝付けないままだった。

「私を好きなタイプだと認めておきながら・・・あのブ男！！」

そう、まりもが怒っている原因は、森田と携帯メルアドを交換してから後の会話。

「私って森田さんにとって魅力的な女に見える？」

「えと・・・その・・・はつきり言うの苦手なんですが・・・」

「構わないわ。タイプに当てハマるって言ってくれたじゃない。」

「ええ、まりもさんはお綺麗なのは間違いないんですけど・・・」

「けど？」

「魅力を感じないってゆうか・・・」

ガ ΣΣ（。D；） ン！！ガ ΣΣ（。D；）

ン！！

まりもは大ショックだった。こんなこと言われたのは生まれて初めてだ。

「意味わかんないわ。タイプなのに魅力感じないってどういうこと？」

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。まりもさんのせいではないんです。」

「余計わかんない！」

「あの・・僕にはお嫁さんがいまして。」

「ああ、そういうことね。お嫁さんに気を使ってるのね。私は相手が既婚者でも独身でも好きになっただけ関係ないタイプなの。」

「そういう人もいますよね。再現ドラマでよく観ます。」

「再現って・・（^ー^；でも奥さんがいるだけで私の魅力って感じないものなの？」

「そりやうちのお嫁さんより素敵な女性がいたら感じるかもしれないませんが・・あ（。〇。；）すいません。（「ー；ヒヤリ」

倉沢まりもは凍りついた。

「そ、そんなに森田さんの奥さんて綺麗な人なの？」

「え、ええ。自慢じゃないけどすごく綺麗なんです。」

「それって自慢よ（ - ；」

「アハハハ（^□^；A そうでしたか。」

「ねえ、奥さんて私より綺麗な人？私・・ひょっとして森田さんのこんな優しいところ、好きになっちゃったかも。」

まりもが森田の耳元で囁くような悩ましい声で誘惑しても、鈍感な彼は躊躇なく言い放った。

「うちのゆりかより上をいく女性はいないんじゃないかなあ・・」

まりもの嫉妬心に火がついた。

「森田ゆりか・・・どれだけの女が知らないけど、超ム力つく！！」

ある人物から依頼されて初めて森田卓を尾行したとき、車の中から一度だけゆりかの後ろ姿を目撃したことがある。（その1参照）でもそのときは卓ばかりに気を取られて、ゆりかに目はいかなかった。

『ふんっ！ブ男の目なんてイかれてるだけよ！あんな男に私より上の女がつくはずないわ！』

怒り心頭のまりもはタクシーを捕まえて早々に乗り込み、森田に演技の挨拶をしてその場を跡にしたのである。

『森田ゆりか・・・』ベッドの中で目を見開いて呟くまりも。

今の彼女の心境は、指令どおりに森田卓をターゲットにするよりも、ゆりかを苦しめてやろうという気持ちが勝っていた。

（続く）

その12 ゆりかの朝

ゆりかの朝

●森田ゆりかの視点

「あの・・ゆりかちゃん。」

卓さんが真面目な顔で話しかけてくる。そのとき私は不思議に思った。

やっと私の名前を呼び捨てにすることに慣れてきたかと思ってたのに、また“ちゃん付け”に戻っている。

卓さんはそんなことなど気にも留めず、続けてしゃべり出した。

「あのさ、僕・・すごく不器用だからさ・・同時に二人も愛せないなんだ。」

(・―・) エッ・・・・・？なに？なんのこと？何を言ってるの？この人

突然の彼の言葉。私はすぐに理解することができず、言葉さえも発することができないでいる。

「ゆりかちゃん聞いている？固まってるよ？」

卓さんの言うとおり、私の口は半開きのまま呆然と彼を見ていた。

「あの・・卓さん・・よくわからないんだけど・・どういうこと？」
やっこの思いで口から出た言葉だった。

「ごめんね。僕、ゆりかちゃんのこと大好きなんだ。ホントだよ。だけど・・」

「だけど・・なんなの？」

「だけど・・ゆりかちゃんより超好きな人がいるんだ。」

ガ ΣΣ(。D ;) ン！！ガ ΣΣ(。D ;)

ン!

「ええええええ……?! ウソでしょおおお……?」
私の雄たけびもよそに卓さんはなぜか照れ笑いしている。
実は玄関の外に待たせてるんだ。連れて来るね。」

$\frac{\Sigma}{1} \cup$; — 1 な、なんでよおおおゝゝ！！！！

「ちよ……ちよつと待つて卓さ……」

私が言い終わらないうちに彼は小走りに玄関へ消えて行く。

『一体、何が起こってるの？何でいきなりこんなことに・・・それに何で卓さんはそんな人私に会わそうとしてるの？』

この短い時間に急に対しても頭がパニックでわからない。

「ゆりかちゃんお待たせー。ほら入って。」

卓さんに誘導されてリビングに現れた人を見て私は仰天した。

身長は180センチはあるかもしれない。コートを着ているが明らかに肩幅が広く胸板も厚い。

「どう？ 僕の超好きな薫ちゃんだよ。」

「……す、卓さん。その人……もしかしてニューハーフじゃ。」

「すごい！さすがゆりちゃん、よくわかったね！僕、頼りがいのある人に弱いんだよ。」

$$\vdots \quad \vdots \quad \vdots \quad \vdots$$

「ごめんね。ゆりかちゃんとはこのまま仲の良い友達で・・・」

「いやあああああああああああ！！！」

私は気が狂ったように絶叫した。

「なんで・なんで私がニューハーフに卓さんを取られるのよおお

おおー！！」

と、ここでハッと目が覚めた。

「夢。。。」

ベッドでしばし呆然としている私。時計を見るとまだ午前4時20分。

絶叫したのは夢の中だけだったのだろうか？となりで卓さんが爆睡している。

そんな彼の寝顔を見ながら私はホッと胸を撫で下ろしていた。

『私ってバカみたい。夢でこんなオチをつけるなんて。』
自分で自分に失笑していた。

『・・・きつと彼のスーツから匂った香水のせいかもしれない。私、無意識に疑り深くなってたんだ。』

それからの私は寝付くこともできずにいたので、起きてお弁当作りを再開しようと思い立った。

2時間後・・・

「（――）（・・・）（〇）ふぁ・・・おはよおママ。」

いずみがパジャマのままキッチンに入ってきた。

「おはよう。ご飯できてるから早く顔洗って来なさい。」

「ねえママ・・・」

「え？なあに？」

「何してんの？」

いずみが不思議そうに私の作業を見ている。

「見ればわかるでしょ。パパのお弁当作ってるの。」

「もうやめたんじゃないの？」

「一旦はね。でもやっぱり作ることにしたの。」

「ふうん。二つあるけど一つはアタシの？」

「ママのよー！いずみは給食でしょ！今日のメニューはたしかクリー

ムシチューじゃなかった？」

「そうだけど・・・このお弁当のおかずも食べたいなあ。」

「食卓に準備してるから朝ごはんに食べなさい。」

それを聞くと、今まで寝ぼけ眼だったいずみが瞬時に目を見開き、素早く食卓へ駆け寄り歓喜の声をあげる。

「(@^ ^@)わぁーい。エビチリがあるぅぅ」

「ちゃんと顔洗って着替えてからね！」

「(・ー・)ノはーい。あ、そうだ。それはそうとママ？」

「ん？まだ何かあるの？」

「卓くに言っただの？」

「何を？」

「ほら父親参観のこと。」

「ああ、そのことなら昨日パパが帰って来てから言っただよ。」

「行きたくないと言わなかった？」

「ちゃんと行くって言っただよ(^ー^;)」

「エエエエ(´Д｀)エエエエ・・・やだなあ。。。」

「そんなこと言わないの。」

ちようどその時、卓さんが部屋から起きてきた。いずみの言葉の語尾だけ聞こえたようだ。

「ん？何かやなことがあったのかい？いずみちゃん。」

「うわっ！卓くんだった！(´・`・´)なんでもないよ。じゃ顔洗ってきまーす。」

いずみは一目散に洗面所へ走って行った。それを不思議そうに見つめる卓さん。

「学校でイジメられたりしてるのかな？」と、心配そうに私に聞いてくる。

「うつん。そんなこととは全然違うの。それよりどう？昨日の酔いは覚めた？」

「うつん。まだ少し眠いけどね。ゆりかは随分早く起きたん・・・あつ！」

「どうしたの？」

「もしかしてそれ弁当？」

「もしかしくてもお弁当よ（＾―＾；）私と卓さんのね。」

「もう作らなくてもいいって言ったはずだと思ったんだけど・・・僕まだ言ってなかったっけ？」

「ちゃんと聞いてます。」

「あー良かった。また言っただつもりで言っただけかと思ったよ。」

「卓さん、自分で言ったことぐらい憶えててね（＾―＾；）」

「アハハ・・そうだね。で、なんでまた弁当作ろうと思ったの？」

「え？別に理由はないけど・・・ほら、どうせ朝ごはんの準備はしなくちゃでしょ？一石二鳥でいいじゃない。」

「ゆりかがそれでいいならだけど・・・」

「全然平気よ。私も何回か社員食堂で食べたけど、男の人がいろいろ話しかけて来てうるさいのよ。」

「（。○。；）えっ？それってナンパされてるってこと？」

「私が結婚してるって知ってるから冗談だろうけど、旦那に飽きたらいつでもどうぞとか。」

「（＾□＾；Aそ、そんな。」

卓さんはすぐく焦っていた。ちよつとイジワルなこと言っちゃった私。

これは夢のお返しなのよ。卓さん許してね（o^_^o）
ウフツ

でも依然疑念が残るのは、彼のスーツから匂った香水のことが私の頭の片隅から離れていなかった。

（続く）

その13 思いがけない日

思いがけない日

●森田卓の視点

オフィスビルのエレベーターのブザーが鳴った。重量オーバーのようだ。

最後に乗って来たのはでっぴりとしたタヌキ腹の部長。僕の直属の上司でもある。

僕は入り口の左側にいて、降りる階のボタンを押そうとしていた時だった。

部長はすぐに出ようとせず、エレベーターの中を軽く見回す。

一瞬ヤバイと思ったのに、見事に部長と目が合ってしまった僕。

「森田、わかるよな。」

「・・・はい。」

僕は渋々エレベーターから降りたものの、それでもブザーは止まらない。結局、部長も降りることになった。

ならば僕はまた乗れるはずだと思ったけど、部長の手前そんなことと恐れ多いことできるはずもない。

エレベーターは静かに閉まり、階上へ上って行った。

「森田、カバン持ってくれ。階段はきつい。」

「は、はいっ（――；）」

僕は部長の後ろにつくお供のような形で、階段を上り始めた。

「ところで森田、奥さんは元気か？」

部長は僕の上から振り向かずにつづ。

「は？はぁ・・・元気ですが。」

僕に話しかける人はみんなゆりかのかを聞いてくる。

「家ではちゃんとお前がリードしてるのか？」

「ええと・・・どっちゃかっていうと奥さんの方がも。」
「なんだ。思ったとおりの答えじゃつまらないな。ワハハハ！」
「・・・すいません。」

僕は聞こえないくらいの小さなため息をついて、うつむきながら足取りも重く進んでいる。

そのため、部長が階段の途中で立ち止まったことには全く気づかなかった。

それがまさに今日のドジの始まりを意味することになった。

つまりその後どういうことになったのかというと・・・

そう、前を見ないで進む僕の頭が部長の股間にすっぽりとハマってしまったのだ。

「ああんっ!!」

と、突然予想外の奇声。

え？（？！？） ああんで・・・部長。

僕は股間に挟まったことにも増して、部長の口から飛び出た『喘ぎにも似た言葉』のダブルショックで、そのまま頭を引き抜かずに、持ち上げてしまった。

当然のように部長の体も持ち上がる。

「バカッ！森田危ない！何すんだ降ろせ！」

今度はいつもの部長の口調。

「あ、はいっ。すいません。」

僕は慌てて頭を下げたため、部長の着地が失敗して、前のめりに倒してしまった。

階段に打ち付けられてうずくまる部長。

「ぶ、部長・・・大丈夫ですか？」

「・・・大丈夫だと思うか？」

自分の手や足をさすりながらゆっくりと起き上がる部長。

「申し訳ありませんっ！」

僕は深々と頭を下げるしかなかった。

当然、烈火のごとく怒鳴られることは覚悟していた。

それなのに意外や意外、部長は物静かな言葉で許してくれたのだ。

「・・・まあいい。急に途中で止まった俺も悪かったしな。」

「は、はあ。。」

「それに大した怪我もしなかったから良しとしよう。」

「あ、ありがとうございます。なんと言っているのやら。」

「森田、このことはもう忘れる。」

「えっ？」

「今のは全てなかったことにするんだ。お前のしたことも聞いたこともな。」

「・・・聞いたこと？」

部長はなぜか体裁悪そうに念を押しながらつけ加える。

「・・・そうだ。聞いたことも全てだ。それならお前を許す。わかるな？」

「・・・はい。。」

「よし、じゃ行くぞ。」

この後、僕と部長は無言のままオフィスへ向った。

明らかに部長はあの奇声を僕に聞かれたことを気にしているのは明白だ。

そういえば、以前に部長の噂を聞いたことがある。S Mクラブのあるビルに部長が入って行くのを目撃したという噂。

そういう噂には日に日に尾ひれがつくもので、部長はその中でM 奴隷となり、いたぶられながら快感の悲鳴をあげているというのだ。

その噂が本当だとすると、さっきの奇声の説明もつく。

まあ、でもそんなことどうでもいいや。別に誰にも言うつもりなんてないし、僕のドジがそれで帳消しになるんなら万々歳だ。

ようやく自分のデスクに落ち着いた僕は、もうすでに一仕事終えたような疲労があった。これから本番なのにどうしようもなくダルい。

僕は一旦廊下に出て、ひとつ大きな深呼吸をしていると、園崎さんが話しかけてきた。

「森田、昨日はご馳走様。またおごつてね。」

「あ、はい。(- -)」

「今日は残業しないわよ。いいわね？」

「も、もちろんです(^-^;)」

園崎さんの前では妙に緊張してしまう。

続いて三木さんが近づいて来た。おそらく彼女も昨日のお礼を言いに来たのだろう。

「森田さん。あの・・」

「あ、そんないちいちお礼なんかいいですよ。」

「いえあの・・お礼もそうなんですけど、これを。」

「は？」

三木さんが手に持っているものは、明らかに彼女の手作り弁当と思えるものだった。

「森田さん、良かつたら食べて下さい。」

「・・・へ？」

「森田さん、今は社員食堂で食べてるでしょ。だからいいかなって・・」

三木さんは顔を少し赤らめながら小走りにオフィスに入っていく。

僕は狐につままれたような感覚だった。

「なんで僕に？・・昨日のお礼のつもりなのかな？」

なんだかわからないまま僕もオフィスに戻ろうとしたとき、またまた別な女性から呼びかけられた。

「森田さん。昨日はどうも(o^_^o)　ウフッ」

振り返るとそこには意外な人物がいた。

「Σ―11」(「;」―1・・ま、まりえさん？」
「・・まりもですけど。。」(「I」;」
「あ、ごめんなさい。」(「^□^・;A」

(続く)

その14 不可能な約束

不可能な約束

「そんな驚いた顔しなくてもいいのに。あなたってウソのつけないタイプね。」

と言って、倉沢まりもは森田卓に軽く微笑みかける。もちろんこれも演技のひとつ。チビデブの森田なんて本来ならみじんの興味もない。

でもこれは指示された命令。言う通りにすればあの人に気に入られる。そしてもっとあの人と距離が近くなる。

「でもどうして僕の職場がわかったんですか？」

森田卓が動揺した顔で私に聞いてくる。

「あ、それは違うの。私、この部長に用件があつて来たんだけど、終わってここを歩いてたら偶然森田さんを見かけたってわけ。」

「あーなるほど。部長とお知り合いだったんですか。」

「ちよつとね。さつきも森田さんたちが階段を上ってくる所を上から見てただけど、気づかなかった？」

「いえ、僕は下向いてたんで・・・」

「あらそうだったの。部長は私に気づいたみたいだったのにな。」
「ほんとに？」

「でも部長ったら私を見て階段で固まっちゃうんだもの。（o^

・h o） ウフッ」

「それは・・・何でしょう？」

「ナイシヨ！それよりあなたとここで再会するなんて、こんな偶然も何かの縁よね。」

と心にもないことを言ってみる。

『縁なんですかねえ？（^ー^・）』

「きつとそうよ。あ、そうそう！こんな良い機会にめぐり会えたん

だから、私に昨日のお礼をさせて下さらない？」

「いえいえいえ、いいですよそんなこと。。」

「それじゃ私の気がすまないの。今日すぐには言わないから改めて別な場所で会ってくれないかしら？」

「会って何を・・・？」

「森田さんの好きなものをプレゼントしたいの。私が勝手に選んで嫌な物もらっても嬉しくないでしょ？」

「いえ別に、もらいものなら何でもいいですけど（＾＾）」

「（ノー）ノケツ！！そういうの私が嫌なんですっ！」

「でもホントに何もいらないますから。」

「とにかく！じゃ今度の日曜に会って下さらない？ね、いいでしょ？」

まりもはここで押しまくった。こういう男は強い姿勢で押されると断りきれないタイプが多いのだ。

「あ、でも今度の日曜日は娘の参観日があるので。。」

「それって丸一日なの？」

「いえ・・・たぶん午前中で終わりかと。。」

「なら午後から決まりね！約束よ。」

「でもちよつと・・・」

「1回お礼させてもらったらそれで私の気が晴れるの。1回だけだから。ね、いいでしょ？」

「・・・んん。じゃその・・・1回だけということぞ。」

「（ー）ウッフ・・・ほら堕ちたわ。」

「奥さんには言わないでね。変に勘違いされたら森田さんも困るでしょ？」

「そ、そうですね。そうします。はい。」

「良かった。さすが森田さん。話のわかる人だわ。」

「は、はあ・・・」

「じゃ私はこれで。（＊・・・＊）ウフフフ」

こうして十分な成果が得られたまりもは、この会社をあとにしたのである。

●森田卓の視点

――昼休み――

朝のまりもさんの一件が落ち着いたかと思ったら、次は三木さんから突然手渡された手作り弁当に僕は戸惑っている。彼女自身はどこかに食事に行ってしまったてここにはいない。

他の男性社員も社食なので、僕のデスクのまわりには誰もいなかった。

その中で、ゆりかの弁当と三木さんの弁当を交互に眺めている僕がいた。

『どうして三木さんが僕に・・・』

そう思いながら、僕は彼女の弁当から手をかけた。

「えっ？これは・・・」

弁当を包んだハンカチの中から手紙らしきものが。。。

「読んでいいのかなあ？・・・でも僕にくれたものだからいいはずだよな。」

僕はきれいに折り置まれた一通の紙をゆっくり開いた。

森田さんへ

突然の手紙ですみません。昨日はご馳走様でした。

筆不精なので、文面がメチャクチャかもしれませんが許して下さい。実は私、この部署に異動して来てから、ずっと森田さんのことが気になっていました。本当です。他の社員に弄られながらも、必死に耐えて仕事に打ち込んでる姿勢がとてもけなげで、愛らしさと優しさ、人の良さを感じます。

急にこんなこと言って、おかしい女と思われるかもしれませんが、それを承知でひとつだけお願いがあります。今回のお礼も兼ねて、どうか私と一度、お食事でもしていただけませんか？もちろん森田さんには素敵な奥様がいらっしやることくらいわかっています。私が森田さんの生活にご迷惑をかけるつもりなど全然ありませんから安心して下さって結構です。

今度の日曜の夜などいかがでしょう？

最後に私の携帯メアドを書いておきますね。お返事待ってます。

三木綾乃

「……………」
「信じられない。なんで僕なんだ。」

（続く）

その15 お弁当の思惑

お弁当の思惑

「高校生みたいなことしちゃった・・（／／／／）」

森田卓に自分の手作り弁当を手渡した三木綾乃。

少し緊張はしたものの、そこまではワリとすんなり実行できた。でもなぜか徐々に恥ずかしさが込み上げてきて、森田と同じ室内にすることができなかった。

いつもなら、自分のデスクで弁当を食べるのだが、今は社員食堂内の奥の片隅に目立たぬように腰掛けてそっと自分の弁当をほどこしている。

『森田さんはどう思ったんだろう。。食べてくれてるのかな・・手紙は先に読んでくれたのかな。』

綾乃は自分の弁当を渡す前よりも、今の方が鼓動が明らかに激しくなっていた。

『あゝ、どうしよう・・午後からちゃんと森田さんの顔を見れるかしら。。やめとけば良かったのかな。』

今更ながら後悔の念も少しだけある。だからと言ってこのまま何も行動しないと後で余計に後悔するのは必定。

『うん。やっぱりこれでいいのよ。私は間違ってない！でも・・・そう自分に言い聞かせる綾乃ではあるが、どうしても悩んでしまふのはこれからする彼との会話。

『最初になんて話しかけたらいいんだろう。。いいえ、森田さんから話かけてくれたらいいのに。。そうよ、何とかそうやってくれなかな。』

そんな時、綾乃に気づいた園崎頼子が、弁当を開けたまま固まっている彼女に声をかけた。

「あら三木さんどうしたの？珍しいわねこんなところで。」

「あ．．はい。」

「オフィスの誰かとケンカでもした？」

「いえ、そんなことは。」

「あなたここに来てまだ友達もできてないみたいだし、なんかあったらアタシに言いなよ。内に秘めてたつてストレス溜まるだけよ。」

「はい。ありがとうございます。そうします。」

「あなたもどっちゃかって言うത്『不思議ちゃん』みたいな人だから他の人と感性が合わないのかもしれないし。」

「え（。○。；）．．わかるんですか？園崎さんも。私、学生時代からよく言われました。不思議ちゃんて。」

そう、綾乃は子供の頃から不思議ちゃんだった。だから浮いた存在になることも多かった。そのためか、過去を合わせても友達と呼べる人数は数知れたもの。

でも綾乃はそれでいいと思っていた。気の合わない大勢の人間とわずらわしい関係になるより、自分を理解してくれる人間が一人でもいればそれでいい。

「ああ、やっぱりね。あ、でも別にそれが悪いってわけじゃないんだから気にしないでね。」

と、園崎頼子は優しく綾乃に微笑みかけた。

「はい。それは全然平気です。」

「それにウチにはもつと『鬼・超！不思議君』がいるんだし。（m o）プ」

「それってもしか．．森田さんのことですか？」

「もしかなくても奴に決まってるでしょ！」

「はあ．．」

「でもあいつ、さつきデスクに弁当2つ並べてたけど何だったんだろうね。ま、アタシにはどうでもいいことだけど。じゃあね！」

そういい残すと園崎頼子は仲の良い同僚たちの席へと移動して行った。

綾乃は園崎の最後の言葉に驚いていた。

『お弁当がふたつ？奥さんのお弁当？でも・・森田さんは社食に切り替えたはずだったんじゃない。もし彼が奥さんのお弁当しか食べなかったら・・私の手紙も読んでなかったら。。』

こんなことを頭の中で巡らせていても仕方のないことだとわかっていても、綾乃の高ぶる気持ちは抑えられなかった。

『とにかく私も食べなきゃ。考えるのはそれからでもいいわ。』

やっと自分の弁当に手をつけようとする綾乃。

『せっかく森田さんにもこれと同じものを入れたのに。。』

そしてハンバーグをひとくち口に入れた。

「うっ！Σ―11（「」；）――1しよっぱっ！！」

どうやら綾乃は調味料の配分を間違えたようだった。

『も、森田さん、どうか食べないで〜！（「」・」』

綾乃の願いが一気に変わった瞬間だった。

●森田卓の視点

「（「」口。；三；「」口。）ヒイヒイ！！しよっぱああ！！」

僕は三木さんのハンバーグに手をつけた瞬間、これは罰ゲームなのかと思った。

ゆりかの弁当のエビチリもおいしそうだったが、多分これは冷凍食品。三木さんのは明らかに手作りっぽかったし、見た目ボリュームも満点。絶対食べずにはいられない代物だと判断したからだった。

「これはもう無理だよ。」

僕は急いで500mlペットボトルのお茶を一気飲みして一息ついた。

「はあく。。おさまった。。でもこれってわざと？いや、三木さんがそんなことするはずないし。と言って僕は三木さんのこと何も知

ってるわけじゃないし。三木さんも僕のこととはそんなに知らないはずだし。なのにこんな手紙をくれたりするし。。もう何だかわからないや！」

僕はこれ以上、深く考えないことにした。今まで深く考えてうまくいった試しもない。

「今度の日曜が終われば全てが片付くことなんだ。きっとそうさ。」

「（続く）」

その16 魅力のポイント

魅力のポイント

●森田卓の視点

定時に仕事が終わって社員が次から次へとオフィスから出て行く。僕は三木さんからもらった弁当箱の空を誰にも見られずに返すタイミングがつかめずにいると、とうとう最後の一人になってしまった。

正確に言うともう一人。三木さんも僕から弁当箱を返してもらったために多分残っているんだと思う。

デスクに座っている彼女を後ろから見ると、何か作業をしているようにも見えたけど、人がいなくなるまでの間、時々僕に視線をチラチラ投げかけているのがわかった。

「三木さん、すいません。お弁当ごちそうさまでした。お・お、おいしかったです。」

しまった・・（「ん」；； 噛んじやった。

「え・・？ホントにおいしかったですか？」

「はい。おいしくいただきました。」

「ハンバーグ、しょっぱくありませんでした？」

「いえ特にそんな・・（「ん」；僕は濃い味が好きなので。」

「やつぱり・・すみませんでした。私、調味料の分量間違えちゃったみたいで。」

「いえいえいえいえ、そんなの全然気になりませんでしたよ。逆に食が進みました。」

「ほんとに？」

「はい。ハンバーグをちよつとかじるだけで、ご飯をたくさんかき

込めるんだもの。」

「・・（――；）それって相当塩辛かった証拠ね。」

「（。○。；）ハッ！僕なんかまずいことを言って・・」

「ううん、いいの。森田さんてとても優しい人だって改めてわかりました。」

「ていうか、お人よしってよく人から言われるんですけどね（^
^；A」

「そんなことないと思います。」

「ですかねえ。（^――^；）」

僕はこういった場面に慣れてないせいか、このあとどうリアクションしたら良いのか見当もつかないでいた。

「あ、そうだ。お弁当箱を返さなくちゃ。さっき給湯室で洗っておきました。」

「そんなこといいのに。」

「いやいやいや、とんでもありません。ちょうどママレモンはあったのできちんと洗いましたよ。」

「（*^m^*）フツ。ママレモンて・・森田さん、そんな名前の洗剤はとつくの昔にないはずですよ？」

「Σ（・・*エエッ！？ママレモンが今の世にはないんですか？」

「ええ。」

「じゃあ僕がさっき使った洗剤は・・？」

「給湯室にある洗剤は確かキュキュットじゃないかしら？」

「そうでしたか。。僕は洗剤と言えば、ママレモンという固定観念があったようですね。。お恥ずかしい限りです。」

「（o^――^o）ウツ。やっぱり森田さんて私のタイプです。」

「えっ？」

「また明日もお弁当作って来ますから。じゃあお疲れ様でした。」

「えっ？えっ？ちょ、ちょっ・・」

「大丈夫です。次は分量間違えませんから。」

「いや、そうじゃなくて・・・その・・・」

「ええ、森田さんの言いたいことはわかってます。」

「えっ？」

「奥様のお弁当もあるんですものね。」

「そ、それもそうなんですが・・・」

「??はい？」

「あのお・・・そもそも何で僕にこんなことを。」

三木さんはキョトンとして言った。

「手紙・・・読んでいただけました？」

「は、はい。それは読みましたけど・・・どうしても解せなくて。」

「気にしないでいいんです。これは単なる私の一方通行なだけ。私の独りよがりな行動なんです。普通に受け流してもらっていいんです。森田さんを困らせたくないですもの。」

普通に受け流せるわけじゃないじゃん。 (; - -)
それにもう充分困ってるし。 (; - -) || 3 フウ

「あのですね、社内には僕よりイイ男がいっぱいいるじゃないですか？なんで僕なんですか？」

「そんなことが不思議なんですか？」

「普通そう思いますけど (^-^;)」

「それは偏見だと思います。」

「へ、偏見ですか？僕が？」

「だって・・・顔のイイ男性が苦手な女性って、私も含めて世の中にはたくさんいるんですよ。特に私はチンチクリン系がタイプなんです。」

「(; - - !) なんかハッキリ言われちゃいましたね。」

「あ、すみません。私とんでもないことを。」

「いえ、事実ですからそれはいいんですが・・・」

「失礼ですけど、森田さんの奥様も私と同じタイプじゃないんですか？」

「というと？」

「その・・・二枚目は苦手というか。」

「ん、ちよつと違うかもしれません。彼女は僕と結婚するまではすごくカッコいい男と付き合ってたみたいですから。」

「Σ（・・・） ＊エエッ！？そんなこと奥様が教えてくれるんですか？」

「いや、そうじゃなくて、僕が以前、彼女の元彼に会ったことがあるんですよ。」

「そうだったんですか・・・私、勝手な想像しちゃって。」

「それはいいんですけど・・・」

その時僕は突然あることが頭によぎった。もしかして・・・

「あの、三木さんにひとつ聞いてもいいですか？」

「ええ、もちろん。」

「変な質問してすみませんが・・・」

「??」

「三木さんは暗示というか・・・催眠術みたいなものにかかったことがあります？」

「いいえ、全然。テレビでは芸能人がかけられているのを観たことがありますけど？」

「そうですね・・・じゃその・・・クリニックとか通われた経験とかは・・・？」

「ありません。森田さん、私、正気です。」

「す、すみません。失礼なこと聞いてホント申し訳ありません。ただあまりにも急な感じがして。」

「私の行動が・・・ですか？」

「はい。。。」

「それは誤解です。私が突然森田さんを好きになったわけでもない、いきなりお弁当を作り始めたわけでもありません。ここに至るまでに

は何ヶ月も迷ったんです。森田さんの仕事ぶりや、何気ない仕草を見ているうちに私の心が惹かれていったんです。」

へ（ω――へぎくツ！ 何気ない仕草？ 僕がハナクソほじくってるところも見られてたんだろうか？） ㍊……

「わかりました。でも僕にはどうすることもできないのが現状だし・」

「ええ、だからそれはさっきも言った通り、気にしないで下さい。」

そう言われてもなあ・・・（へ；）ウーン

そしてハードスケジュールな日曜日まであと二日。。。

（続く）

その17 心のうち

心のうち

● 森田卓の視点

ゆりかが唐突に尋ねてきた。

「卓さん、どこか体の調子悪い？」

「え？別に・・・なんで？」

「お弁当半分残してるから・・・」

（。○。；）ハッ！！そうだった・・・三木さんの弁当を先に食べたから、こつちまで食べきれなかったんだ。

弁当攻撃2日目を終えて帰宅した僕。

今日の三木さんの弁当はボリュームがありすぎた。ごはんだけ入った弁当箱とは別なタッパーに、ジャンボとんかつがデデーンと居座っていたのだ。

僕は決してギャル曾根じゃない。、これを残さず完食たあと、ゆりかの弁当まで食べきれないわけがない。

「いや、違うんだよ。その・・・あの・・・仕事が忙しくて昼休憩がなかったんだ。」

とっさに出た言い訳。僕にしてはまずまずの出来。

「お昼食べる時間くらいなかったの？」

と、納得し難いゆりかの突込み。

「う、うん。。」

僕はだんだんドキドキと鼓動が激しくなってくる。

「早食いの卓さんだったら10分もあれば食べれるでしょ？」

「へ」ω「――」へぎくッ！・・・5分しかなかったんだ。」
「ふうん。。。そんなに仕事忙しいんだ。」

(。。。)ドキドキドキ・・・

「ごめんねゆりか。それ今食べるから。」

「晩ごはん、別に作ってるんだよ。」

「そ、それも食べるよ(^^)」

「そう。じゃあ、このお弁当温めてくるね。」

「うん。」

僕はキッチンへ向うゆりかの後ろ姿を見ながら冷や汗ものだった。どうも言い訳がましかったようにも思えるし、ゆりかに疑われはしなかっただろうか？

彼女は第六感が働くというか、本当に勘が鋭い。

●森田ゆりかの視点

私は思った。卓さんが妙に焦っている。

彼の残してきたお弁当を温め直して食卓に戻ると、それを勢いよく食べ始めた。

「おなか空いちちゃってさ。ハハ・・・」

なぜかこの時の私には彼の言葉がとってつけたようなセリフにしか聞こえなかった。

ちようどいずみが部屋から出てきて卓さんに話しかける。

「卓くん、どうしたの？そのお弁当。」

「ハハ・・・残してきちゃったんだ。(^^)」

「何か他のもの食べたからじゃないの？」

「Σ―11（；）―1ち、違うよ。」

このときの彼も焦っているように見えた。

「じゃあもしかしておなかが痛かったとか？」

「いやあのね、食べる時間がなかったただだよ。」

「なんだ、おなかも痛くないんだ。つまんない。」

「（・・）エッ？？なんで？」

「・・別になんでもない。」

そう言うといずみはため息をついて自分の席に座る。

私にはいずみの思いがわかっていた。

それは明日の父親参観のこと・・つまりいずみは卓さんに来て欲しくないのだ。

別に二人はケンカしているわけでもないし、普段から仲が悪いわけでもない。本当の親子じゃないけど、家では楽しくやっている。

原因は、彼のルックスと異常なまでのドジ。これをクラスメイトや担任の先生にお披露目したら赤っ恥をかくと少女ながらに思っているのだ。

そういうこともあって、彼におなかが痛くなって寝込んでもらうと正に好都合というわけ。

食事が終わって、卓さんがお風呂に入っている間、私はいずみに言った。

「パパは大人なのよ。ちゃんと場の空気も読めるんだし、変なことをするはずないじゃない。」

「変なことされちゃ困るよ。」

「だから絶対しないって。大人しく授業見てるだけよ。パパが控え目なタイプだってことくらい、いずみにもわかってるでしょ？」

「それはわかるけど・・なぜか卓くんて、目だってしまうんだもん。」

よく観察してるわこの子。たしかにそれもあるけど・・・(^ ^) □
^ ; A

でも私はそれを肯定するわけにもいかず、いずみに勇気と励まし
を与えていた。

参観日くらいで子供にこんなことするのって、なんか変だけど。
(- ;)

(続く)

その18 緊張の父親参観

緊張の父親参観

● 森田卓の視点

たぶん今日はお金がいる。いずみの授業参観は問題ないけど、心配なのはそのあと。

まず午後にまりもさんとランチをする。昨日の彼女からのメールで12時半に待ち合わせが決まった。

何かお礼をしてくれるとはいえ、食事代まで払ってもらうわけにはいかない。

あんな綺麗な人だったらラーメンや牛丼なんて食べないだろう。

コース料理を食べたとしたら1万円はいる。

そして夕方5時から三木さんと待ち合わせ。たぶん彼女とも食事することになるかもしれない。

僕はゆりかにウソをついた。午後から新入社員の歓迎会だと言って、参加費用と交通費を家計から出してもらったのだ。

このことで僕は家を出てから学校に着くまでずっと、ゆりかを騙した後ろめたさに心が痛んでいた。

『ごめん。ゆりか。これ1回きりだから。』

いずみの学校へは、わざと遅れ気味に行くようにした。

自分で言うのもおかしいけど、僕は非常にシャイなので、他の父親が誰も来てないうちに自分が一番乗りになるなんてとんでもない話だ。

人より目立たないためにも、僕は授業の途中からそっと教室に入

ろつと決めていたのだ。

正面玄関のロッカールームを過ぎ、ゆりかから聞いていた通り、階段を上って2階へ行き、すぐに左の通路に曲がるといずみのいる3年生のクラスだ。

「さてと、着いたぞ。ここは3年…1組……」

(。○。;)ハッ!!

僕はとんでもないことに気づいた。というか、今まで全く気づかなかったことに気づいたと言った方が正解かもしれない。

いずみって3年何組なんだろう…?(へ;))

僕は慌ててケータイでゆりかを呼び出そうとするも、焦ると必ずドジをやらかす自分の習性を見事に発揮してしまうことになった。

カッシャーン!!

Σ—111(;)——1し、しまったああああ!!

堅い廊下に思い切りケータイを落としてしまったのだ。しかも開いてから落としたので、液晶画面が割れている。

「…ヤバイ(;) もう使えない。」

2ヶ月前に買い換えたばかりなのにもうこの有様。僕ってホントにどうしようもないドジ野郎だ。

でも今はケータイのことよりも、いずみが何組にいるのかを探すことが先決だ。

果たして一体どうしたらいいものか。。

● 3年6組内にて

授業が始まってからだいぶ時間が経っているのに、森田卓はまだ来ていない。

『このまま来なけりやいいのになあ』

いずみは心ひそかにそう期待していたものの、その願いは次の瞬間モロくも崩れ去ることになる。

彼女の席は一番後ろの真ん中。教室の後ろ側の扉を横目でチラチラとチェックしていたが、今だ気配もない。

いずみは小さなため息をついて、顔を前に向きなおしたその時、教壇横の前側の扉が遠慮がちにゆっくり開いたのである。

『いやな予感がする。。。(-_-)』

いずみの予感は的中した。ゆっくり開いた扉のかなり低い位置から顔を横にかしげて覗き込んでいる一人の大人がいた。

そう、彼は森田卓その人だった。彼は前傾姿勢で自分の体を扉の脇に隠し、顔の半分だけで中を覗いていたのである。

そしていかにも不自然極まりないこの男に対し、教室内の生徒が一斉にマジマジと彼の方に振り向く。

『。。。(-_-)しまった！前側のドアを開けちゃった。。』

卓はそのままドアをゆっくり閉めようとすると、担任の教師に呼び止められた。

「あのちよつと…うちの生徒のお父さんではないんすか？」

担任が卓に近寄って来た。彼は遠慮がちに答える。

「え、ええ、たぶん。」

「たぶん？」

「この学校は3年7組つてあるんですかね？」

「いえ、3年生は6組までですけど？」

「そ、そうですか。じゃあここに間違いないかな。」

「は？」

「いやその…1組から順番にあたつて来たもんで。（、、；）」

ウヘヘ」

「……（・―・）」

卓と担任の間に何とも言えないような間が一瞬あったものの、担任がすぐに機転を利かせて卓を誘導した。

「親御さんでしたら他の皆さんも教室の後ろで参観しておられますのでどうぞご遠慮なく。」

「は、はい。すいません。では……」

普通こういう場合、一旦前のドアは閉めて、後ろのドアから入り直すものだが、森田卓の頭にはそんな常識などみじんもなかった。

彼は再びこのドアを開けて、教室の前から遠慮がちに背中を丸めながら中に入って来たのだった。

そしてそれは、まわりの生徒や参観に来ている父親たちに失笑されているのに彼が気づいた瞬間でもあった。

当然、いずみもそれは敏感に感じ取っていたのは言うまでもない。いずみは卓に気づいてもらいたくなかった。彼が前から通路を通つて後ろに来るまでずっと机にうずくまって顔を伏せていたのである。

『卓くんのバカあ…（・T―T）』

（続く）

その19 山なし谷あり（前編）

山なし谷あり（前編）

●森田卓の視点

ああそつかあ…前からじゃなくて後ろの扉から入れば良かったんだ…（　　）；

今更気づいたところでしょうがない。もうまわりに笑われてるし、やり直しもきかない。

どうして僕はいつもこうなんだろう。人より目立とうなんて全然思っていないのになぜか目立ってしまう。

イケメン男が、そこにいるだけで自然に目立っているのとは訳が違う。

僕はいつもドジな奇行をやらかすために不自然に目立つ。

特に慣れない場所に来ると必ずそうだ。今日もいやな予感がしたんだ。

（　；　）はあ　だから参観日なんて来たくなかったんだ。

「あのー…すみませんがお父さん。」担任の先生からまた声がかかる。

「ひょっとして外履きで来られたのでは…？」

Σ―111（　　）；―11あっ！！

そうだったのか…僕はスリッパも履かずにそのまま廊下を歩いて

来てしまったのか。しかもスーツにスニーカーとは。　「D」……
「す、すみません。すぐ脱ぎますので（^□^；A」
僕はすかさず靴を脱いで小脇に抱えた。教室内、大人も子供も含めて大爆笑されたのは言うまでもない。

かなり体裁が悪かったが、小走りでなんとか教室の一番後ろに辿り着き、黒板の方へ振り返って参観の体勢を整えた。それでもまだ生徒全員がクスクス笑いながら僕にチラチラ視線を浴びせている。そんな中、僕のすぐ目の前の机に座っている女の子一人だけが僕を見ていなかった。

その子は背中を丸めて机にうずくまるような格好をしている。そう……それが我が子・いずみだった。

僕は本当の父親ではないけれど、我が子と思ってこの一年半やってきた。でもいずみ自身はおそらく違う。

別に仲が悪いわけじゃない。彼女にとって僕は友達感覚なのだ。

この場面、いずみは明らかにバツが悪そうにしていた。僕は小声でもいいから彼女に謝るべきなのか考えた。

でもここで彼女に話しかけるとまた予想もできないことが起こるかもしれない。だいいち授業中だ。先生から私語の注意でもされたらまた目立ってしまう。

ここは黙っていた方が利口だ。何もしないで突っ立っていればいいんだ。その方が目立たない。僕はイケメンなんかじゃないからオーラもないし。

（続く）

その20 山なし谷あり（後編）

山なし谷あり（後編）

● 森田卓の視点

授業が再開して10分程経過した。科目は算数で、黒板に書かれた問題を生徒が指名されて前に出てゆく。全くつまらない。これじや時間内に全員が出れないじゃないか！

せつかく親も来てるんだから、国語の授業の方がより多くの生徒に本読みさせることができるのに。

僕は小さなため息をついて、なにげに窓の外を眺めた。今日も天気が良くて陽がまぶしかった。

でもそれがまたまた僕に不幸をもたらした。太陽光がモロに視界に入り、くしゃみが出そうになったのだ。鼻がむずがゆくて我慢できない。

ハア…ハア…ハア…

当然ながらこのムードで大きな音など出せるはずがない。そんなことはわかっている。

僕は両手で自分の口をガッチリとふさいだ。と、そこまでは万全だったのに…

ブリブリイ〜〜！！！！

しまったあ

ΣΣ（。D；）

あああ！へーこいち

やったあああ〜！

なんと僕はくしゃみを我慢するあまり、体全体が力み、口を塞い

だ代わりに下半身から放屁してしまったのである。

静まりかえった教室が再び爆笑の渦に巻き込まれた。

「ギャハハハハ（ノミミ）ばんばん すっげえオナラ！」

「（――）ミ バンバン でつかあゝ！」

「うっ！くっさあゝ匂つてきたあゝ！」

僕のそばにいた大人も子供も左右に手を仰ぐ。

「す、すみません…本当にすみません。」

僕はこのセリフしか言えずに教室の隅にそそくさと居場所を移動した。そしてふといずみの方を見やると彼女は僕を見ていた。

でも笑ってなどいない。口をキュツと結んで横目で睨んでいる。だがその目には明らかに涙が浮かんでいた。

ヤバイ…これじゃ父親どころか友達としても嫌われちゃうよ。（

。・ド・。・）。

「ハイハイ全員前見て！問題の続きするぞお！これだけ笑ったから緊張もほぐれただろ。ガチガチだったもんなお前たち。」

担任の先生が僕をうまくフォローしてくれている。

「オナラしてくれたお父さんに感謝しなくちゃな。失礼ですがどの子のお父様で？」

僕はいきなり先生にトークをふられた。

「え…？えと、あの、も、も…」と言いかけながらいずみをチラ見すると、彼女がとても悲しそうな顔で僕を見ているのがわかった。

「いえ…名乗るほどでもありませんので、どうか授業を先に進めて下さい。ご迷惑おかけしましたので僕はこれで失礼します。」

こう言つとすぐに僕は教室から出て、廊下の窓から天を仰いでため息をついた。

「（；・；） 3 フウ… 家に帰ったらすぐにいずみに謝ろう。」

僕の人生初の父親参観は、深い反省と後悔の念を残しただけに終わったのである。

そして次はいよいよ倉沢まりもさんとの待ち合わせ。ここは気分を切り替えないといけない。予想もできない彼女との時間。

僕が今、心に念じていることは、一刻も早く今日一日が終わってくれないかと思うばかりだった。

（続く）

その21 まりもの恩返し

まりもの恩返し

倉沢まりもは約束の時間より早目に待ち合わせ場所に着いてしまった。

「私としたことが・ちょっと早かったようね。」

彼女は辺りを見回して、森田がまだ来ていないことを確認すると、その近辺の建物の陰に隠れて様子をうかがった。

森田のようなブ男のために、この自分がわざわざ時間まで待機してるなど、屈辱意外の何ものでもなかったのである。

それにこんな真昼間に森田と外でツーショットなんて、他人に見られるだけでも恥ずかしい。

彼女はこの日のために、近くのある店に予約を入れておいた。この場所からすぐに路地裏に入る目立たない店だ。これなら森田と肩を並べて歩いても人目はそれほど気にならない。

「とにかく彼を見かけたらこっちに引っぱりこまなきゃ。」

約束の時間に差し掛かったころ、森田卓がトボトボと歩いて来るのが見えた。

「へえ、ワリと時間にはキツチリしてるのね。」

少しだけ感心したまりもは、ゆっくりと彼に側面から近づきサッと素早く片方の腕を掴んだ。

「森田さん、こっち。」

「えっ？えっ？あ、まりえさん・・・」

「まりもですっ！（^ー^；）」

「ありや、すみません。今日はわざわざどうも・・・」

「挨拶はあとでいいからこっちこっち。」

「???はあ...あのーお急ぎなんですか?」

「私、人ごみあまり好きじゃないの。」

「な、なるほど。」

と相槌を打った森田卓だったが、本当の理由がそうではないことくらい、今までの少ない経験から薄々感じ取っていた。

人通りもまばらな裏通り。森田とまりもはゆっくり歩きながら話し始める。

「森田さん、今日は黙って私にお礼させてね！」

「ホントに悪いですよ。僕、大したことしてないのに。」

『それはそうなんだけどね。　　^　　^　　^』

とまりもは心の中で返答をしたが、表情にはみじんも出さないで対応する。

「とんでもない。私、森田さんがいたから無事に帰宅できたのよ。そうじゃなかったら暗い夜道に起き上がれないまま車にひかれてたかもしれないもの。」

「そ、そうですかねえ？（^　　^　　^）」

「遠慮しない遠慮しない。」

「あの…そんな高いものはいりませんから。安売りが処分品で充分ですし。」

「ああ…えっとね、それについては安心して。何も買ってあげないからw」

「（ノ　　ー　　ー）ノコケツ！あれま。」

「物でお返しするのってやっぱり良くないと思ったの。そんなの持って帰宅したら森田さんの奥さんにバレるに決まってるじゃない？」

「確かにそうですね^　　^　　^」

「でしょ？だからそんなじゃなくて、別な形でお礼をしようと思っ
てお店を予約しておいたの。」

これを聞いた森田卓は、まりもが食事をおごってくれるものだと判断した。

「すみません。じゃあお言葉に甘えてごちそうになります。（*ハ・ハ*）エヘッ」

「え？ま、まあごちそうって言えるかわからないけど、カウンターバーで好きなお酒は飲めるから。」

「は？昼間からお酒飲むんですか？」

「飲んでも飲まなくてもいいけど、森田さん車で来た？」

「いえ、電車です。」

「じゃあちよつとくらい平気じゃない。メインはお酒じゃないんだし。」

「んんん？？？」

「（オハ・ハオ）ウフッ ピンと来ないようね。もうすぐ着くからすぐわかるわ。あ、見えた！あそこよ。あそこのビルの3階。」

まりもが指さす方向の看板を目で追った森田は仰天した。

「あ、あそこって、もしかしたらカッパル喫茶じゃ…？」

「あら、行ったことあるの？」

「いはいはいはいええ、とんでもない！」

「別に行つてたつてとんでもないわよ。」

「いはいえ、僕にとっては未知な世界で。（ハ□ハ；A」

「知らないクセになんでそんなに焦ってるの？（*・・・*）ウフフッ」

「そ、それはその…たまに週刊誌なんかで観ますから。」

「じゃあこの機会に一緒に体験しましょ！」

「Σ（・・*エエッ！？ まりもさんですか？」

「特別なことは考えなくてもいいのよ。ちよつとムードのあるお部屋で普通におしゃべりしたりお酒飲んだりするだけよ。」

「ム、ムードのある部屋…？（「」；ヒヤリ」

「そこばかり考えないで。オープンスペースな場所もあるんだから。」

「はい、すいません。」

「これが私の森田さんへのお礼よ。どう？」

「どうって…なんか緊張しまくってきました僕。まりもさんはよく来るんですか？」

「会員だからたまにね。森田さんの会社の部長さんともここで知り合ったのよ。」

「Σ（・・・*エツ！？ホントですか？」

「ここだけの話にしてね。」

「は、はい。でも若干社内ではもう噂も出てまして。」

「あらそうなの。部長さんがすごいDMだったこと？」

「やっぱり本当だったんですね（^□^；A」

「誰か目撃者がいたのかもね。私は痛くもかゆくもないんだけどね。」

「……（D；；」

「さ、着いたわ。入りましょ。」

まりもは入店する直前、森田に気づかれないように後ろを振り返って確認した。

その目線の先の物陰には、カメラを携えた一人の男性が潜んでいた。

『慎也…うまく撮ってよね。アタシだってこんな男とはこれっきりにしたいんだから。』

（続く）

その22 いずみの幻滅（前編）

いずみの幻滅（前編）

● 森田ゆりかの視点

胸騒ぎがした。今朝はいつもの卓さんとは少し違ったような気がする。

初めての参観日だから緊張してたのは確か。でもそのことじゃない。

卓さんが私にお金を要求したこと。

いずみの参観が終わった後、午後から会社の新人社員の歓迎会があるとは聞いていたけど、その分のお金は持たせはらず。

いつもならそれで何も言わない彼なのに、今回初めて私に訴えてきた。

「あのさ…万が一のために予備のお金くれないかな？　ハハ…」

「（・・）エツ？　足りない？」

「いや、たぶん足りると思うけど…ほら、誰かお金忘れて来たとき貸してあげたりとかできるし。」

「それはそうだけど。」

「使わなかったら今晚ちゃんと返すから。」

「え、ええ。じゃあ、あと1万円ね。」

「ありがとう。良かったあ。無理言ってごめんね。」

「……………」

私はこの時の卓さんの一言『良かったあ』という言葉が腑に落ちなかった。

何かお金をらえてホッとしたような一言に聞こえる。

もっとお金が要りような何かがあるような……

こんなこと思つのは考えすぎなのな？私がネガティブなだけ？

そう思いながらも言えずに卓さんを送り出したあと、玄関の掃除を始めた私。

靴を並べながらあることにハツと気づいた。

そこには卓さんが今日履いていくはずの革靴が。。

「ヤダ！卓さん、スーツなのにスニーカー履いて行っちゃったんだわ（＾□＾；A」

だが、時はすでに遅い。卓さんが出てから15分も経っている。今更走つても追いつく距離じゃない。

「いいわよね。どうせ教室に土足で入るわけじゃないし。」

日曜は主に掃除の日。普段の私たちは共働きのため、なかなか家の掃除ができない。

「いずみが帰って来るまでに片付けちゃおう」

こうして私はほんの少しの胸騒ぎを抱えながらも家事に勤しんでいた。

お昼を過ぎた頃、玄関のドアが激しい音をたてて閉まる音がした。何事かと思つて私が玄関へ行こうとする前に、ドカドカと足早にキッチンに入ってくるいずみがいた。

この子の目は怒りで満ち溢れている。

「ママ、もうやだ！だから言っただよ！卓くん来るの絶対反対だつてー！」

「ちよつとまってよ。一体何があつたの？事情が全然わからないわ。」

その23 いすみの幻滅（後編）

いすみの幻滅（後編）

● 森田ゆりかの視点

「卓くん、教室でオナラしたんだよ！おっきなオナラ！」

「Σ（・・・*エエッ！？ほんとに？」

「もう信じらんない。アタシのすぐ後ろでだよ！」

「我慢できなかったのかしらねえ・・・^| ^;」

「しかも授業中に教室の前から入って来たし（-| -;）」

「それ、おもしろいじゃない。みんなウケなかった？」

「ママッ！そんな問題じゃないよ！^| ^;（ノムキイ」

「あははは。ごめんなさい^| ^; でもいずみ、失敗は誰にでもあるものよ。」

「卓くんはありすぎるもん。」

「（; -| -） || 3 フウ：とにかく向こうに行って話しましょ。」

「私はいずみとリビングに移動し、テーブルの前に向かい合って座った。」

「そうは言ってもパパだって悪気はないのよ。」

「わかってるよそれくらい。」

「わかってるなら許してあげたら？。」

「ヤダー!!」

「いずみはパパのドジぐせは前から知ってるじゃない。それに仲もいいんだし。」

「家ではいいけど、外や学校では恥ずかしいよ。必ずドジるもん。」

「必ずは言いすぎよ（-; -;」

「でもそうだもん。」

相変わらずこの子はハッキリ物を言うタイプだ。私と性格が全く違う。

「でもいずみに優しいパパなんだから少しは大目にみてあげないかね。」

「アタシすつごく恥ずかしかったんだよ！みずほちゃんが『あの人はいずみちゃんのお父さんだよ』教室で言ったからみんなにバレちゃったし。」

私はこのときハツとした。

「いずみ、まさか…このことが原因でお友達にイジメられたりしたの？」

「森田のお父さんはブサイクでまぬけなヘーコキじじいだって（Ｔ―Ｔ）ウルウル…」

「そ、そうだったの。。家ではそんなにオナラしないのに。。」

「ねえママ、どうして卓くんと結婚したの？普通カッコいい男の人の方がいいに決まってるじゃん！」

「・・・パパは優しいからよ。カッコいい人って案外クールなのよ。」

「じゃあ奈緒美ちゃんのパパは優しくないの？すつごくカッコいいよ！」

「そうは言っていないけど。。（＾□＾；A」

「アタシ、卓くん大嫌いになった！もう口きいてやんないっ！」

「いずみ・・・（・・；）」

「あゝあ、これなら本当のパパの方が顔いいし遊んでくれるかも…」

バシッ！！

「いずみつー！！」

無意識に手が出てしまった。決していずみだけが悪いのではなく、こんな立場にしてしまった私に原因があるのに。。

いずみは大粒の涙を流したが声を出して泣いてはいない。必死に

耐えている。強い。この子は本当に精神力が強い。

私はこれではいけないと思った。卓さんが家庭で浮いた存在になつてしまふ。いずみの父親になりかけていたのに努力が台無しになる。

「ねえ、いずみ。聞いてちょうだい。」

「・・・・・・」

「パパは確かにドジで顔も悪いわ。」

「ママもよくわかつてるじゃない。」

相変わらず強気発言のいずみ。

「ええ、でもね、パパだって一生懸命なのよ。わかるでしょ？今までだって、仕事で毎日疲れてるのにいずみの勉強見てくれたり、休みにはドライブに連れてってくれたり、旅行だって行ったでしょ。」

「そうだけど。」

「パパはね、今まで家で『疲れた』って言葉を一度も言ったことがないの。クタクタのはずなのに1度もね。パパは家族をとてん大事にしてくれる人なの。いずみを本当の自分の子のように思っているの。」

「そんな無理しなくていいのに。」

「パパは無理してるとは思ってたないわ。いずみが大好きなの。本当に大好きなの。それに比べて……」

「？それに比べて？」

「・・・・それに比べていずみの本当のパパはママと暮らす気もいずみを育てる気もなかったわ。」

「・・・・・・」

「こんなこと、まだ子供のあなたに言うべきじゃないけど、今のパパがどれほど私たちを愛してくれてるかよく考えて。」

「卓くんが好きなのはママだけだよ。」

「それは絶対にありません！それに今こうして生活できるのはパパの稼ぎのおかげなんですからね。」

「ママだって働いてるじゃない。」

「ママの収入なんてしれたものよ。パパはね、普段の行動はドジでウスノロだけど…」

「(m o) プツ ママ、アタシ卓くんのことドジって言ったけど、ウスノロとは言っていないよww」

「(。○;) ハッ！私としたことが…；^|^A アセ…とにかくね、パパは仕事では失敗したことがないの。他の人の遅れてる仕事も手際よく手伝って片付けるくらい優秀なのよ。」

「へえ、初めて聞いた。」

「だからね、パパは全てがドジなわけじゃないんだし、もっと良い面を見てあげて。いずみは頭のいい子だからママはあなたを信じてる。人をもっと広い心で見えてあげるようにね。」

「…うん。なんとなくわかった。」

「ごめんね。ぶつて。ママもイケナイところがたくさんあるのに。許してね。」

「うん。もういいよママ。」

ああ…卓さんがもう少ししっかりしてくれたら。

せめて子供の前ではドジが治ってくれたらいいのに。

(続く)

その24 カップル喫茶（前編）

カップル喫茶（前編）

● 森田卓の視点

昼間だというのに薄暗くてムーディな照明があちらこちらで演出していた。

僕はまりもさんとカウンター席に座って飲み物を注文する。

「森田さん、車じゃないんだし少しくらい飲めるわよね？」

「ええ、まあ……」

「じゃあ好きなもの頼んで。金額は気にしないでいいから。」

「は、はい。」

とは言われたけど、平気で高級なお酒なんか頼めやしない。安い焼酎でいいや。でもこんな洋風バーみたいところに安酒なんてないかもしれないな。」

僕はまりもさんに遠慮がちに問いかけた。

「この店に焼酎なんか……あるわけないですよ？アハハ（＾□＾；

「A」

まりもさんはなぜかまどろむような笑みで僕に答える。

「あるわよ。このメニューに書いてるから好きな注文して。」

「あ、そっか。これ見ればいいんですね。すみません。（D；；；

「

僕はメニューの焼酎の欄に目が留まった。

「ひえー！（O）こ……こりやすごいっ！」

なんと焼酎といってもそんなじゃそこの安酒じゃなくて、僕なんかには絶対手に入らない幻の焼酎銘柄ばかり。

『森伊蔵』『村尾』『佐藤』『万膳』『百年の孤独』… e t c

「す、すごい…これだけの品揃え…そして値段もすごい。」
「； ヒヤリ」

果たして僕は平気でこんなの頼んでいいんだろうか？

「すいません。私に森伊蔵。彼には…森田さん何か決まった？」

「え？あの…じゃ同じもので。（＃＾・＾＃）い、いいんですかね？」

「だから気にしないで。私貧乏じゃないから。」

「はいっ！」

イエーイv（　　）v（　　）v　森伊蔵が飲めるなんて夢
のようであゝ

わずから分後、僕はふわふわ舞い上がるような、とても心地よい気分になっていた。

いい酒とはこういうことを言うのだろう。そう僕はつくづく実感した。

「やつぱり幻の焼酎は違いますねえ。」

「（o^ - ^o）　ウフツ　そう思う？すきっ腹だからじゃない？」

「それもあるかもしれませんが、やつぱり森伊蔵のせいですよ。」

「良かった。喜んでもらえて。ごはん食べるのはあとにしましょう。おつまみなら軽く食べてもいいけど。動けなくなるでしょ？」

「は？…な、何かあるんですか？（　　）；」

「ウフフフ、森田さんたらっ！」

まりもさんが意味深な横目で僕を見る。

「森田さんさつき、来たことなくても雑誌で読んだことあるとか言

「入り口に“PLAY ROOM”って書いてありましたが？」
「ん、ん。」

「気にしない気にしない。ここなら落ち着けるでしょ？」

「できますかねえ？」

「森田さん、すごい汗かいてる。服脱いだら？もっとリラックスしましょう。」

「は、はい。」

まりもさんが僕が上着を脱ぐのを手伝ってくれた。

「すいません。お手数かけちゃって。あとは自分で。あつ。。！」

「シャツも濡れてるから脱がしてあげる。肌にくっついて気持ち悪いでしょ？」

「ええ、まあ。。。」

「安心して。森田さんを襲ったりしないから。（*・・・*）ウフフフ」

「た、頼みます。僕には奥さんがいるのでどうかそれだけは。」

「ん、ん、ん。。。」

「……もちろんよ。まあ座って。まだ緊張してるみたいだから肩もんであげる。」

そう言つとまりもさんは座っている僕の背後に周り、両肩をもみ始める。

いいんだろうか？肩もみとはいえ、よく知らない女性と個室に一緒にいるなんて……

ガチャッ・・・ガチャッ！！

「ハッ（。〇。！）！な、何を？」

「ごめんなさい。ちよつとだけだから。次はこれね。」

「ええええ？？」

僕はあつという間に、後手に手錠をハメられた上に目隠しまでさ

れてしまった。

「ちよつとこれは・・・；^|^A アセ・・・」

「ちよつとした刺激になるでしょ？これ以上は森田さんに絡まないから安心して。」

「か、からまれたら困るんですけど・・・；^|^；」

「目が見えないと何されるかわからなくてドキドキするでしょ？」

「は、はあ、確かに。。（-_-；」

「部長も最初はこうだったわ。」

「そう言われても僕はどうリアクションすればいいのか。。^|^；」

「

「それもそうね。森田さん初めてだし、刺激的過ぎたかしら？」

「刺激というよりも戸惑いの方が^|^；」

「じゃここよりも、オープンルームでみんなとワイワイしましうか？」

「あ、そんなところあるんですか？じゃあその方がにぎやかで良さそうですね。」

「決まりね。すぐ移動しましょ。」

「でもまたこの濡れたシャツ着るの気持ち悪いなあ。」

「外に出るわけじゃないもの。そのままでもいいわよ。」

「しかし・・・」

「その程度の格好、森田さんだけじゃないもの。」

「（・・）エッ？」

「さ、行きましょ。」

「ちよとすいませんが……手錠と目隠し外してもらえませんか？」
D、・・・」

「あ、ごめんなさい。（*^m^*）ムフツ」

（続く）

その25 カップル喫茶（後編）

カップル喫茶（後編）

まりもはひとり街路地を歩きながら不敵な笑みを浮かべていた。連れの森田卓は店に置いて出て来たのだ。と言っても別に閉じ込めて来たわけではない。彼が勝手に寝てしまったからだ。

「ウフフフ…たまにあんなタイプの男をからかうのも面白いものだわ。」

一見、中途半端に終わった森田へのお礼の勧誘とも思えるが、これこそまりもにとっては好都合。こんな男ごときに冗談でもキスなんてしたくない。

「でもこんなにうまくいくなんて…（m o）ちょっとくらいの絡みは覚悟してたのに。ほんとラッキーな私。」

まりもは歩きながらおもむろにケータイを取り出し、共に作戦を企てた相手にメールをする。

“ 慎也、今どこ？うまく撮れた？”

一方、森田卓は店の事務所のソファに運ばれて寝かされていた。

「店長、この男まだ起きる気配ないですよ。どうします？」

と若い店員が指示を仰ぐ。

「特別会員の倉沢様の言いつけだからなあ。」

「あ、でもあの方は我々が邪魔にならない時間まででいいって言ってました。」

「そうか。もう夕方だし、俺たちの仕事も忙しくなる。もうこの男は邪魔だな」

「水でもぶっ掛けて起こしますか？」

「バカ！ソファが濡れる。目が覚めるまで口と鼻を塞げ。」

「な、なるほど。わかりました（＾―＾；）」

若い店員は森田卓のそばに行き、指示通りに両手で呼吸器を塞ぐとする。

「うわっ、こいつヨダレ垂らしてる）　・　；」

「手袋すればいいだろが！」

「は、はいっ（＾―＾；）」

森田卓は猛烈な息苦しさで目覚めた。手足をバタバタさせて目も見開くほど苦しくてたまらなかった。

「バカ！度が過ぎる！早く放してやれ。」

「は、はいっ。」

何が何だかわからぬままに苦しみから開放された卓。

「ぶはあああゝ！はあっ…はあっ…はあっ…」

「まあどうやら大丈夫のようだ。早く帰してあげなさい。」

息もようやく落ち着いた森田卓は少しずつ冷静さも取り戻してきた。

「僕は…ここで寝てしまったようなんですね？」

「いや、ここは事務所だから違う。あんたが酔いつぶれたのはオーブルームだよ。」

「僕が酔いつぶ…ああ、そっか！じ、じゃあまりもさんはどこに？」

「倉沢様はもうとっくに帰ったよ。『楽しかった』って伝えてくれた。」

「そうですか。」

卓はソファにボーツと座りながら、おぼろげに寝入る前までの記憶を思い出した。

・・・数時間前・・・

「！！！こ、これって…?!」

「ね、みんなにぎやかに楽しんでるでしょ。」

倉沢まりもがあっけらかんと言う。

「にぎやかかって…人前でこんな自由にチューすることがですか?^

—^;」

「不自由にキスなんてできないでしょ?」

「しかし…」

「見られて萌えるのがいいんじゃない。森田さん、こういうところ雑誌で読んだってさっき言ってたでしょ?」

「ええ、でもちよつと流し読みしただけで…(^□^;A」

「そう、ここは相互観賞の部屋なの。」

「ひえー!(0)」

「場合によつては組み替えカップルもできるのよ。(＊・・・＊)ウフフフ♪」

「Σ—11(、;)——1組み換えだなんて…僕にはそれはちよつと。」

「そんなのわかってるわよ。組み換えどころか、私とも絡んでないでしょ!」

「か、からむって…そんな卑猥な…(^□^;A」

「森田さん、またすごい汗。緊張し過ぎよ。もつとお酒飲みましょうよ。」

「はい。。飲まなきゃ倒れそうです。(、—;」

だが結局、森田卓は飲んでも倒れた。

気を紛らすためにがぶ飲みした酒。絡む間もなく、彼は目をまわしてその場でいびきをかいて寝込んでしまったのだった。

まりものケータイに慎也から返信が来た。

“ 店に入るところを5枚連写した。そっちの様子はどうか？ ”

“ 楽勝よ。任務完了！お部屋で待ってるから来てね！ ”

（続く）

その26 意外な訪問者

意外な訪問者

● 森田ゆりかの視点

玄関のチャイムが鳴った。

「はい。どちら様ですか？」

私がインターホンで対応すると、ずっと以前に聞き覚えのある声で返事が返ってきた。

「どうもおひさしぶりです。覚えておいででしょうか？これえた是枝です。」

「Σ（・・）＊エツ！？是枝さんて父の会社の…」

「はい、そうです。今はもう別な職場ですけど。。」

「え？何かあったんですか？父が何か…」

「まあいろいろありまして…」

是枝さんはどうもそれ以上言いにくいようだったので、あまり職場関連の話には触れないようにした。

「あの…今日はどのようなご用件で？」

「ええ、ちよつと…ご主人のことでお話がありました。」

「Σ（・・）＊エツ！？卓さんのことで？失礼ですけど、是枝さんはうちの主人と面識ありましたっけ？」

「はい。今は同じ部署で働いてますから。」

「（□□）ええっ!？」

「驚かせてすみません。でも偶然なんです。」

「ま、まあ、とりあえず玄関開けますからお入りになって下さい。」

「ではお言葉に甘えてお邪魔します。」

是枝さんはパパの直属の部下だったはず。しかもパパは是枝さんのことをすごく気に入っていて、家にも何度か連れてきて一緒に食

事もしたことがあった。

それがなぜ職場変えしたんだろう？仕事上でパパと意見の相違でもあったのかな？

パパは重役で人事にも口を出せるから、リストラもやりかねない。それよりもつと驚いたのは、是枝さんが卓さんと同じ部署で働いてること。

私たちの結婚式のときは、是枝さんは海外出張のために出席してもらえなかったから、卓さんとの以前からの面識はないはず。

だから卓さんは何も知らない。良かった…知らない方がいい。でも逆にどうして是枝さんは、卓さんが私の旦那様だとわかったんだろう？

そして彼は卓さんにあのことを…しゃべったのかな？

当時、私と是枝さんがお見合いする予定だったことなんて。。

リビングに落ち着いた是枝さんと私。どう話始めたらいいのか少し戸惑ったが、率直に聞くのが最善だと思った。

「あのお…主人のことですって言われましたけど、どういことなんでしょう…？」

「はい。。よけいなお節介だとも思われるかもしれませんが、僕はゆりかさんと面識もありますし、お父様にもよくしていただきましたので一応お耳に入れておかないと思います。。」

「……？一体何ですか？」

私は急に不安になった。

「実は…」

「待って！その前に是枝さんはどうして森田が私の主人だとわかったんですか？」

「ああ、それは…いやそれも偶然なんです。」

「は？」

「社内では、森田さんの奥さんは超美人だという話は有名です。そ

れに僕が森田さんと世間話をしてるときに、奥さんの名前を…つまりゆりかさんの名前を出したので、ピンと来たんです。」

「こんな名前なんて何人でもいると思うけど。。?」

「ああ、それとですね、出席はできませんでしたが、ゆりかさんから結婚式の招待状をいただいたときに、お相手の姓が森田だということも思い出したんですよ。」

「へえ…そうだったんですか。勘がいいですね是枝さん。お話の鼻くじいちゃってごめんなさい。さっきの続きから話して下さい。」

「ええ…本当に言いにくいんですが、実は…」

「……ドキドキ――」

「実は、森田さんと怪しい関係の女性が同じ部署にいます。」

「(。；) ギク！」

「三木綾乃っていう女性なんですが…結構親密なようです。」

「……」

「僕はゆりかさんをご存知なので、いてもたってもいられなくなり今日ここに来てしまった次第なんです。」

「そ、そんな。。。」

このとき私は彼の言葉をまともに受け取ってしまった。なぜなら最近の卓さんの態度の変化も明らかだし、スーツについてた香水の匂いの件もある。

しかし卓さんが私を裏切るなんて信じられない。女性の方が一方的に卓さんを好きになってるだけかもしれない。

でもそんなことはあり得ない。卓さんはハッキリ言って全く容姿端麗ではないもの。。。

一体どうなってるんだろう？嫌な予感が当たってしまった。
何でこんなことに。。。

(続く)

その27 綾乃さんとお食事(1)

綾乃さんとお食事（1）

● 森田卓の視点

三木さんから僕のケータイにメールが届いていた。

それもそのはず。彼女とは午後5時の待ち合わせなのにすでに30分も過ぎている。

僕は酔い潰れて寝込んでいた上に、ケータイもマナーモードだったからメールに気づくのも遅れた。

“私、ずっと待ってますけど、森田さん何か来られない事情でもできましたか？”

このメールは今から15分前。

「やばい……三木さんきつと怒ってる」D、……

僕は待ち合わせ場所まで駆け足で急いだけど、まだ完全に酔いが覚めていない。なにせ空きつ腹にお酒を流し込んだから頭の中がグルグル回っている。自分で蛇行しながら走っているのがわかった。

10分後、ようやく現場まで辿り着いたものの、三木さんはそこにはいなかった。

「しまった……完全に怒らせちゃったみたいだ。メールに返信すればよかった。」

いつもいつもとに気づくのも僕はいつも遅い。

「（； ㍻）ハア……またドジっちゃった。今日何回目なんだよ
全く……」

ホント自分でもあきれくらゐの失態のオンパレード。僕の星座は毎日運勢が最下位なんだろうか？

走ったために、汗だくになって息切れしている上に、酔いのせいで目も回っている僕。

待ち合わせ場所にしゃがみ込んで息を整えているそんな時、三木さんから再びメールの着信があった。

“ 近くの。公園にいます。そこ座る場所がなくて、立ってるの疲れちゃったんです。ごめんなさい。こっちであと30分だけ待たします。”

「助かったあ！帰ってなかったんだ。」

僕はすぐ様、小走りで現場へ急いだ。

その公園のベンチにひとり、三木さんはケータイをいじりながら座っている。

僕は彼女のそばに行くすぐに謝った。

「遅れてすみませんっ！！言い訳はしません。本当にごめんなさいでした！」

すると彼女は意外にもあつけらかんと答えた。

「いえ、全然待つのは平気。時間なんて気にしてませんでしたから。」

「いやそんな…僕なんかに気を遣わなくても。」

「いいえ、本当なんです。私、最近ケータイ小説にハマってて今もずっと読んでたんです。時間なんて長く感じませんでしたよ。」

「そ、そうですか。なら少し安心しました（＾－＾；）そういうば、今はケータイ小説が熱い！って僕も聞いたことがあります。」

「ホントにそうなんですよ。素人さんの方が斬新で梓にハマってないっていうか…私、大好きなんです。」

「は、はあ…でもどんなところがプロの作家と違うんですか？」

「例えば今私が読んでる人のはですね、顔文字がいっぱい出てくる

んです。」

「へえ…でもそれって、小説の文法としては邪道なんじゃ？…あ、すいません。また余計なことを（^―^;）」

「いいのいいの。気にしないで下さい。でも私には逆に登場人物の感情表現がよくわかるんです。下手な説明より想像を自由にめぐらせてもらえる小説っていいなって。」

「な、なるほど。僕は想像力がないんでちょっと苦手かもです。アハハ（^□^;A）」

「それより森田さん、すごい汗。息切れもしてるようだし…私の隣に座って休んで下さい。さあどうぞ！」

「じゃあちよつとだけ…さすがに今日は疲れまして。」

と、僕がベンチに腰掛けるなり三木さんが自分の口を押さえた。

「うっ…!!」

「どうしました？大丈夫ですか？」

「いえ…私は平気です。ただ…森田さんからお酒の匂いがプンプンしたので…ちよつと。（^―^;）」

Σ―11（ ; ）――1そ、そうだった！！口臭消してなかった！！

僕は慌てて両手で口を塞ぎ、三木さんの元から離れた。

「すみませんっ！実はあの…今日、昼に学校の父親同士の懇親会があったもので。」

とつさに出たウソ。僕はゆりかと三木さんまで騙しているのだ。良心が痛む。

「そうだったんですか。お疲れのところ私の方こそ本当にすみません。じゃあお腹はまだ空いてないんでしょうね。」

「そ、そんなことはありません。飲まされてばかりでほとんど食べる事ができませんでしたので。（ ; ）」

ある意味これは正解だった。実際はもう空腹で仕方がない。昼は

幻の焼酎・森伊蔵を飲んだだけで、本当に何も食べてないんだから。

「じゃあこれから私とお食事に行けますか？」

「も、もちろんです。約束は約束ですから。」

「（o^ - ^o）ウフツ！嬉しい！」

「三木さんはやっぱり、フレンチとかイタリアンの店が好きなんでしょうか？」

「ええ、大好きです」

「ああ…でも僕、あまりそういうお店知らないんです。」

「森田さんは普段、外食しないんですか？」

「娘がいるんで、ファミレスにたまに行くくらいで。」

「そうですね。ご家族がいるんですものね。」

「ど、どうしましょうか？」

「あ、お店なら心配しないで下さい。実はもう予約してるんです。」

「（。○。；）えっ？」

「和食のお店を予約しました。その方がいいと思うんです。お座敷もあるし。」

「お、お座敷？（^ー^；）」

「ええ、一度父に連れて行ってもらったことがあるんですけど、お座敷はちゃんと個室みたいになっててプライベートが保てるんです。」

「

「は、はあ（。。。）ドキドキドキ……！」

「どうかしました？」

「えと…あのやっぱり二人きりの個室はマズイのでは…？」

「それは逆です。偶然とはいえ職場の誰かに見られるとも限りませんでしょ？」

「はい。。」

「だからここら辺のオープンなイタリアンやフレンチのお店じゃ、外の通行人にも目撃されてしまうの。いつ知り合いに見られてもおかしくないと思います。」

「確かにそうですね。」

「私、森田さんに迷惑かけたくないのでこういう形がいいかなって。」

「なるほど。よくわかりました。でもその和食の店って高くないですか？」

「大丈夫です。割烹とまではいきなりの中堅クラスのお店。お値段もリーズナブルなんです。」

「ならいいんですが…恥ずかしい話、持金が足りるかどうかが心配で（^―^;）」

「私が払いますから心配しないで下さい。」

「いや、そういうわけには…」

「だって私から誘ったんだし、以前の焼きとりのお礼をする番でもあるんです。」

「なんか申し訳ないなあ。。。」

「そんなの気にしないで下さい。あ、そうだ。森田さんこれを…」

「そう言つと三木さんはバッグから小さな容器を取り出した。」

「はい、ブレスケア。3粒あげる。口の中がスツとしますよ。」

「あ、ありがとうございます。この距離からでも匂います？」

「ええ、けっこう（^―^;）」

「ごめんなさい。。。」

こうして僕と三木綾乃さんのお食事が始まろうとしていた。

（続く）

その28 綾乃さんとお食事(2)

綾乃さんとお食事(2)

●森田卓の視点

昼間飲んだ焼酎のおかげで僕は幾分か緊張が薄らいでいる。

とは言っても、襖で閉ざされたお座敷に、テーブルを挟んで三木さんと二人きり。

目の前の彼女の顔をまともに見られずに、視線を下げながらモジモジしている僕。

三木さんは清楚な白系の服装で、姿勢正しく正座していた。

「ヤダ恥ずかしい森田さん。私の胸元ばかり見て(*v.v)」

「(。○;)ハッ! いやいやいやいや、そういうわけじゃなくて。」

なら僕は一体どこを見てたらいいんだろお? 「ー」;

「先に飲み物頼んでおきませんか? 生ビールでいいですよね?」

「は、はい。」

「ピッチャーで頼みますね。」

「ピ、ピッチで...?」

「おかわりするたび店員さんが入って来ると邪魔なときってあるでしょ?」

「そ、そうですね?」

「だって...二人だけの空間ですもの。。」

『(.....)ドキドキドキ...』

僕は返す言葉が見当たらない。こういうときは何をしゃべればいいんだろお? 服装を褒めたらいいのかな?

「そういえば三木さん、今日は素敵なキャミ着てますね。」

「そういえばって…（＾―＾；）」

ヤバッ！Σ（□；とってつけたようなセリフになってしまった！

「いやその…とっても清楚でお似合いだなあと思って；＾―＾A」

「あ、ありがとうございます。でもこれトップスなんです。」

「Σ―1（「；）――す、すいません。なんせ僕ファッションにうといもんで…」

「気にしないで下さい。森田さんに褒めていただいて嬉しいです。

今日は頑張ってスカートもミニにしちゃったの（＃＾・＾＃）」

『（。；）ギクッ！』

あゝまたヤバい！彼女の言葉につられてつい視線が下へ…（

；

三木さんは正座しているから、丈が上がって超ミニ状態のはずだし、視覚的にはかなり刺激的だろうなんて、瞬時に妄想してしまう自分がなんとも情けない。

幸い、彼女との距離にテーブルという障害物があつたから本当に良かった。まともに見ちゃったら鼻血が出るかもしれないし。

「あのー正直に言いますけど、自分で言うのもなんですが、僕けっこう…いや、かなりシャイでして…その。」

「はい、わかりますよ。会社で森田さんを見ているときからそんな感じがしました。」

「やっぱりバレバレなんですね（。；。ですからその…僕の真正面に座されると目のやり場に困るんですよ。情けない話なんです（＾□＾；A」

「（o^・^o）フッフゝおかしいですね。そんな森田さんがなぜ超美人の奥さんを射止めたんですか？」

「ま、まあそれには色々事情がありまして…なぜそのことを？」

「もう会社中の噂ですよ。誰でも知ってると思いますけど?」

「そうでしたか…ハハッ(´、`;)」

「詳しく知りたいですけど、プライベートなことでもんね。じゃあ私がそっちに移動します。」

「(。へ。)え?」

「私が森田さんの横に座れば視線が気にならないでしょ?」

「まあそういうことになるんですかねえ…ハハッ」

「私、となりでお酌します!メイドさんだと思って下さい。」

「いや、そんな妄想をあおること言わないで下さい。なんていうか余計に恥ずかしくなりそうでどうしたらいいか…」

と、僕が言ってるうちに彼女はすぐにやって来て、ピッタリと横に座った。

「お膳も1度に全部持ってきてもらいましょうよ!」

彼女は僕の緊張をよそにあっけらかんとしている。

「三木さんて、意外と大胆だったりするんですね(ハハッ;)会社でのおとなしいイメージとは違う感じがしますけど。」

「そうですね?私にもよくわからないんです。元々私は地味で目立たない子なんです。ただ最近は少し積極的にならないとダメかなって思い始めたのは確かです。」

「それはいいことですね(ハハッ;)」

「あのー、森田さん、なんか不自然ですよ?」

「え?何が?」

「こつち向いて話さないんですもの。前ばかり見て。」

「そ、そうですね。変ですよ僕。アハハハ(ハ□ハハ;A)」

横に来てもらったのが逆に悪かった。振り向くとモロに三木さんの刺激的な服装が目に入るのだ。

だがそれを救ってくれたのは、やっと来た生ビールピッチャーと料理のお膳だった。

「森田さん、乾杯しましょう。」

「そうですね。僕も改めて飲みなおします。」

「カンパーイ♪」

よしっ！飲み食いに集中すればもっと楽しめるはずだ！それでいいんだ！

（続く）

その29 綾乃さんとお食事(3)

綾乃さんとお食事(3)

食事を始めて15分ほど経つと、三木綾乃はほろ酔い気分になっていた。

元々、アルコールはそう強い方ではないので、酔いが回るのも早い。綾乃自身、自分が少しずつ気分が“ハイ”になってゆくのがわかった。

それと比例して、緊張が“ハイ”になってゆく森田卓。彼は食べてばかりで、横にいる綾乃に対してわずかに振り向く素振りだけ。正座も崩そうとしない。

綾乃としては、何としても卓を打ち解けさせたいところ。

「森田さん、今日のスーツ素敵ですよ。」

「そうですね？アハハハ(^□^)：今日は娘の参観日だったもんですから。」

「へえ、そうだったんですか。森田さんらしい個性が出てて素敵ですよ。」

「え？個性？僕が？どんな？」

卓はハシの動きを止め、少し驚いて目線だけをチラツと綾乃に投げかける。

「ええ。さつき公園にいたときに気づいたんですけど、今日の森田さん、スーツにスニーカーですよ。新鮮というか…そう、フォーマルとカジュアルの融合っていうか…すごい斬新だと思いました。」

Σ—11((;) —1バレてたやっばし。。

「仕事とプライベートを“靴の遊び”で区別してるんですね。」

「こ、これは単なる間違いで…。(_) ; ヒヤリ」

「いいえ、私は森田さんの天性のセンスだと思います。」

「天然とはよく言われますが・・・」

「謙遜なさるんですね。（o^_^o）ウフッ」

「そんなつもりは全然・・・」

「あ、そうだ！森田さん、ここに私の苦手なお刺身があるんですけど、良かったら食べてくれませんか？」

と、綾乃はいきなり話題転換。だがこれも卓とスキップをはかるための作戦。

「い、いいですよ。何ですか？」

「私、中トロが苦手なんです。脂がどうも・・・赤身ならいいんですけど。」

「ああ、いますよね。そういう人。いただけるのなら喜んで（*^_^*）」

「良かった♪じゃあはい、どうぞ。」

綾乃はハシで中トロを卓の“お造り皿”へ移動させ、そのときに彼の顔を下からちよつと覗き込んでみる。

卓はドキッとしたような表情を浮かべて困惑した。

「森田さん、もっとリラックスしていいですよ。私なんてどこにでもいる普通のOLなんですから。」

「はい・・・普通に食べさせてもらってます^_^」

「でもまだどこか堅いですよ森田さん。」

「そ、そうですか？おかしいなあ・・・」

「だって黙々と夢中で食べてるだけなんだもん。」

「あ、これは気づきませんで・・・じゃあ僕のイクラをあげましょう。」

「そういう意味じゃなくて・・・」

卓はすぐにイクラの軍艦巻をハシで綾乃の器に移そうしたが、緊張のためかその途中、震えるハシからイクラの軍艦がすべり落ちた。

ピチャッ！！

なんと、落としたその下にあったのは綾乃の醤油皿。当然のごとく、飛び散った醤油が綾乃の洋服を襲う。
「キヤッ！」

ガ　ΣΣ（。D；）　ン！！しまったあああ！！

「ヤダあ…シミになっちゃう。」

「す、すすみませんっ！大事なキヤミが…」

「トップスですけど（ - ；」

「ト、トップスが…」

運の悪いことに、たつぷり入った醤油が斑点のように綾乃の胸から腹部全体に沈着している。

「シミ抜きしなきゃ…」

綾乃が自分の洋服に手をかけた。それを見て仰天する卓。

「え？え？脱ぐんですか？ここで？」

「はい。森田さんしかいないから平気です。」

そう言いながら綾乃は勢いよく服を脱いだ。

「あわわわ…（ 0 ）ちよつと目のやり場が…僕は一体どうしたら…」

森田卓は慌てふためき、すぐに立ち上がってその場から離れようとした。

しかし、これが更なる失態に繋がってしまうことになる。今まで行儀良く正座していたのが逆にアダになったのだ。

卓の足が完全にしびれている状態で急に立ち上がろうとしたものだから、そのまま勢い良くひざから崩れ落ち、綾乃を押し倒して上に覆いかぶさる形になってしまったのである。

「森田さん…そんな、まだ時間が早いわ。」

「いや、そうじゃなくて足が…」；「

更にタイミングの悪いことに、ちょうど女性店員が襖を開けたところでもあった。

「お客様、こちらの料理は店からのサービスで・・・（。〇。；）ハッ！これはどうもお取り込みのところ気づきませんで。」

「Σ―11（「」；）――1ち、違いますっ！誤解ですっ！」

と卓が慌てて話しても、店員には言い訳にしか聞こえなかった。

「大丈夫です。心配しないで下さい。私は口が堅いですから。」

「いや、本当にこんなつもりじゃ・・・」

「最初は誰でもそうですから。（＊＾m＾＊）ムフッ」

「ムフッ」じゃなくて、これは事故なんですって。」

「はい、わかりました。でもせっかくのお料理ですから、先に召し上がってからの方がよろしゅうございますよ？ではごゆっくり（「」）フフ・・・」

女性店員は半分ニヤニヤしながら襖を閉めて立ち去った。

「わかってないじゃん。（；・ー・） 〃3 フウ」

店員が誤解するのも無理はない。肌着1枚の女性の上に男が乗っかっているのだ。

「三木さん、本当にすみません。ご迷惑ばかりかけてしまっって・・・」
体勢を立ち直した綾乃がにこやかに卓に答えた。

「全然平気ですよ。なんか今ドキツとしちゃいました。とっても刺激的」

「クリーニング代は僕が出しますんで。」

「じゃあ、お言葉に甘えて。シミ抜きしなくてもクリーニング屋さんなら落としてくれるかもですね。」

「そう願いますけど（「」・；）」

「じゃあこれは一件落着。ここのお料理いただきましょう！」

「はい・・・」

このとき森田卓の脳裏にふと疑問が沸いた。これだけのドジをしてきたのに彼女は怒るうともしない。呆れもしない。

なぜなんだろう？これが園崎さんだったら逆上するに違いないのに（＾ー＾；）

(続
く)

その30 言えないどうし

言えないどうし

●森田ゆりかの視点

父親参観から5日経った今も、いずみは卓さんと話をしていない。あの日の夜、卓さんはいずみが大好きないちごロールケーキを買ってきてくれて、少しは機嫌が良くなりかけたのは確か。

でも卓さんはかなり酔っていたせいもあって、ケーキの箱を持ったらま上着を脱ごうとする意味不明な行動にでた。

当然そでを外したとたんにケーキの箱が床に落ちる。それに気づいてビックリした卓さんは、体のバランスを崩してよろめき、片足立ちになった。

転ばないようになんとか踏ん張って体勢を戻したのだけど、宙に浮いた片足が着地した場所は、ものの見事にロールケーキの箱の上だった。

“グチャヤツ!!”

「あ!Σ—11(;)—11」

卓さんが思わず叫んで棒立ちになっていたとき、ケーキの取り皿を準備してやって来たいずみが目の前にいた。

「もうっ!卓くんのドジッ!酔っ払い!」

いずみはそのまま反転して部屋に閉じこもった。

卓さんは鍵のかけられた部屋のドアの前で何度も謝った。午前中の授業参観に教室で起こしたドジも含めて謝った。

いつもの私なら、ここで卓さんのフォローをしてあげるのだけど、今回はできなかった。是枝^{これえだ}さんの“あの話”をお昼に聞いてから、

私自身も彼に疑念が生まれていたからだ。

この5日間、私は卓さんに確かめられないでいる。聞くのが怖い自分がいる。いつから私はこんな臆病者になったんだろう？

今まで何度も傷ついてきた。精神的にもどん底を味わった。病院やカウンセリングにも行った。そしてやっと掴んだ幸せ。

この1年半、本当に充実した楽しい生活をおくってきたのに…

是枝さんの話なんて信用したくない。そうよ。証拠もないんだし、人の話を鵜呑みにして深く考える必要なんてないはず…

そう自分に言い聞かせても、モヤモヤした気持ちが晴れないのは否めなかった。

●森田卓の視点

5日前のまりもさんと三木さんとの掛け持ちデートはゆりかにバレなくて済んだ。

気持ち的には胸を撫で下ろしていたけど、やっぱり後ろめたくてあと味が悪い。

と言って事実すべてを打ち明けることもできない。こんなこと話したらゆりかはきっとショックを受けるに違いない。

結局、ゆりかにウソをついてもらったお金も使わなかった。まりもさんとのカップル喫茶では彼女が清算していてくれたし、三木さんと食事したの和食のお店でも、彼女が支払うと言ってきかなかった。たので、僕がそれをかたくなに遮る理由もなかったからだ。

かと言って、余ったお金をそっくりゆりかに返金するのも不自然だ。心苦しいけど、僕のポケットマネーにするしかない。

“ごめんねゆりか…”

僕は家事をしている彼女の後姿を見ながら心で詫びた。

それにしても今だに続いている弁当攻撃。毎日お昼に三木さんとゆりかの手作り弁当を二つ食べているから太った気がする。いや、確実に太った。昨日からベルトの穴がひとつ分移動した。

「卓さん、明日の土曜日は何か予定ある？」

夕飯の片付けを終えたゆりかが僕に尋ねる。

「いや、別にないよ。どうして？」

「あのね、3人で遊園地に行きたいなあと思って。」

「??ゆりかが行きたいの？」

「違うわよ。卓さん、このままいずみといつまで口きかないつもり？」

「僕はそんなつもりはないんだけど、いずみが口きいてくれないからさ……」

「だからよ。いずみともっと楽しい時間を過ごせばきっと機嫌直してくれるわ。」

「うん。そうだね。わかった。そうじゃ明日みんなで行こうか！」

「決まりね。良かった。」

「いずみは行ってくて言うてくれるかな？部屋から出てこないけど……」

「大丈夫よ。いずみは遊園地大好きだもん。私が伝えておくから。」

「うん。頼むよ。」

僕は自分の力不足を痛感していた。9歳の女の子の心を傷つけてしまった。なんとか挽回したい気持ちでいっぱいだ。

そんな時、1本の電話がかかってきた。ゆりかがすぐに受話器を取って応答する。

「もしもし森田ですけど……あ！パパ？久しぶり。どうしたの？……え？明日？」

どうやら電話の相手はゆりかパパのようだ。会社では取締役役員の幹部で時期社長とも目されている人。

「明日はちよつと……家族で遊園地に行こうと思ってるの。……Σ

（……*エエッ！？ホントに？じゃママは？……ああ、ママは無理なのね……」

会話の内容からなんとなく不安を覚えた。電話を終えたゆりかは

僕の方に振り返って言った。

「明日パパが来るって。」

「（□、；）！お父さんが！？じゃ遊園地は中止…？」

「いいえ、一緒に遊園地に来るってハハ；」

「（ノ——）ノコケツ！！ありや」

「ママは婦人会のお茶会があるから来れないみたい。」

「Σ— 11（、；）—— 1お父さんだけって…なんか怖いなあ。
」

「パパはそんなに鬼のように見える？」

「僕に対しては表情がいつも険しい気がするんだけど…そもそも結婚だって渋々許してくれたわけだし（、；）」

「でも逆に考えれば、パパと仲良くなれるチャンスよ。いずみとも元通りになれば明日は一石二鳥だわ。」

「ま、まあ確かにそう考えればそうだけど。」

「私もいるから大丈夫よ。ね！明日は楽しみましょ！」

「う、うん。。」

ああ…困った。僕はまた何かやらかしてしまう気がする。。（

！、；ヒヤリ

（続く）

その31 ゆりかパパといっしょ（前編）

ゆりかパパといっしょ（前編）

●森田卓の視点

最悪だ。なんでこうなるんだろ。。（； ㄣ、）ハア

遊園地に来て楽しいはずの観覧車。楽しくなければいけない観覧車。

それなのに乗ってるのは僕と“ゆりかパパ”の二人だけ…（

；

「卓くん、私はいずみと遊ぶために来たんだけどねえ。」

「すいません。ごもつともで。（^□^；A」

「まさか君と差し向かえの二人きりで乗るとは思わなかったよ。」
明らかにご機嫌なためのゆりかパパ。

「つ、次から気をつけますんで。」

「…今までも何回か同じセリフ聞いているような気がするがね。」

「（。。；）ギク！」

そもそもこんなことになったのは、やはり僕に原因があった。

いずみが喜ぶと思って並んだスケルトンのゴンドラの列。

みんなで30分待って、やっと列の先頭に来たとき、いずみが突然言い放った。

「やっぱり怖いからアタシ乗らない。」

「（「□」；）！！えっ？」

「普通のでいい。」

これを受けてゆりかも意外な反応をする。

「Σ（「・・＊エエッ！？こっちの列がスケルトンだったの？」

「そうだよ。見てなかったの？」

「うん。ちよつと考え事してたからボーツとしてて。」

「（（ノ―ω―）ノバタ」

「ごめんなさい。私も無理。いずみと残る。」

ガ ΣΣ（。Δ、；） ン！！

「なんでだよ？ゆりかも怖いの？」

「だって私スカートだもん。見たらわかるでしょう？」

「あ・・・」

「もうっ！そのくらい察してよね。」

温厚なゆりかも呆れ気味。

「お客様、早くお乗りになって下さい。ゴンドラが上ってしまします。」

と係員が焦り気味に僕たちを促す。

「せっかく並んだんだから卓さん乗って来て。ほらパパも。」

「え？お前たちが乗らないなら別に・・・」

「いいから早く早く！チケットもつたいないでしょ！」

「ええゝ？そんなあ・・・」

と僕も思わず叫んだのもむなく、ゆりかに背中を押されるように飛び乗ったゴンドラ。しかも機嫌の悪いゆりかパパとの相席。

ああゝ最悪だ。。。。（。、Δ、）。。

僕とゆりかパパはしばらく無言で下界を眺めていた。何か会話をしなきゃと思っても、話すきっかけが見つからない。

一体何を話したらいいんだろう。世間話でもしたらいいのかな？ダメだ白々しい。つまらないし会話も続かない。

そうだ！今の見たまをしゃべればいいんだ！その方が自然だ。うん、そうしよう。

「あの向こうに見える建物が水族館ですかね？」

ゆりかパパは僕の視線の方角をチラッと見て一言。

「ああ。」

「あの大きなデパートはヨーカドーですかね？」

再びチラ見して一言。

「ジャスコ。」

結局これもまた会話が続かない。参ったホントに。

この観覧車が1周するまでにはまだ相当の時間がかかる。

僕はこの長い長い時間をゆりかパパとどう渡り合えばいいんだろう。

。（・T―T）

その32 ゆりかパパといっしょ（後編）

ゆりかパパといっしょ（後編）

ゆりかパパこと・須藤源一郎は、目の前にいる義理の息子・森田卓を見て首をかしげた。

どうしてこの男はいつもおどしてるんだろう？自分に自信がないのか？それとも義父である自分に相当気を遣っているだけなのか？

いや、でもそうは見えない。気を遣っていたらもつと積極的に話してきてもいいはずだ。この男は目線すら合わせない。

源一郎はそわそわしている卓を見ながら苛立ちも覚えていった。

どう見てもハンサム顔ではないし、落ち着きもない。

ゆりかはなぜこの男を選んだんだろう？こんな男でも何かの才能があるのか？

ゆりかの強烈な熱意に負けて結婚を許したものの、今となってはそれで良かったのかと後悔の念が先にくる。

手塩に育てたわが娘の一生をこの男に託すことが本当に正解なのか？

観覧車に男二人きりの異様な静寂ムードの中、重い口を開いたのは源一郎からだった。

「卓君、ゆりかと結婚してどのくらいになる？」

「え？あ…えっと、1年半ですかね。」

「そうか…そろそろ子供ができてもいい頃じゃ？」

「あゝ、それはまだですねえ（^―^;）」

「ん？君は子供が嫌いってわけじゃないだろう？」

「はい、子供は好きなんですけど…お互い共働きですし、何かと忙しかったりで。」

「じゃあつまりその…なんだ、あっちの方は全然なのか？」

「は？あっちって？…どっち？^| ^:」

「（ノ|ω|）ノバタ あっちはあっちだ！話の流れでわかっても良さそうだが？」

「あ…家事の片付けとか手伝いますよ。いずみの勉強も見ますし…」
「そういうことじゃなくて…わからなかなあ？夜の夫婦生活のことだ。」

「あ、会話は結構してますよ。楽しく話せてます。」

源一郎は小さなため息をつく。

「卓君、君は話をわざとそらしてるのかね？子作りだよ子作り！」

「な、なるほどそっちのことでしたか（ノノノノノ）」

「白々しいな。で、ちゃんと励んでるのかね？」

「お義父さん、そんな露骨なこと…（^□^；A」

「ゆりかの前では言えないから今君に言ってるんじゃないか！」

「そのようですね（- -； まあ人並みには頑張ってるつもりで

すが…でも人並みがどの程度なのかはわからないですけど^| ^:」

「日本人のSEXの回数は世界でも最低レベルなんだよ。まだ若い君がそんな仲間に入ってると思えんが。」

なにもここでそんな豆知識を出さなくてもなあ…（D| ; ;

と卓が心でボヤいてもどうなるものでもない。

「だ、大丈夫ですよ。そのお…ちゃんと週2回は頑張ってますんで

（、；）」

「ブツ！…；…；…（。；*；；）回数なんて言わんでいいっ！」

「あ、すいません（^| ^:）聞きたかったのかと。」

「誰がだっ！、（、）ノムキイ」

「違ったんですね。（- -； ヒヤリ」

「まあ聞いてしまったから言うのもなんだが、それじゃたぶん平均

以下だな。」

「やはりそうなんでしょうかねえ？」

「そうなんだよ。結婚１年半でそれじゃあダメだな。」

「はあ…でもゆりかも毎日疲れてるし、どうしても週末しか。」

「土日ってことか。」

「いえ、金土です。日曜にすると翌日の朝早い出勤にきついですが。」

「……（――）はあ。。。」

源一郎は落胆した。ゆりかに恨まれてもあの時、結婚を許すべきではなかったとつくづく思っていた。

（続く）

その33 不幸の写真

不幸の写真

● 森田ゆりかの視点

それを見た瞬間、私の心臓が大きくドクンと鳴った。

今、私の手元には写真が5枚。それには卓さんと派手めな服装の女性が一緒に写っている。その5枚はおそらく連写したと思われる、卓さんと女性が見慣れぬお店に入るまでの過程が記録されていた。日付はいずみの参観日があった日のお昼ごろ。夕方からは新入社員歓迎会と聞いていたけど、その時間よりかなり早い。

“ウソ…信じられない” 私にはその一言しか浮かんでこない。先週、是枝さんから話は聞いていたけど、この目で確かめるまでは信じたくなかった。

でもこうして今、まぎれもなく証拠写真がここにある。

『この人が…三木綾乃って人…？』

私は呆然としたまま動けなくないでいる。

せっかく今日は楽しく遊園地に行けたのに。。
いずみと卓さんの仲が少し直りかけたのに。。

それは遊園地から帰宅後のこと。私が玄関のポストの中身をチェックすると、差出人不明で私宛の郵便物が届いていた。

とりあえず部屋で外出着から着替えて、卓さんが先にお風呂に入ってる間に封を開けたのだった。

数分間、動けなかった私だったけど、少しだけ落ち着きを取り戻した。でも写真の事実を心で否定しているのは同じ。

『なんとか冷静にならないと…』

かつての私は早合点もあつたし、思い込みも激しかった。同じ失敗はしたくない。

次の数分間、私は写真をじっと見つめながら冷静に考え込んだ。よくよく考えてみても、卓さんが綺麗な女性にモテる要素は見当たらない。私のようなタイプの女性がいれば別だけど、果たしてそんな人がいるんだろうか？

それにこの写真は本物だろうか？今はパソコンで簡単に加工できるし。それに…

『そうよ！そうだわ。たとえ写真が本物でもこれは浮気の証拠にはならないわ！』

私に明るい兆しが突然見えたのは1枚の写真にも幾通りもの解釈ができること。

偶然職場の子とバッタリ遭遇してお茶ただだけかもしれないし、お得意様の女性と商談だったのかもしれない。

あるいは卓さんがまたドジをしたために、勘違いされてお茶でもおごらされたとか…

そう考えると少し気が楽になった。それなら卓さんに聞けばハッキリするのだろうけれど、怖くて聞けない私もいる。

「ゆりか、上がったよ。次どうぞお。」

「（。。。）ギク！」

お風呂から出て来た卓さんの声が廊下から聞こえてきた。私は急いで写真を片付けて何事もなかったように振舞う。

「はい。すぐ入りまーす♪」

すぐに卓さんが部屋に入って来てため息をついた。

「ε - （ハ、ハ； ふう。やっぱりお義父さんといると疲れるよ。」

「そう？観覧車の中でパパと仲良く話してたのかと思ったけど？」

「そりゃ少しは話したけどさあ。」

「共通の話題とかなかったの？」

「それが全くないんだよねえ（^| ^;）」

「じゃあどんなこと話したの？」

「いやその…夜のエッチのこととか…」

「Σ（・・*エエツ!？」

「いや…なんでもない。聞かなかったことにして（^□^;A」

「もうパパったらっ！いつからエロオヤジになったのかしらっ！（

、^（」

「早く孫の顔が見たいのかも…？」

「いずみがいるのに。」

「ねえ、今夜…頑張ろっか？>（; ^ _ ^）」

「…うん。いいよ（*v.v）」

正直、今はそんな気持ちになれないけど、卓さんが私を求めてくれていることは浮気に関しては“潔白”ではないかと思った。だとすると、別な疑問がまた沸いてくることになる。

是枝さんの言ったことは全てウソなのかしら？だとしたら何のため？

あの写真を撮って送りつけて来たのは誰？それも是枝さん？

いや、それは違う。写真の時刻に彼はこの家で私と話している。

どっちにしても謎だらけ。やっぱり卓さんに事情を聞くしかないのかな。

でも今夜はやめておこう。卓さんの気持ちが萎えてしまったら子作りできないもの。

その2日後、私が仕事から帰宅していつものようにポストをチェックすると、また私宛で差出人不明の封筒が1通入っていた。

急におとといの不安が蘇る。とにかく確認しなければ先に進まない。私はゆっくり封筒を開ける。

やはり中身は写真のようだ。私の鼓動が更に激しくなる。

いやな予感が的中した。その写真を見て私に激震が走った。

卓さんの上半身が裸だった。それだけならまだしも、彼は後ろ手に手錠をかけられ、目隠しまでされている写真。

全く意味がわからないでいる私。

“卓さん…誰かに脅されているの？”と最初は思った私。

(。○。;)ハッ!!

すぐに私はこの写真の別な意味を理解した。

これって…もしかして“プレイ”なんじゃ…?+

(続く)

その34 相談相手

相談相手

「是枝さん、3番回線にお電話です。非通知で。」
「誰から？」

「知人だと言ってます。出ればわかりますと。女性です。」

「え？……わかりました。出てみます。」

仕事も昼休みになろうとしていた矢先、是枝は突然の個人的電話に少し戸惑いながらも自分のデスクの前に配置されている受話器を取った。

「もしもし、お電話代わりました。是枝ですが。」

「突然ですみません。私、森田ゆりかです。」

「ゆり……!!」

是枝はすぐに口をつぐんだ。自分の斜め前のデスクには森田卓が座っているのだ。

「あの……主人には内緒にしてください。そばにいるんでしょう？」

「ええ、僕のすぐそばに（^ー^;）」

「三木綾乃という人も近くの席なんですか？」

「え？ああ……いえ、彼女は少し離れた席です。」

「そうですね……あの、失礼ですけど是枝さん、先日私宛に郵便物を送りました？」

「は？いえ何も。……どうかしましたか？」

「じゃあ是枝さんではないんですね……」

「何か事情がありますね。僕で良かったら話をうかがいますよ？」

「今はまだ仕事なので……私はもうすぐお昼休みですけど是枝さんはどうですか？」

「僕も正午から1時間そうですね。」

「じゃあそのとき携帯でお話していただけますか？」

「ええ、それは構いませんけど…会って話はできませんか？」

「それはちよつと…そちらと距離がありますし、昼休み時間だけでは足りませんもの。」

「そうですか…わかりました。じゃあ番号を教えてくださいただいたら僕からかけましょうか？」

「いえ…是枝さんに通話料でご迷惑をかけますから私の方からで。」

「（m o）プ そんなのパケ放題だから平気ですよ。意外とこまかいんですね。」

「あ…うちはパケ放題じゃないものでつい…（； ^ ー ^）」

「でしたら尚更僕から電話した方がいいでしょう。僕に番号を知られたくないのなら別ですが…」

「それも少しはあるんですけど…」

是枝は思った。“なんだ、結局本音はここか”

「僕を警戒するわりに会社に電話してくるあなたも不思議ですね。」

「警戒だなんてそんな…失礼なこと言っただけを悪くされたのならごめんなさい。」

不意に皮肉をからめてしまった自分の言動に“まずい”と気づいた是枝は、急ぎ言葉を訂正する。

「いえいえ、いいんです。僕の方こそ余計なことを言いました。せっかく勇気を出して僕にかけて来てくれたのに。」

「私…どうしても確かめたくて…私の携帯番号おしえますので。」

ここから是枝は小声で囁くように話す。

「あの…やっぱり会って話しませんか？ご主人にも関わる大事ことでしょう？」

と是枝は、そばでデスクに向って仕事をしている森田卓の背中をチラ見しながらゆりかに問いかける。

「ええ、そうですねですけど…でも時間が…」

「昼じゃなくても仕事が終わってからのの方が時間がとれませんか？」

「そうですね。どこか目立たない所で少しの時間なら……」
「もちろんです。ではそうしましょう！」
「はい。」

こうして待ち合わせを決めた是枝とゆりか。
だが、このことが森田卓とゆりかの結婚生活の崩壊に拍車をかけることになる。

（続く）

その35 予想外のショック

予想外のショック

● 森田ゆりかの視点

「あの… 是枝さん、ちょっと警戒しすぎじゃありません？」

「いえ、そんなことはありません。ゆりかさんに迷惑をかけてはいけませんから念には念を入れたまです。」

「はあ…（ハ―ハ；）」

是枝さんは私と待ち合わせ場所にネットカフェを選んだ。そして今こうしてダブルブースの少しゆったりしたソファに二人で座っている。対面ではなくて、隣同士だからなんとなく落ち着かない。

「僕とゆりかさんが公な場所で偶然知り合いにでも目撃されたら勘違いされるのは目に見えてわかりますからね。」

「それはそうなんでしょうけど… でもネットカフェでおしゃべりしたらマズインじゃないですか？」

「だからこうして小声で話してるんです。席も一番奥の隅っこにしたのもそのためです。」

「でも隣の席に他のお客さんがいるみたいですけど（ハ―ハ；）」

私が小声でそう言ったのが聞こえたのかもしれない。隣の誰かが席を立て、他の離れた場所へ移動する音が聞こえた。

「どうやらお隣さんが気を利かせてくれたようですね。」

「話し声で気が散るからだとは思いますけど（ハ―ハ；）」

「ま、とりあえずは話しやすくなったでしょう？」

「ええ…」

「昼の電話で郵便物がどうのこうの言っていました、詳しく教えていただけますか？」

「はい… 実は宛名不明でうちに写真が送られて来まして。」

「それを僕が送ったと思ったのはなぜですか？」

「それは…」

私は一旦話すのをためらった。それは自分の家庭の恥の上塗りではないかと一瞬思ったから。でもそれじゃ真実は永遠に見えない。うやむやにすればこの先苦しむのは私。

そう思いなおして今度はハッキリと是枝さんに伝えた。

「それはこの前、あなたからうちの主人と三木綾乃という同僚の女性に怪しい関係だと聞いたからです。」

「…それと送られて来た郵便物とどんな繋がりか？」

「その郵便物には写真が入っていました。その…主人が若い女性と歩いて怪しいお店に入って行く所とか。」

「Σ(□□)…ええっ!？」

是枝さんは寝耳に水といった感じで、本当に驚いた様子だった。

「なるほど。それで僕がその証拠写真を撮ってゆりかさんに送ったのだと思われたんですね。」

「ええ…でも違うんですよ？」

「はい。僕じゃないですね。」

「じゃあ一体誰が…？」

「ん…今のところ僕に心当たりはないですが。。ゆりかさん、今その写真をお持ちですか？」

「ええ。一応バッグに入れてきたので。」

「よろしかったら見せてもらえますか？」

私は正直悩んだ。写真を送って来た本人ではない人に見せてもいいものだろうか。もしそれで写真の相手が三木綾乃さんだと確認されたら私はどんなショックを受けるんだろう？

私が躊躇しているのを是枝さんは察したようだ。

「すみません。無理には言いません。ゆりかさんの今の気持ちも考えずに僕が図々しいこと言ってしまうて。」

「いいえ。そんなことないです。決してそんなこと。」

私は自問自答した。

“これで終わらせていいの？是枝さんに相談すると決めてここまで来たのに意味ないじゃない！彼はパパの信頼も厚かった人。きっと何かあった場合に解決策も考えてくれるかもしれない。”

私は彼に写真を提示した。

「ごめんなさい。少し気持ちに抵抗があつて。これです。見てください。」

私を手渡した写真を見るや、なぜか是枝さんは「え？」というようなしかめっ面になった。不思議に思った私が更に小声で彼に問いかけた。

「主人のとなりに写っている人…この人が三木綾乃さんという人なんですよね？」

このあとすぐに、私は予想もしない答えを聞くことになる。

「違いますね。三木綾乃さんではありません。」

「Σ―11(;)―1えええっ！！？」

今までとは全く別なショックが私を襲う。

「そんな…じゃあこの女は一体誰なんですか？主人と何の関係が？」

「…ん、僕にもこの女性は誰かわかりません。少なくともうちの会社では見かけたことはない…ですねえ。」

「一体、主人に何が起こっているんでしょう？三木綾乃の他にも女がいるってこと？」

「ゆりかさん落ち着いて下さい。ここは特に冷静に。」

「でも…でも。」

動悸がして息が苦しくなった。

「大丈夫ですか？ゆりかさん。安心して下さい。僕があなたを助けますから。今は事情がわからなくても、きっと調べてハッキリさせます！僕がお約束します。」

今、私には頼れる人は是枝さんしかいない。そう、彼なら信頼できる。パパが絶対的信用してきた人だもの。

「すみません。お願いします。」

是枝さんと別れて家路に向かう途中で私の頭にずっとよぎっていたこと。

『正体のわからない謎の女』 『写真を撮った第三者』 『三木綾乃という女』 そして何より卓さんの行動。

卓さん…今まであなたを信じて疑わなかったのに。
どうしてこんなことに。。。

(続く)

その36 是枝のアドバイス

是枝これえだのアドバイス

● 森田ゆりかの視点

「おそかったね。残業？」

卓さんが帰宅したばかりの私に問いかける。是枝さんと会った約1時間の間に卓さんが先に帰って来ていた。

「うん。ちよつと仕事が終わらなくて…ごめんね。すぐごはんの用意するから。」

「そんな慌てなくていいよ。ゆりかも疲れてるんだから。僕は先に風呂に入るよ。だからゆつくりとマイペースでね。」

「うん。ありがとう。いずみは部屋？お腹空いてるでしょうね。」

「それは大丈夫。シュークリーム買って来たからさっき僕がいずみの部屋に持って行ったんだ。」

「ホント？嬉しい！私も分もあるの？」

「もちろん。」

「で、いずみの反応はどうだった？」

「だいぶいいよ。僕に微笑んでくれたもん。」

「良かったあ。少しずつ機嫌が直ってるわね。」

「僕がドジだからしょうがないよ。」

「…（^ー^;）」

こここの場面の私は否定も肯定もできなかった。

「僕が料理作れたらいいんだけど、インスタントラーメンしか作れないからなあ。」

「いいのいいの。気にしないでお風呂行って。」

卓さんはいつも優しい。私への気遣いは今までと何も変わらない。こんな彼なのに浮気しているなんてとても思えない。何かの間違い

だとしか考えられない。

私は食事の支度をしながら、是枝さんとの対面を頭の中で整理してみた。

写真の相手が三木綾乃ではないという事実が大ショックを受けた私。そのおかげで、是枝さんに2日遅れで届いた“いかがわしい写真”を見せるきっかけを失った。一体どう解釈したらいいんだろう。卓さん本人に直接聞けないでいる私も情けない。こんなことで家庭がギクシャクするのはイヤ。幸せな家庭が崩壊するのはイヤ。私が黙認していれば何ら変わらない生活を継続してられる。

でもそれはやっぱり逃げ口上。そんな偽りや我慢の生活を続けて幸せでいられるはずがない。だいいち私の精神がもたない。それもわかつているのに聞くことが怖くてたまらない。

30分前までは是枝さんと一緒だった私。彼はそのときの私の心中を察したようにこう言った。

「ゆりかさん、聞くに聞けないでいるんでしょう？ 勇気もいりますし、家庭全体のこともありますしね。」

「そうなんです。ホントにそうなんです。もし聞くとしてもどういうきっかけから話していいものか。」

「そうですね…いきなりストレートっていうのもですね…」

1、2分ほどの沈黙の後、彼は再び口を開いた。

「じゃあこうしたらどうでしょう？ ご主人を問い詰めるんじゃないで、間接的にさりげなく聞くんです。」

「それって…わかりますけど、具体的にはどんなふうに話せばいいんでしょう？」

「たとえばですね…『お得意様と外で商談したりすることってあるの？』とか。」

「ええ…」

「もう少し確信に迫りたいときは『ゆうべ寝言で綾乃って何度も言

つてたけど誰？」とか。」

「Σ（・　・　*エエツ！？でもそれって直接すぎませんか？（^|　^；
）」

「いえ、そんなことないですよ。あくまで寝言で聞いたことに対しての疑問を訊ねてるだけです。逆に言えば、寝言のせいにした方が聞きやすいかもしれません。そうでしょう？ゆりかさんは三木綾乃の名を知るはずもないんですから。」

「そうですね。何で知ってるのか聞かれたら寝言で聞いたことにすれば済むんですね。」

「できそうですか？」

「…というよりも、この写真が三木綾乃という女性じゃないなら、それだけ聞いてもどうかと。」

「たしかにそうかもしれません。僕もびっくりしました。でもごく自然に考えれば、ご主人の身に別々な二つの出来事が同時に起きているのかもしれませんが。」

「そんな…」

「すみません。ゆりかさんを脅かしてるわけじゃないんです。ただ、わかることからひとつずつ真実に近づいていく上で実行してみても悪くはないかと思えますよ。」

「…はい。。確かにそうですね。。」

「あ、そうだ。もし実行するにしても、あと3日間くらいは様子を見てからにした方がいいでしょう。その間に何かわかるかもしれませんし、僕の方も森田さんを職場でチェックしてますから。」

「はい…」

こんな会話で終わったネットカフェでの1時間。

あと3日間の間に私も冷静に分析しよう。考えられるだけのことは考えてみよう。

卓さんがどうか潔白でありますように。。。

（続く）

その37 見られちゃった！

見られちゃった！

● 森田卓の視点

「なんでこんなところで弁当食べてるんですか？」

「、；；、；；、（；；；；；）ブツ！こ、是枝君、いつからここに？」

僕はそれまで飲んでいたごはん混じりのお茶を思わず吐き出した。「大丈夫ですか？僕は今来たばかりですよ。たまに屋上に出てみたくなっただけですから。」

「いやでも。」

そう、僕は会社の屋上の片隅で、今日も三木さんからもらった手作り弁当を食べている真っ最中。人に見られてはいけない場面なのだ。

うちの会社の屋上なんて、めったに人が来ないはずなのに。だからここを選んだのに。

しかも僕は出入り口から真裏の日の当たらない狭いスペースの中でひっそり食べていたというのに、是枝君がひょっこり現れるとは想定外だった。

「な、なんでわざわざこんな日陰に来たの？」

「陽射しがきついからですよ。今何度だと思えます？36.7度ですよ？信じられない暑さじゃないですか。赤道直下でもないのに。」

「まあ温暖化が進んでるからね（^ー^；）是枝君、こんなところエアコンの効いた中の方がいいのに。」

「それは森田さんだって同じだと思いますけど？」

「う…それは。今日はたまたま外で食べる気分だったから。」

「じゃあ僕もそれと同じ理由です。たまたまここに来たかったんで

す。」

「あ、そう（　　）。」

是枝君は不思議そうな顔でマジマジと僕の弁当を覗いていた。

「どうかした？唐揚げか欲しいの？」

「いえ、違いますけど。」

「じゃあこのエビチリシユウマイ？」

「いえ、僕はお腹いっぱいですから。」

「じゃ何？」

「あのー。。森田さんさつき、自分のデスクで別な弁当食べてたんじゃないませんでした？」

「へ（　　）ω（　　）——（　　）へぎくッ！」

是枝君の言ってることは図星だった。さつきまで僕はゆりかの弁当をデスクで食べていたからだ。

「いやいやいや、半分残して来ただけなんだ。場所を替えようと思つて。」

苦しい言い訳の僕。当然突っ込まれるのも無理はない。

「でも弁当箱の種類も形も全然違いますよね？」

「え？あ、これはその…ほら、僕って早食いで大食いでしょ？」

「知りませんけど。」

「いや実はそうなんだ。だからお代わり分も作ってくれるんだ。」

「へえ、それはすごいですね。それで弁当が二つあるんだ。」

それでも枝君はまだ不思議そうな顔が解けずに僕から離れない。

「まだ何か？（　　）へー（　　）へ（　　）（　　）」

「…森田さん、僕にウソは言わなくていいですよ。」

「別にそんな…」

「その弁当はもらったものでしょ？三木綾乃に。」

ガ　ΣΣ（　　）。　　（　　）　　（　　）　　ン！！

僕は一瞬にして自分が顔面蒼白になっていることがわかった。そしてただの一言も是枝君に反論どころか言葉すら出ないでいる。

「森田さん。そんなバケモノを見るような目で僕を見ないで下さい。僕は森田さんの味方ですよ。」

「……えっ？」

「それとも僕が黒崎や白石たちと同じ穴のムジナだと思ってます？」

「いや、そんなことは…」

「なら良かった。彼らは森田さんをからかって楽しんでるだけですからね。」

「はつきり言うね（　・　・　）」

「とにかく安心して下さい。できる限りのことは協力しますから。」

「き、協力って…何の？」

「じゃああなたはつきり言わせてもらいますけどね、森田さんは今、何かやっかいなトラブルに巻き込まれてるんじゃないですか？」

是枝君は核心をついてくる。確かに当たっているけどなぜ彼は僕のトラブルがわかるんだろう？思い切って聞いてみた。

「是枝君は僕のどんなトラブルを知ってるの？」

「詳しくは知りませんが、さっきも言いましたが、三木綾乃から毎日弁当をもらっていること。」

「そ…それで？（　・　・　）」

「そのおかげで森田さんが明らかに太ったこと。」

「やっぱわかる？（　^　□　^　；　A　）」

「失礼な言い方ですけど一目瞭然です。」

「（　・　・　；　）アハハ…じゃあきつとまわりの同僚にも気づかれてるってこと？」

僕は苦笑いしてるしかなかった。

「それはどうでしょう？みんな森田さんには関心がないから気づいてるかどうかは…」

「（　（　ノ　ω　ノ　）　）ノバタ。是枝君、ホントに僕の味方になってくれるの？　^　^　・　・　）」

「もちろんです。だからはっきりしておくべきことは言っておかないと思ひまして。」

「な、なるほど。じゃあ他には何か気づいてることある？」

「他にもあるんですか？」

「（。。。）ギク！いや、何もないよ。何も」

「なんかありそうですね。他にも女難の相とか。」

「えー？！（０）どうしてわかるの？」

「やっぱりあつたんですね（「！」；）」

「あ・・・」

自分でもあきれほどバカ正直だとつくづく思う瞬間だった。全くこんな瞬間が今までに何十回あつただろう。（「！」；）」

「で、話を戻しますが、どうなんです？森田さんは三木綾乃をどう思ってるんですか？不倫してもいいと？」

「と、とととんでもないっ！僕はうちの奥さん一途だよ。この弁当は断りきれなくてもらってるだけで。。」

僕は食べかけの弁当のフタを閉じた。もう食べる気もしない。

「やっと正直に言ってくれましたね。」

「だって変な勘違いされたら大変だからさ。」

「わかりました。信じますよ。だから安心して下さい。」

「じゃあ頼むから僕と是枝君だけの話ということでお願い・・・」

「もちろんです。このことは奥さんには絶対バレないようにしなければなりません。」

「う、うん。（・・・）」

「だから奥さんに何か勘ぐられることがあつたとしても絶対にシラを切るべきです。わかりますか？」

「そ、そうだね...うちのゆりかは勘がいいから。。正直、今でさえ何か探られてるような気がするんだ。」

「それなら尚更です。知らぬ存ぜぬでいいんです。証拠がない以上推理にすぎませんからね。変に誤解されて火種の元になるのもいやでしょう？。」

「だよ。うん、そう思う。是枝君、恩に着るよ。ありがとう！」
「良かった。何かあったら相談にのりますから気軽に声をかけて下さい。」

去ってゆく是枝君を見ながら再び残りの弁当を食べ始める僕。ひとつホツとすると食欲が急に沸いてきたのだ。

「これだから太るんだよね。でも残すのもったいないし。。ああ、メタボにも気をつけないう。」

● 森田ゆりかの視点

仕事後の買い物中、私のケータイに是枝さんからメールが来た。結局この前、彼と会ったときに番号とメールアドレスを交換したのだった。

“心苦しいですが、ゆりかさんには正直に言っておこうと思っています。”

実はご主人、三木綾乃から毎日手作り弁当をもらって食べているようです”

（□；）！！そ、そんな。。

私は絶句した。彼の文章はまだ少し続いていた。

“ゆりかさん、くれぐれも僕が教えたことは内緒にしてください。僕とゆりかさんが顔見知りだということをご主人は全く知りませんし、ご主人と一緒に仕事をしている僕の都合上、恨まれたくないのです”

私はすぐに返信した。

“決して言いませんから安心して下さい。教えて下さって感謝して

います”

買い物中だった私は、一気に今夜の献立を考える気力を失ってしまった。今日はもう何も作る気にならない。

ちょうど私は、目の前に陳列されている特売のカップラーメンに気づき、おもむろに3個、ショッピングカートに投げ入れていた。

（続く）

その38 是枝の思惑

是枝これえだの思惑

是枝の計画に想定外のことが起きていた。森田ゆりかから見せられたあの写真。

あれは明らかに意図的なものだ。一体誰がそんなことをする必要があるのか？そして目的は何なのか？

自分の知らないところで別な何かが進行している。是枝はそう感じとった。

だから森田ゆりかとネットカフェで会ったあの時、とっさに3日間だけ行動を控えるように指示した。

その間に少しでも調べる時間を稼ぐためだ。自分の計画の妨げになるとやっかいなことになる。

一体誰が森田夫婦をおとしめようとしているのか？

おそらく単独の人間ではないだろう。誘う側と証拠を撮る側がきちんと役割分担されているからだ。

是枝は考え込んだ。

『こいつらは俺にとって敵か味方か？』

当然それ次第で計画の進行も狂ってくる。

『しかもなんで俺がしようとしてる同じ時期に。。』

とにかく是枝にとっての手がかりとしては、やはり同じ職場の森田卓の口を割らせて事情を知るしかない。

昨日も昼休みに屋上で三木綾乃の弁当を食べている森田に話しかけた。あの調子なら今日だって意外と簡単にしゃべってくれる。是枝はそう確信した。

昼休み。オフィスから出て行った森田に5分ほど遅れて、是枝は

早速目的地の屋上へ向う。

エレベーターに乗るまでの長い廊下を歩いていると、いきなり真横のドアが開き、血相を変えた男に無理矢理腕を引っ張られて中に連れ込まれた。

そう、なんとその男が森田卓だった。さすがにこれには是枝も驚いた。

「どうしました？ここ、用具室じゃないですか？何か探し物でもしてたんですか？」

もちろんそんなことなど思ってもいない是枝だったが、少しとぼけてみるのも話を聞きだすための一つの手なのだ。

「い、いや違うんだよ。いつもここは鍵が閉まってないから入っただけで…」

「森田さん、なんか動揺してませんか？また何か心配事でも？」
明らかに森田卓には落ち着きがなかった。

「えと…そのおゝマズイことになっちゃって…」
「というと、ひょっとして奥さんに…？」

「か、勘がいいね是枝君（＾―＾；） そうなんだ。ゆりかにバレちゃったんだ。」

「（。〇。；） ええっ？ホントですか？でもそんなはずは…」
「え？（・・）」

「いやいやいや、僕は誰にも話してませんよ。三木綾乃のことなんて。」

「いや、それとは違うんだよ。別の件で。」

「はあ？…あのお、だったら僕には事情が全然わかりませんか？」

「昨日話ませんでしたっけ？」

「全然（＾―＾；）」

「そっか…そうだったっけ？じゃどうしよう。参ったなあ。」

「森田さん、焦りすぎですよ。もう少し冷静になって下さいよ。」

「う、うん。そうだね。ごめんごめん。確かにそうだね。バカだな僕って。」

是枝も心の中でそのことに同調した。森田は本当におバカな男だと。

「じゃ聞いてくれる？是枝君。君しか話す人はいないんだ。」
「もちろん。」

「ありがとう。じゃあお礼にこの弁当食べていいから。」
「いりませんって。」「ハハ…わかる？」

「そりやわかりますよ。はあ…なるほど。この部屋でいつも彼女から弁当を手渡されてるんですね？」

「へ（ω）——（へぎくツ！こ、是枝君、探偵になれるね）
-」

「まあとにかく話を聞きましょう。」

「うん。じゃあこの弁当でも食べながら聞いて。」

「だからいらないうって！（-」

「そう言わずにさ。是枝君はまだ社食行っていないんでしょ？」

「そりやまだですけど。」

「じゃ遠慮しない遠慮しない。さ、食べて食べて。」

「いや決して遠慮はしてないんですけど。（-」

と、是枝がいくら断つても、森田はすでに弁当箱の包みを解き、フタも開けて是枝に差し出していた。

「（-」 3 フウ わかりました。せっかいですからいただきます。」

「うんうん。食べながら聞いて。その方が僕も話しやすいんで。」
「何ですか？」

「僕、極度のあがり症だからさ、真剣な顔で聞かれると言葉がしどろもどろになっちゃうんだ。わかる？」

「あーはいはい。そういう人いますもんね。じゃ早速食べますよ。」
「うん。そうしてそうして。」

是枝は森田から弁当を受け取ると、すぐにおかずから手をつけた。
「なかなかいけるでしょ？三木さんの弁当。」と森田が言う。

「そんなこと言っていていんですか？そろそろ本題に入りましょうよ。」

「あ、ごめん。そうだね。僕が引き止めておいて申し訳ない。」

是枝が口をモゴモゴしながら話を促す。

「じゃあどうぞ。バレちゃったって一体どういことですか？」

是枝は内心、しめしめと思っていた。こっちが無理に聞き出さなくても森田が勝手にしゃべってくれる。まさに思惑どおりだ。

「うん。それなんだけど…実はね。。」

「実は？」

「ちよつとその前にさ、その竜田揚げ一口だけ食べさせてくれない？w」

「（ノ——）ノコケツ!!」

「ごめんね。見てるとおいしそうでつい。。（^□^;A」

（続く）

その39 ゆりかの決起

ゆりかの決起

● 森田ゆりかの視点

それは昨日のこと。

3日も待てずに私は例の写真を卓さんに見せてしまった。

でもこれは決して軽はずみな行動ではなく、私自身何度も考えて出した結論。

最初にこの話を切り出すまでにはかなりの勇気が必要だった。胸もドキドキするし言いかけようとして何度もためらった。

でも言わずに済まそうとは思わなかった。言ったところで決して是枝さんにも迷惑はかからないと確信もしていたし、送られて来た二度の写真についてよくよく考えてみると、これは仕組まれた罠だと思える節が見えて来たから。

第一にこの写真の相手は三木綾乃ではない。ということは是枝さんとは無関係。卓さんが是枝さんを疑う理由もない。

私は最初、この写真の件は卓さんを大目に見てあげるつもりだった。きつと彼も被害者なんだろうと思った。そう思いたかった。

それなのに。。。それなのに。。。

卓さんが三木綾乃から毎日手作りのお弁当をもらって食べてる事実を聞いたときは新たなショックが私を襲った。

夫がわからない。なぜ次から次へと問題が起きるの？卓さん、あなたは浮気してるの？してないの？

今まで直接聞けないでいた私は自問自答の繰り返し。でもついにそれに終止符が打たれる時が来た。

この日の夕食はカップめん。私に夕食の献立を考えるゆとりなどなかった。

「めずらしいね。ゆりかがカップめん出すなんて。」

「独身時代ずつと食べてたから好きでしょ!」

「そ、そうだけど…」

「私、今日すごく疲れてるの。ラーメンじゃ不満?」

「い、いや(^ - ^)全然平気だよ僕は。でもいずみは?」

「あの子にはコンビニでおにぎり買って、さっきお部屋に運んであげました。」

「あの。。。ゆりか何か怒ってる?」

「え?私が?何で?」

「いつもと比べて言葉が荒々しいからさ…」

「そんなこと…少しはあるけど。。」

「え?」

「いいから早く食べて。卓さんに話があるの。」

「な、なんの?」

「だから早く食べて。話はそれからよ。」

「ゆりかは食べないの?」

「後でいいわ。今のうち洗濯機回して来るわね。」

「う、うん。。」

●そのときの森田卓の視点

「卓さん、はいこれ。説明して。」

僕の目の前のテーブルに数枚の写真が並べられた。

「Σ(□□) あっ!こ、これは…!」

「どう見ても卓さんよね。この写真だってズームでしっかり撮られてるし。」

「そ、そうだけど…誰がこんな写真を?」

「知らないわ。玄関のポストに入ってたの。」

「悪質だなあ…」

「そうかもしれないけど、それより写真の説明をして下さい。」

「は…はいっ（^―^；）」

どうしよう？どう説明すりゃいいんだ僕は？是枝君のアドバイス通りにするとすれば、知らぬ存ぜぬを通すことだけど、それは三木さんの件がバレたらのこと。この場合には当てはまらない。だいいち証拠写真があるし。

「ねえ、卓さん何とか言って！もしかして言い訳考えてるの？」

「いや、そんなことは…（―；き、きつとこれはあのときだよ。ほら、新入社員の歓迎会の日。」

「この肩を並べて歩いてる女の人と二人だけで？」

「よ、予約してる店に行く途中でたまたまバツタリ会っただけだよ

（^□^；A」

「へへえ。そうなんだ。」

「う、うん。」

ゆりかはすごく悲しい顔になった。そんな顔も可愛いと思う僕は不謹慎きわまりないかもしれないが。

「卓さん、あなたは私にはウソはつかないと信じてた。」

「……」

「それなのにあなたは今ウソをついてる。」

「（。；）ギク！」

ゆりかはエプロンのポケットからまた別の写真を出した。

「卓さん、これが新入社員の歓迎会？」

僕はそれを見るや思わず飛び上がった。

「ガ　ΣΣ（。d；）　ン！！な、ななななな…なんだこれは！！」

「なんだって言ったって、心あたりあるでしょ？卓さん自身だもの。」

僕が仰天したのは自分の哀れな姿の写真だった。

あのと き…うす暗い部屋で倉沢まりもさんに目隠しされて手錠も
ハメられたあのと きの写真だ。

「ひえー！（　〇　）なんでこんなもんまでが。」

（続く）

その40 第一の難関クリア？

第一の難関クリア？

「それでどうなったんですか？」

是枝これえだはいささか緊張気味に森田卓からそのときの事情を聞いていた。

それもそのはず、万が一自分が森田ゆりかに関わっていることが間接的にもバレはしないかという不安がよぎっていたからだ。

「うん…写真に撮られてるのは明らかに僕だし、言い訳はできないと思ったんだ。」

「じ、じゃあ奥さんに全て正直に言っただんですか？」

「うん。実はそうなんだ。もう観念したって感じかな。」

「………」

「…あ、でも三木さんのことは全然しゃべってないよ。まだ。」

「ま、まだ？（^ー^;）」

「なんか知らないけどさ、ゆりかには全てお見通しされてるみたいで隠し事ができなくなっちゃうんだよね。」

「ダ、ダメですよ。きっと奥さんは誘導尋問がうまいんでしょう。」

三木綾乃のことまでうつかり言ったら大変ですよ！

「そうだよね…それだけは言わないつもりだよ。」

「なら安心しました。」

「弁当のことを知ってるのは是枝君だけだから、君がゆりかに言わない限りは大丈夫だよ。」

「（。。。）ギク！」

その弁当を食べながら聞いている是枝のハシが思わず止まった。

「冗談だよ。冗談。怒っちゃった？ごめんごめん。もう言わないから。」

「いや別に…ちょっとのどにつかえただけで…」

森田卓の凶星のジョークに一瞬冷や汗が流れた是枝。

「うちのゆりかって超能力でも持つてるのかなあ？ 勘がすごくいいんだ。そう思わない？」

「僕に聞いてもわかるはずないでしょ！ 奥さんと会ったこともないし、この写真の話もまだ途中で僕には意味がさっぱりわかりません！」

「あ、そっか。そうだったね（＾―＾；）」

「だから早く本題に入りましょうよ（；―；）」

「ごめんごめん。早くしないと昼休みもなくなっちゃうしね。」

「その通り。」

森田卓はこれまでの一連の流れを、カミカミの口調ながらも是枝に説明した。

夜の帰り道で倉沢まりもの落し物を拾ってやったところからの関わり。

その後、彼女からのお礼を兼ねてのお食事会。その場所がなぜかカップル喫茶かハブニングバーのような、通常の接待とは言い難い場所であったこと等である。

一通りの説明を聞き終えると、是枝は何度もゆっくりと首をたてにして頷いた。

「やっと事情が飲み込みました。」

「これでわかってくれたでしょ？」

「ええ、でもぶっちゃん聞きますけどいいですか？」

「もちろん。」

「その女性とは、そのとき全く関係は持たなかったんですか？」

「関係って？」

「率直に言つとエッチ。」

「（□；）……！ととととんでもない！」

「エッチはしなくてもSMごっこか。」

「してないよ全然！」

「そこまで仕掛けられて途中でやめれるもんですね？」

「でもそうなんだもん。それに焼酎もたくさん飲んだから眠ちゃったし。」

「酔って寝たから覚えてないだけってことはありませんか？」

「それはないよ。飲んだ焼酎の銘柄も覚えてるし。森伊蔵だよ森伊蔵！そのあと魔王も飲んだんだから！普段絶対に飲めないでしょ？」

「そっちの記憶は鮮明なんですね（ー；；」

「僕、なんかおかしい？」

「まあその…なんとも言えない部分ですけどね。で、そんなことより奥さんの反応はどうだったんです？」

「それがね、一応は話を納得してくれたんで助かったんだ。」

「（。。。）ほー。そんな写真がありながら奥さんはよく理解されましたね。」

「うん。正直僕もびっくりしたんだ。」

「じゃ怒られなかったと？」

「そりゃ少しは怒られたよ。『あなたは不注意過ぎるから充分気をつけて！』って。」

「はあ…それだけですか。まあ良かったじゃないですかホントに。」

「うんまあ。」

「でもこう言っちゃ失礼ですが、なぜその程度で済んだんでしょうね？普通、逆上してもおかしくないと思いますが…」

「怖いこと言うね是枝君（-；でもね、その点についてゆりかの意見は『畏』だって言ってたよ。」

「……さすが勘の良い奥さんですね。自分にとってもショックな状況でありながら冷静に考えられるなんて。」

「君も畏だと思っ？」

「そりゃ当然でしょう。わざわざ撮った写真を送って来てるんですよっ？」

「それが誰か全員わかれればもつといいんだけど。。でもゆりかは1人はわかるって言ってるんだ。」

「ああ、僕も1人はわかりますよ。森田さんにお礼をした女性ですよ。」

「Σ(・・*エエツ!?!すごい是枝君!ゆりかと同じ意見だ!」

「あのですね(^|^;)すぐもなんともないですよ。森田さんが目隠しされたり縛られたりした密室には、あなたとその女性がいなかったんですね?」

「うん。」

「だったらそんな至近距離から写真を撮るのは彼女しかないじゃないですか。」

「なるほど!そうだったのかあ!」

「(ノ――)ノコケツ!! あのだ…奥さんは僕が言ったような説明はしなかったんですか?」

「機嫌が悪かったからさ、そこまでの説明はちよつとね(^□^;」

A

「あ、そうですか(――;」

是枝は森田卓の鈍感さにげんなりした。

これくらいのことわかれよ!と叫びたいくらいだがそうもいかない。

一体、こんな男のどこにゆりかさんは惹かれたんだろう?

是枝はこの夫婦の組み合わせの方がどうしても納得がいかなかった。

しかしながら、是枝にとってはこれからの計画と任務のためにも森田卓とは親しくしておかなければいけない立場なのだ。

『ゆりかさんはいずれ俺のものにしてやる。。いずれ必ず!』

(続く)

その41 プライド・前編

プライド・前編

「おかしい…あれからもうだいぶ経つのにな何も変化らしい変化がない。」

ベッドで仰向けにタバコをふかしている慎也がボソツと呟いた。

その横でベッドを共にしている倉沢まりもが話しかけた。

「やっぱりそんなことを考えてたのね。」

「いや、今ふと思っただけさ。」

「ウソ！全然集中してなかったじゃない。」

「そんなことはないさ。ちゃんと時間もかけたじゃないか。」

「時間の問題じゃないわ。心ここにあらずだったでしょ！」

まりもは少し故意にすねてみせた。

「そうか…わかってたか。ごめん悪かった。そういうつもりじゃなかったんだ。」

「あのブ男のこと考えてたんでしょ？」

「変な言い方するなよ。まるで俺があいつに気があるみたいじゃないか。」

「別にそんなこと思っていないよ。」

「チクシヨー、写真も送ったのになんで何も反応がないんだ？」

「様子観に行ったの？」

「いや、俺は行ってない。情報が入ることになってるだけだ。」

「それって誰？」

「まあちよつとな。」

「もうっ！それなら最初からアタシじゃなくてその人に頼めば良かったのに！」

「それは無理だ。森田卓を誘惑するのはお前しかできない。」

「慎也の頼みだから仕方なくやったのよ！」

「もう一度頼んだらやってくれるか？」

「やめてよっ！一回ポツキリでたくさん！森田は生理的にもう無理！」

「アハハ。んじゃあその会社の部長はどうなんだ？付き合い長いじゃないか。その都度吐き気でもしてんのか？」

「ああ、あの部長さんね。あの人はドMなのにとってもダンディなの。それにアタシの方から触れない限り、先に触れてくることはないの。年は取ってても森田よりは数段マシね。」

「へえ、それは都合のいい金づるだな。そんなのが他に何人いるんだ？」

「今は5、6人かな。でも勘違いしないでね。別にアタシ、体を許してるわけじゃないから。M男を引っ叩いて喜ばせてあげるだけなもの。」

「（「ー」）フフ わかったわかった。」

「今のアタシは…慎也だけ。」

「今はか。まりもらしい答えだな。まあいい。ありがとよ。」

慎也はまりもの頭の後ろに腕をまわし包み込むように自分に引き寄せた。

まりもは慎也の方へやや横向きになり、自分の片腕を彼の胸板に乗せる。

そしてぼーっと天井を見ている慎也の横顔を見ながら言った。

「でもアタシ、ちょっと気になることがあるんだけど…言っていない？」

「ん？なんだ？」不意に振り向く慎也。

「怒らないで聞いてね。」

「ああ。」

「慎也つて、森田卓の奥さんに未練があるんじゃない？」

その瞬間、慎也の顔色がサーッと変わったのをまりもは見逃さなかった。

（続く）

その42 プライド・後編

プライド・後編

数秒間の沈黙の後、慎也は薄笑みを浮かべて口を開いた。

「（ー）フツ 未練？そんなのないさ。」

しかしまりもにはそれが慎也の強がりのようにしか見えなかった。

「ホントに？元カノだったんでしょ？すごい美人の。」

「…まあ、美人は美人だがそんなの関係ない。俺はただあの女に思い知らせてやりたいだけだ。」

「元カノをあんなブサイクに奪われたんだもんね。」

「うるさいっ！奪われたんじゃないって俺が捨てたんだ！森田はその後に現れた男だ。そして生意気にちゃっかりとゆりかを…」

「あのね、それが未練で言うのよ。捨てた女ならその後なんて誰と付き合おうが平気じゃない？」

「………」

慎也はまりもに自分の過去の汚点を打ち明けてはいなかった。

かつて、確かに一度はゆりかを捨てた。だが慎也は再び彼女とヨリを戻したくて会う約束を取り付けたものの、その時はすでに森田卓の存在があったのだ。

しかもその森田の目の前で、慎也はゆりかにきつぱりフラれて撃沈してしまったという過去がある。

「とにかく気に入らないんだ！俺よりいい男ならまだしも、よりによつてあの森田だぞ！なんであんなブサイクがゆりかと結婚できるんだ？絶対納得できない！」

詳しい事情は聞かなくとも、まりもにはおおよその見当がついていた。こういうときの女の勘は鋭い。

「つまり慎也のプライドが傷つけられたって訳よね。」

「…違う。たとえ捨てた女でもブ男と結婚したら俺が負けた気分になるからな。それだけだ。」

「まりもは思った。慎也は強がりを言っているにすぎない。そしてきつと事実を隠している。彼は自分の敗北を完全に認めたからこそ、その悔しさで森田夫婦を陥れようとしているのだ。」

「それってやつぱり森田卓に嫉妬してることになるわよね。」

「まりも、さつきから俺にケンカ売ってんのか？」

「慎也はベッドから上半身を起こして声を荒げた。だがまりもは至って冷静だった。別に慎也にケンカなど売る気など毛頭ない。」

「ちよつと怒らないで聞いて！嫉妬なんて誰でもするものよ。恥なんじゃないわ。」

「………」

「じゃあアタシが正直に言うわ。あのね、別に慎也だけが嫉妬したんじゃないの。」

「なに？…どういうことだ？」

「このアタシでさえ嫉妬したのよ。森田の奥さんに。」

「まりもはゆっくり起き上がって慎也と肩を並べた。そして慎也に向き直って言った。」

「アタシ、森田に聞いたことがあるの。奥さんはアタシよりも綺麗なの？…って。」

「ほー（。。。） それで？」

「そしたら即答で奥さんだって答えだったわ。アタシにちつとも遠慮なくね。」

「アハハハ！あの森田がそんなにハッキリと言ったのか？そりや珍しい。」

「アタシ、あの時生まれて初めて嫉妬したわ。屈辱感も味わった。見てもいない森田の奥さんにね。」

「確かにゆりかはいいい女だった。なかなかあんな女はいないな。」

「だからアタシもつと慎也に貢献しようと思ったの。森田を誘惑するのには慎重を期したし、念には念も入れた。」

その時、まりものその最後の言葉が慎也には妙に引っ掛かった。

「念には念を？」

「ええ。」

「……計画意外のことを何かしたのか？」

「計画の一環としてしたの。森田に目隠ししてから写真を撮って、慎也が送った2、3日後にアタシも奥さんに送ったの。」

「Σ（□、；！）なんだって！！？」

「これでダメ押しになったと思ってたのに、一体あの夫婦どうしてるのかしらね？」

「そうか・・・そうだったのか。」

「????？」

意外な慎也の反応を不思議に思うまりも。彼はため息を数回繰り返して、やがて一呼吸間を置いてから話し出した。

「わからんか？ゆりかたちに反応がないのはそのせいだ。」

「どういうこと？」

「お前のしたことは余計なことだ。森田卓はバカだが、ゆりかはバカじゃない。そんなしつこいことをしたら『罨を仕掛けましたよ』って言ってるも同然じゃないか！」

「そうかしら・・・？」

「あのな、俺の撮った写真はお前たちが一緒に店に入っていく瞬間ばかりだ。つまり第3者が撮ったもの。」

「ええ。」

「それに比べてお前の写真はどうか？明らかにプレイルームで撮った写真、つまりお前しか撮れない写真だ。その写真をゆりかに送るなんて、お前が仕掛け人だと証明してるもんだ。」

「あ・・・」

「アホが！」

（続く）

その43 動き出した2つ目の不安

動き出した2つ目の不安

● 森田ゆりかの視点

ここ数日、卓^{すく}さんの帰宅が早くなった。

定時になったら脇目も振らず、一目散に真っ直ぐ帰って来る早さ。きつと彼の反省の意味を込めた行動なのだろう。

そんなわけで、夕飯の買い物をするために寄り道をする私の方が当然帰りが遅くなる。

「卓さん、夕飯にはまだ時間かかるわよ。」

「うん、わかってる。急ぐことないよ。さっきまでいずみの宿題ちよつとみてあげてたんだ。」

それを聞いて私は少し嬉しかった。卓さんといずみの仲が少しずつだけど元に戻ってきてる。

「どう？ いずみとうまく話せてるの？」

「まあ、普通かな。でも今日言われちゃったよ。」

「なにを？」

「卓くん、最近お土産がないねってさw」

「(*^m^*)フツツ たまにはケーキでも買ってきてあげて。」

「でも・・・寄り道はあんまり。」

「お土産買うのに30分も1時間もかからないでしょ？」

「そりゃまあ。。。」

「そんな短い時間で浮気なんかできると思ってませんから。」

「へ(ω一一)へぎくツ！・・・きつついなあ(^ー^;)」

「無理に早く帰ってきてることくらいわかってるわよ。」

「ヾ(、;)ゝエへへ」

「あのことにしては、卓さんが騙されたってことで納得してるわ。」

「ほんとに？許してくれるの？僕を。」

「それはまだちょっと早いかな。」

「あら（ノ——）ノコケッ！！」

「だって誰がなぜ卓さんにこんな罠を仕掛けたのか、相手の目的が全然わからないもの。お金を要求してきたわけでもないし。」

「ゆすりつてこと？」

「でもそれなら写真は私のところよりも卓さんの手元に渡すはずだし

…」

「うん。これは面白い謎解きだねえ。」

「は？面白い？」

私は卓さんをギロツと睨んだ。

「いやいやいや、面白くもなんともない謎解きだねえ（ハ——ハ；）」

「まったくもう…（；——）」 Ⅱ 3 フウ」

人ごとのように言う彼に一瞬力チンときたけれど、ホントに浮気をしていたとすればこんな態度はできないと思うし。

私が卓さんに惹かれたのは根が真っ直ぐなところ。ウソがつけないところ。

それに独身時代、私は一度彼を突き放したのに、その間も一途にずっと私だけを思い続けてくれたこと。

そのことを考えると卓さんに疑いをかけるのは良くないかもしれない。

でもまだ他にひとつ、どうしても気がかりなことがあるから気持ち晴れない。

卓さんはウソがつけなくても、隠し事はできるということ。

元々彼は引っ込み思案で、自分の思いを自身の中にしまいこんでしまうこと。

言いたいことや言うべきことのタイミングをいつも逃してしまうこと。

彼の口から三木綾乃のことを話してもらえたら一番スッキリする

のに…

でも私からそんなことは彼に促せない。

私が是枝さんから情報を入手したのがわかってしまう。

三木綾乃って一体どんな子？

この問題さえなかったら私はどんなに気が楽になるだろう。

「ねえゆりか、お願いがあるんだけど。」

キッチンに立っている私に不意に卓さんが話しかける。

「え？なあに？」

「あのさ…ケータイ壊れてからまだ買い換えてないんだけど。」

そうだった。そういえば卓さんはいずみの授業参観の日に学校でケータイを落とした上に踏んづけてグチャグチャにしたんだった。

「卓さん、もつと早く言ってくればいいのに。すっかり忘れてたわ。」

「僕のドジだから言いづらくて…（ - ；」

「いいわ。土曜の休みまでもうすぐだから、買い替えに行きましょう。」

「うん、ありがとう。」

家の財産管理は全て私に任されている。

卓さんのお給料も家族の通帳も全部私の担当。

だからケータイを買うのも私からお金を出さないと卓さんは何も買えない。

結婚したとき彼は最初からその方がいいとお願いしてきたからだ。った。

（。○。；）ハッ…！！

このとき私は気がついた。

卓さんのケータイが壊れているのを何日も忘れていたということは、それだけ彼とメールも電話もしていないということ。

しかもそれでいて困ったことなど全然なかったのだ。これでは夫婦のコミュニケーションや連携などあったものじゃない。

今回こんな罨にハマってしまったも、私の心の隙を突かれたようで、自分自身の責任を感じた一瞬でもあった。

夕食後、寝室に取り込んだ洗濯物を片付けに戻ると、ドレッサーの上に置いてある私のケータイにメールが一通届いていた。

それは是枝さんからだった。

“すでにご主人から聞いてるかもしれませんが、○月 日の土日にかけて、1泊で会社の慰安旅行があります。少し酷な提案ですが、ゆりかさんもいらしてはどうでしょう？もちろん会社のマイクロバスには乗れませんし、交通費や宿泊費も自費になりますが、三木綾乃の顔を確認できますし、あなたが家にいて不安な思いに苛まれるよりはいいのではと思ひまして”

私はこのメールに機敏に反応した。そしてリビングでテレビを観ている卓さんに一言。

「そつえば、そろそろ会社の旅行がある時期じゃない？」

「あ！そつだった。そつえば1泊で温泉に行くことになってるんだつた。」

「……ちゃんと早く教えといてね。1泊でも準備するものは買い揃えなきゃなんないでしょ！」

「うん。。ごめん。」

「で、私も行くことにするわね！」

「……は？（？―？）」

「私も温泉好きだもん。もちろん自費だし、私が自分で運転して行くから。いずみはママとパパのところに頼むわ。」

「なんでまたそんなことを…？」

「ダメ？」

「いや、ダメじゃないけどさ…」

「私たち、ずっと共働きでともに卓さんと旅行したことないじゃない？」

「そうだけど、わざわざ会社の慰安旅行なんかに…普通の週末に家族だけで行った方が…」

「でもそれが実現できてなかったでしょ！それに卓さんは毎年、会社の積み立てから旅費が落ちるからお得でしょ！家族だけで行けば2人分旅費がかかるわ。」

「なるほど。。節約できるってことね」 - ;」

「ええ、そうよ。いいひらめきでしょ？」 (o^ - ^o) ウフッ」

「ま、まあね。。 (^ - ^;)」

(続く)

その44 ドキドキ慰安旅行・前編

ドキドキ慰安旅行・前編

●森田卓の視点

ここは温泉旅館の宴会場。

温泉は好きだけど、バカにされる同僚と食事をするのは苦痛でない。

案の定、僕は園崎頼子さんの横でお酌をさせられていた。もちろんこんなこと好きでしているんじゃない。

コーヒ―を彼女の服にぶっ掛けて以来、私用で子分扱いされるのだ。

酔いのまわた園崎さんの話し声がだんだんでかくなってきた。

「森田、あんたドジだけとお酌のタイミングはうまいわね」

「そうですか、そう言ってもらえると嬉しいです。」

そんな心にもないことが口から出てしまう平和主義な僕。

「おい森田、なかなか様になってるじゃないか。」

田嶋君がニヤニヤしながらこちらを見ている。

「園崎のわんこにもってこいだな。アハハハ」と次は白石君。

それを聞いて園崎さんは少し困惑したようだ。

「ちよつと待つてよ。アタシ、女王様みたいじゃない。」

その時、女王様という言葉聞いて、そばにいた部長がビクッと反応したのに気づいたのは僕だけのようだった。

「困るわ。森田はわんこじゃなくてただの召使い。勘違いしないでね！」

「わんこどう違うんだ？」

「わんこは慰めてくれるけど、召使いはアタシが拒否するからw」

みんな好き勝手なこと言ってるよ・・・（「ん」；；）

「森田、家でも嫁さんにお酌してんだろ？」と田嶋君。

「いや、家では逆なんだけどねぐ（「ん」；）」

「想像つかねえよそんなの！」

なにげにちよつと離れた席の三木綾乃を見ると、まるで無關心のように黙々と料理を食べていた。

一瞬僕と視線が合うと、彼女は自然に目をそらせた。

良かったあ…今日の三木さんは全く僕に近寄って来ない。ちゃんと立場をわかってるんだ。ゆりかも着いてる頃だし、このまま無事に済みますように。。。

「森田が一晩いなくても、嫁さんが寂しがってるとは思えんな。」

黒崎君がまだ僕の話題で引つ張ろうとする。

「逆に嫁さんはせいせいしてるんじゃないか？今頃、男呼んで浮気してるかもしれんぞ？（「ん」）」

「それはないと思いますけど（「ん」；）」

そんな会話をしてるちようどその時、出入り口付近にいた是枝君が僕を呼んだ。

「森田さん、ちよつとこつちへ…」

「え？」

「面会の方がふすまの向こうに…」

僕は直感した。ゆりかに違いない。でもどうして宴会場なんかに…
「森田に面会？こんな場所で？一体どんなオタクが来てるんだ？」

「別に僕はオタクじゃないんで…（「ん」；）」

僕より先に田嶋君が立ち上がって、酔った勢いで強引にふすまを開けた。

「誰か知りませんが一緒に飲みま……！！！！」

田嶋君が固まった。ゆりかを目の前にして硬直してしまった。

宴会場の一同の視線も一斉に開いたふすまに注がれている。

「あ！ひよつとして……森田の嫁さん？」白石君が見開いた目で僕に言う。

「うん。来るとは聞いてたんだけど、部屋で待っててって言ったのに。。」

僕も立ち上がってゆりかの元へそそくさと向う。ゆりかは遠慮がちに会場に一礼して僕を待っている。

硬直がとれた田嶋君が後ずさりして近くの間僚に小声で囁くのが聞こえた。

「びっくりしたあ！瞬間でときめいちゃったよ。」

「森田の嫁さん見るのは結婚式以来だけど、相変わらずすっげえ美人だな。」

「ああ。前よりも綺麗になってるし。」

「なんかギンギンにオーラで出てるぞ。」

「悔しいほどに綺麗だわ。森田がなんでわんこになれたのかしら。」

そんな囁きの中、ゆりかが小声で僕に話す。

「卓さん、我慢しないでいいから途中で抜けてお部屋来ていいのよ。」

「え？聞いてたの？（ - ； ;」

「ちよつとだけね。もうお料理も食べつくしてるみたいだし、おいとましたら？」

「うん。途中抜けるのは構わないんだけどさ。上司の万歳三唱のときは戻らなきゃなんないんだ。」

「新年会でもないのにそんなことするの？」

「部長がやりたいらしいんだ^ ^ ;」

「へえ」

「今ならちよつと抜けれるから行くよ。」

「良かった。じゃ一緒に行きましょう。」

僕は同僚たちに振り返って言った。

「すみません。ちよつとの間だけ抜けますんで。あとで必ず戻ります。」

反対する人は誰もいなかったが、思い切りひやかされた。

「森田やらしい〜！どスケベ！」

「いいなあ〜もうかよ！」

それを聞いたゆりかはカチンときたようで、少しムツとした顔で一同に答えた。

「今はしせんっ！それはもっとゆっくりあとで！」
会場がシーンとなった。。。

僕はゆりかの後について行く間に、三木綾乃さんをチラ見してみた。

彼女の顔はドキッとするほど無表情で、視線はゆりか一点に注がれているのがわかった。

（続く）

その45 ドキドキ慰安旅行・後編

ドキドキ慰安旅行・後編

●森田ゆりかの視点

私は部屋に戻るまでの長い廊下を歩いていた。後ろからは卓さんがついてきている。

卓さんは宴会場で同僚にからかわれていた。

そんな理由もあって、宴会途中で卓さんを連れ出した私。可哀想な卓さん。

いつもこうなのかな？だとしたらすごいストレス。

そんな思いで後ろをふと振り返ると彼はなぜかニヤついていた。

「どうしたの？」

「え？いや…ゆりかの後姿も色っぽいなーって（*^・^*）エヘッ」

「バカね。やめてよ。歩いてるだけでしょ！」

「バ（、；）ゝ ウヘヘ」

部屋の前まで辿り着くと、ドアのロックを解除して私から先に入った。

続けて卓さんが入って…来なかった。

それを遮る不運な出来事が起きたからだ。

「イタタタタ…！！！！」

彼の叫び声に驚いた私がドアの外を見ると、なぜか卓さんは知らない男に腕を後ろ手にめられていた。

よく観るとこの温泉の従業員のようだ。そして私に自信たっぷりに言う。

「お客様、大丈夫ですか？不審者は取り押さえたので、もうご心配なく。」

不審者って・・・卓さんまた間違えられたのね。（ - ；

「ちょっと、僕はそんなんじゃないよ！」

「言い訳は通用しませんよ。ちゃんと聞いてましたから。そちらのご婦人が『やめてよ』って言うておられたのに、部屋にまで強引に入ろうとしてたじゃないですか！」

「違いますよ。誤解です僕はそんな・・・」

「往生際が悪いですね。ちゃんと見てましたよ。ニヤついたエロそうな顔でこちらのご婦人の後姿を眺めてたのを！」

「それは当たってるかもしれないけど・・・」

「そしてご婦人が部屋のロックを開けたとたんに同時になだれ込もうとしていた。どうです？凶星でしょう？」

「そりゃ入ろうとはしてたけど、別になだれ込もうとは・・・」
「同じことでしょう。さ、ストーカーさん警察へ行きますか？」

卓さんはいつも不審者に間違われてしまう。もうこんなケースは今までに一度や二度じゃない。

そしてその都度、私が救いの手を差し伸べる。

「あの...その人は私の主人ですから何でもありませんけど。」

「は？（？-？）」

従業員は狐につままれたような顔をして固まった。

「私の主人なんです。腕を放してあげて下さい。お願いします。」

「は、はあ...。でもお客様は1名様ということでご予約されてますが？」

「ええ、それはそれでいいんです。主人は社員旅行の一員として来てますから。」

「あゝなるほど。そうだったんですか。」

卓さんが泣きそうな声で言う。

「わかつたら早く手を離してほしいんだけど。。（；―；）」

「あ、これはこれは失礼しました。ということは私の勘違いということになるのでしょうか？」

「いちいち聞かなくてもあなたの勘違いですっ！」

「それは誠に申し訳ありませんでした。言い訳するつもりはありませんが、私にはご主人が変態ストーカーに見えたものですから。」

「（「Δ」；；言い訳してるし；；しかも僕に対して思いっきり失礼な理由で。」

私は再びカチンと来た。

「ちよつと！泊まりのお客様に対して無礼すぎやしませんか？確かに主人は今までも変態やストーカーに間違えられたこともありま

す。」

「ゞ（-Δ-；）おいおい；そんなこと言わなくても；；」

「私たちがお似合いの夫婦に見えないこともわかってます。」

「（- - ；それってちよつとシヨック；；」

「だからって、軽々しく言葉に出してはいけない部分ってあるじゃないですか？まして温泉旅館はお客様商売なのに！」

「は；；はい。。（^ー^；）」

「うちの主人は小心者なんですから、大したことない些細なことでも深く傷つくんです。」

「だからゆりか、そこまで言わなくても；；（- - ；）」

私は少し興奮して声が上ずっていた。

「もし主人が精神的シヨックで自殺したら訴えますからね！カ・ナ・ラ・ズ！」

「いや、僕は自殺するつもりないし（^ー^；）」

「いいのよ。これだけ言っておかないとナメられるもの。」

と私は小声で卓さんに耳打ちした。

（続く）

その46 仕掛人

仕掛人

「まず…私はこれから浴衣のまま森田さんの部屋に行きます。」

「うん。それで？」

「森田さんが奥さんの部屋から戻って来るのを待ちます。」

「それから？」

「私は森田さんの姿を見ると、今まで以上にたまらなく好きになつて、自制心を押さえきれなくなります。」

「そうだね。そしてどうするんだっけ？」

「森田さんに抱いてもらうように懇願します。」

「それで断られたら？」

「私はとても悲しくなつて…泣いてしまいます。」

「そして？」

「私は、せめて一緒に添い寝だけでもさせて欲しいと訴えます。」

「うれしい。ちゃんとおさらいができましたね。」

「はい。。。」

「いいですか綾乃さん。これはあなたの意志による行動です。誰にも指示されたものではありません。わかりますね？」

「はい。私の意志で森田さんに会いに行きます。」

「あなたは僕の名前を口にすることはできないようになっていますが、でも僕から出す指示には素直に従うようになっています。」

「はい。」

「そしてもちろん、僕との会話を人に話すことはあり得ないことです。なぜなら、僕の指示は、あなたの自身の意志だからです。」

「私の意志。。」

「いいでしょう。では綾乃さん、僕がカウントを数えたらゆっくりと目を開けて下さい。さあ、今夜のあなたは森田卓に会いたくて仕

方ありませんよ。」

「ええ。」

これえだ
是枝と三木綾乃は外の暗闇の中で話を終えた。

といつても、一方的に是枝の催眠術による暗示を綾乃に施しただけのこと。話し合いと呼べるものではない。

森田卓とゆりか夫婦が宴会場から去ってほどなくしてから、この二人もこの場に抜け出して来たのである。

そもそも森田卓に三木綾乃を近づけるのは造作もないことだった。人に強力な暗示をかける催眠術も今や是枝のお家芸。

かつてゆりかが通院していたクリニク。そのカウンセラーからの直伝なのだ。

綾乃自身も自分が暗示にかかっていることなど認識はしていない。これまで少し時間をかけ過ぎたかもしれないが、全てはこの慰安旅行を利用するためにやって来たこと。

是枝は、自分の元から立ち去って行く三木綾乃の後姿を見ながら、にわかにほくそ笑んだ。

「（ー、ー）フフ…これでよしと！あとは俺が時が来るまで待機してるだけだ。」

是枝と森田卓は同室だった。そう仕組んだのも、部屋割り担当の是枝自身。

この係りになるために、あらかじめ部長には根回しをしておいたのだ。

是枝は確信していた。森田の性格からして、たとえゆりかの部屋で寝ることになろうとも、一度は必ず自室に戻って自分に報告する。

そしてそのときが計画の最大のヤマ場になるのだ。

「森田卓・・・お前にゆりかさんは不釣合いなんだよ。ミスマッチに

も程がある。
L

(続く)

その47 夫婦の会話 in 旅館

夫婦の会話 in 旅館

● 森田ゆりかの視点

ちょっとした騒動が一段落して、ようやく私と卓さんの二人きりの時間になった。

部屋食を頼んでおいたので、すでにテーブルの上にはお膳が運ばれている。

「卓さん、少しあげるから一緒に食べましょう。」

「僕は宴会で食べたからいいよ。ゆりかまで食べなくなつて…」

「そう、じゃあ飲むのは付き合つてね。」

「うん。それはもちろん。」

私が食べてる間、卓さんはひたすらビールを飲んでいた。

アルコールばかり飲んでおつまみを食べないのは体に悪いと思った私は、さつきと同じ一言を口にする。

「少しあげようか？」

するとまた似たような答え。

「いいよ。ゆりかのだもん。お腹も減つてないし。」

そう言いながらも卓さんはさつきから料理をチラ見してはビールをあおっている。

こういふときの彼はやっぱり食べたいのを遠慮しているだけ。

「卓さん、私このお魚苦手なの。食べてくれない？」

「え？でも…」

「私も食べれないから残すともったいないじゃない。」

「…そういうことなら仕方ないし…じゃ僕が食べようかな（´・`）、
*）テヘへ」

「ありがとう。助かるわ。」

こうしてあげれば卓さんは遠慮というストレスから解放される。

程よく酔いもまわった頃、卓さんがグラスを置いて私に謝った。

「ゆりか、さつきはごめん。また妖しいに間違われちゃってさ。」

「いいのいいの。もう慣れっこだから。」

「慣れっこ・・・」だよね、もう10回くらいあるもんね。
「」

そう、確かにそれくらいはあるかもしれない（^ー^；）
でも卓さんは悪いことをしているわけじゃない。たとえ原因が彼であつても。

人を責めてもしようがない。卓さんが謝ったのを期に、私も少し反省したことを彼に伝えた。

「それより、私の方こそ卓さんに悪いことしちゃったって思ってたの。」

「へ？（・・）どんな？」

「私がさつき卓さんの会社の宴会場に行ったときのことよ。」

「あーあのとき？でも何か悪いことした？」

「私、皆さんの前で失礼なこと言っちゃったでしょ？」

「（？ー？）はて？ゆりかが何言ったわけ？」

「もう…また恥ずかしいこと言わせないでよ…（*v・v）」

この一言にどうやら卓さんは気づいたようだ。

「あーわかった！『今はエッチしません。もつとあとでゆっくりやりますからって』って言ったこと？」

「そこまでリアルな表現はしてませんっ！！（^□^；A」

「そんなの気にすることないよ。夫婦だもん。」

「そうじゃなくて、あそこにいた会社の人たちって、ほとんど私たちの結婚式にも来てくれた人じゃない。」

「まあそうだけど。」

「私さっきの一言で私の印象が悪いと、卓さんにも迷惑がかかるかって。」

「そうかなあ？」

「そうよ。私がタカビで恥じらいのない女だって解釈されたら。」

「それはないよ。」

「卓さんが家でも尻に引かれてるって思われないかしら？」

「そんなの勝手に思わせとけばいいじゃん。」

「卓さんがまたからかわれるじゃない。」

「あ・見てたの？宴会場。」

「ちよつとね。いつも会社でもそうなのかなって思っちゃった。」

「へ(ω「——」へぎくツ！…まあ、パシリはやらされてるけどねw」

「やつぱり…」

「いいんだよそれは。僕はこういうキャラだし、結婚する前から同じなんだ。」

「でも…」

「それに理不尽なことにも慣れてるし、僕もよくドジるから同僚に迷惑もかけてるしね。あいこみたいなものなんだ。」

「そう。。」

卓さんはケロッツと言ったのけた。どうやらストレスを溜め込まないコツを会得してるようで、逆に私は彼を頼もしく思えた瞬間だった。

「あ、そうだ。是枝君に言っておかないと。」

卓さんが立ち上がった。

「どうしたの？」

「うん。同僚の是枝君って人と同室なんだ。」

「行っちゃうの？」

「すぐ戻るよ。ゆりかもさっき言ったじゃん。あとでエッチするって。」

「バカ…（*v・v）」

「だから一言報告しておかないとね。」

「うん。じゃあ待ってる。」

こうして卓さんは部屋から出て行った。

でも、すぐ戻ると言ったわりには30分も時間が経っていた。

ちょうどその時、少しだけ不安を感じ始めた私のケータイにメールの着信音が。。

“是枝さんからだ。一体何？”

私はメールを開く前から胸騒ぎを感じていた。

（続く）

その48 超えた一線？

超えた一線？

●森田卓の視点

戻った部屋のドアを開けると、豆電気のような照明だけが点いていた。

うす暗くて人の気配は感じられない。

「あ、そっか。まだ是枝君は宴会場かあ。ヤバイ！部長が万歳三唱する前に僕も戻らなきゃ。」

僕は部屋を出ようとして振り返った瞬間、いきなり目の前に人が立ちはだかっていた。

「うわっ！¥（o）／」

僕はびっくりして後ろにしりもちをついてしまった。

「み、三木さんっ！！なんでこんなところに！？」

彼女はまどろむような目つきで一步部屋に入り、後手でドアを閉めた。

「三木さん、どうかしたんですか？」

僕はしりもちをついた態勢のまま質問を投げかける。

彼女はそれに答えずに、壁のスイッチを押して部屋の明かりを点けた。

「森田さん、このときを待ってました。」

「はあ？どういうこと？」

三木さんは浴衣姿で髪はアップにしている。

「お願いします。今夜私を抱いて下さい。」

Σ—11（　　）——1ええええええええええっ??

「夜を二人だけで迎えられるのはこういうときしかないんです。」

三木さんはそういうと、アップにしていた髪を下ろした。

「いや、そう言われてもちよつと。」

彼女は僕のそんな言葉など聞く耳も持たないようで、しりもちをついている僕の上いきなり重なってきた。

「ちよつと……困るよ三木さん。酔ってるでしょ？」

「森田さんのぬくもりを感じたいの。」

「やばいつて！是枝君が来たらまずいことになる。」

「あの人は部長たちと徹夜マージャンするから戻らないわ。」

「Σ（・・・*エエツ！？聞いてないよそんなの。」

「森田さんもマージャンできるの？」

「いえ、できません（^ー^；）」

「じゃあいいじゃない。これは神様がくれたチャンスよ。」

「僕にはピンチだけど（「ー」；ヒヤリ」

三木さんは僕の上で浴衣を脱ごうとした。

「ダメだよそんなことしちゃ！」

僕は必死で、ほどけて開いた彼女の浴衣を両手でつかんで胸を閉じようとした。

それでも三木さんは激しく抵抗するので、思わずつかんだ胸元から真横へ投げ飛ばしてしまった。

まるで柔道技が見事に決まったような1本勝ち。

「わっ！しまった（「ん」；……だ、大丈夫？三木さん？」

こんなことしちゃったら間違いなく彼女は怒るだろう。

「ちつともやさしくないのね。森田さん。」

三木さんが起き上がりながら言う。

ほら来た！さすがに怒るよなやつぱり。。

でも、申し訳ないことはしたけれど、これで部屋から出て行ってくれるかもしれないし、僕に弁当も作って来なくなるかもしれない。

だとしたらこれで良かったんじゃないか？うん、そうだよ。良かったんだ！

と・・・そう思ったのが非常に甘かった。(- ;

「私、森田さんのワイルドな一面が見れて嬉しい！」

「(ノーωー)ノバタ　なんでやねん！」

「私、少し冷たくされる方が好きなの。森田さんが私の理想に更に近くなったわ。」

「んなアホな。。(㇏ ; ; ;」

「心配しないで。私、前にも言ったけど、森田さんの生活に迷惑をかけるつもりなんて全然ないの。」

「そうでもないような。(- - ; ;」

「森田さんの家族の用事がないときに、たまに会ってくれるだけでいいの。」

「でも今日は…三木さんも見たでしょう？僕の奥さん。」

「ええ。キレイで可愛い奥さんね。」

「だから僕はこれからまたそっちに戻るんだ。家族の用事なんだよね。。ここにはそれを是枝君に伝えに来てただけなんだ。」

「是枝さんは戻らないもの。。お願い！もっ少しだけここにいて森田さん。」

「そんなこと言ったって。。」

「朝までは長いわ。私が1、2時間くらい森田さんと一緒にいたって、独占したことにはならないわ！」

「すごい言い訳。。(㇏ ; ; ヒヤリ」

「森田さんは何もなくていいからそのままじっとしてて。」

それって…されるがままってことかい？(^ □ ^ ; A

「それともまた私を投げ飛ばす？レディに対して失礼よ。 (o^
-^o) ウフッ」

会社ではいつも控え目な三木さんの異様な変貌ぶりに、僕は一抹の不安を感じた。

このまま僕が拒み続けたら、彼女は逆上してしまいそうな勢いだし、またそんな目つきをしている。

僕はともかく、ゆりかに危害が加わったら大変だ。あるいは三木さん自身が勢い余って自殺さえしかねない。

「ごめんねゆりか。。これは浮気じゃないんだ。決して浮気なんかじゃ。。」

三木さんがまどろむ目でゆっくりと僕に唇を重ねてきた。。

(続く)

その49 覚悟の上で

覚悟の上で

●森田ゆりかの視点

“何！？何なの？この目の前にある光景は！？”

私の頭の中が真っ白になった。

呆然と立ち尽くす私。

さつき是枝さんから届いた信じがたいメール。

“今、三木綾乃と森田さんが部屋に一緒にいるようです。その目で確かめますか？ショックを受けるかもしれないので、無理には薦めません”

まさかまさかの事態。私は三木綾乃という女性とはどんな人なのか、遠めからでも一度は確認しておきたいがためにこの旅館に来ただけ。

“それなのに…同じ旅館に私もいるのに、何でこんなことが起きるの？”

そんな場面なんて見たくもない。でも黙認してこの部屋で1人苦しみがいてるなんてもつとイヤ！

私は更なるショックを覚悟で是枝さんに返信した。

“すぐに彼の部屋行きます”

部屋に近づくに連れて高鳴る胸の鼓動。

心臓が口から飛び出るくらいという表現の意味がわかる気がした。

部屋の前に着くと、是枝さんがドアの外に立っていた。

「余計なメールだったかもしれませんがね。申し訳ありません。」

「いいんですそんなこと。でも是枝さんは卓さんと同室なのになぜこんなことに？」

「いや、僕は部長にマージャンに誘われてたんで、朝まで部屋には戻るつもりはなかったんです。たぶん、三木綾乃そのことには気づいてたのかもしれませんが。」

「そう。」

「僕がちよつとトイレで抜け出して、廊下に出たとき、彼女がこの部屋の方へ歩いて行く後姿を見まして、こっそり跡をつけたらやはり。」

「・・・」

「僕はゆりかさんに連絡するかどうか悩みました。一旦は部長の元に戻りましたが、気になって仕方ないので、30分くらいしてから口実を作って三木の部屋を尋ねてみたんです。」

「・・・」

「が、案の定いませんでした。同室の子に聞いても部屋には一度も戻って来てはいないと。」

もうここまで聞けば、卓さんと三木綾乃はこの中にいるのに疑いはない。

「僕がドアを開けましょうか？」

「・・・いいえ、私が開けます。」

こうして私の目に飛び込んで来た光景が今のこの現状。

地べたの畳に男女二人が重なっている。男は紛れもなく卓さん。

恥ずかしげもなく、部屋は煌煌と明かりが点いたまま。

彼は仰向けで、その上に浴衣のほどけた女がまたがり、ドアを背を向け積極的に…

私は声を出すことさえできないでいる。

無我夢中なのか、私と是枝さんが入って来ても気づかないバカ女。先に気づいたのは卓さん。私を見るや彼の目は大きく見開いて、表情が一瞬にして青ざめた。

「あつ！ゆりか…」

卓さんはすぐに女を払いのけて起き上がった。

「違うんだよこれは…これはその…」

説明に困っている卓さんに、払いのけられた女がまた彼の足元にしがみつく。

その表情には驚きや仰天などみじんも感じられず、ただ彼だけを見ていた。

「ちよつと三木さんてば…」

彼が口走った言葉で三木綾乃だということが確認された。

それにしてもなんだろう？この女。

私がいるのになぜ平気でこんなことを？それともわざと？

まるで夢遊病者。目がうつろでよどんでいるように見える。

もうこの場にはいられない。こんなところで説明も聞きたくない。

私はこの場を駆け抜けるように後にした。

こみ上げる涙で目がかすむ中、やっとのことで部屋に戻るなり大声で泣いた。

もうこれは決定的。。

信じてたのに・・・

信じてあげたかったのに・・・

（続く）

その50 サイテーな男

サイテーな男

● 森田卓の視点

僕はとんでもないことをしてしまった。
本当にもう取り返しがつかない。
バレなきゃいいやなんて一度も思ったことないのに…
こんなことする気なんて全然なかったのに…

僕の心の油断だ。いや、優柔不断な僕の意志の弱さだ。
はつきりものが言えない僕の性格のせいだ。

いけないと思うことをはつきり断ることさえできない愚かな僕。
全て僕が悪い。僕が100%悪いんだ。

ドジしたときも、いつも反省や後悔ばかりが先に立って、未然に
防がないでいる不注意者。

僕はゆりかを裏切ったことになるんだ。

しかも彼女を相当傷つけて。

「ああ… どうしたらいい？僕はどうしようもない大バカ者だ！」

僕は頭を抱えてうずくまる。

そばでしばらく静観していた是枝君がそつと言う。

「森田さん、すぐに奥さんの部屋へ行った方がいいですよ。」

もったもな意見だけど、行って僕の口から何が言えるだろう？
呆然と立ち尽くすだけでたぶん何もできない。

謝ってすむ問題でもない。でも謝らないともっと悪い。

「ああ… もうつー!!」

このハプニングで僕の頭は混乱するばかり。判断ができない。でも行くしかない。何を言われても謝るだけだ。言い訳は無意味だ。

「奥さんのところに行っちゃうの？」

不意に三木さんが声を出した。

ショックな僕にこの無神経な質問はさすがに力チンときた。

「君は僕の家庭に絶対迷惑はかけないって言ったじゃないか！それがなんでだよ！」

「ごめんなさい…大丈夫だと思ったのに。」

「なにがだいじょうび…」

興奮のあまりにこんな場面でかんでしまった。（「ん」…）

「と、とにかくゆりかのところへ行くよ。」

僕は早足で部屋を出た。

ゆりかはふとんに顔をうずめて泣いていた。

体も丸めて泣きじゃくっていた。

改めて後悔の念が押し寄せる。

僕はなんてことをしたんだ。。

僕にとって最大の伴侶のゆりかを泣かせるなんて。。

僕はサイターの男だ。

「ごめんねゆりか。。許してくれるとは思ってないけど…本当にごめん。」

「うっうっ…うっ…」

たぶん僕の声は聞こえてると思うけど、ゆりかはただ泣いているだけだった。

「言い訳はしないよ。でもあんなことする気は全然なかったんだ。」
「それが言い訳じゃない。」

間髪入れず、ゆりかが突っ込みを入れた。

「そうだね。。ごめん。もう何も言わないよ。」

僕はゆりかのすすり泣く声だけを黙って聞いていた。

2、3分経つたろうか・・

ゆりかがふとんからほんの少しだけ顔をずらして口を開いた。

「・・・あの女の人が好きなの？」

僕は速攻で返事をする。

「いいや、好きじゃない。」

「好きでもない人と寝る人だったの？卓さんで。」

「そうじゃないよ。向こうから急に無理矢理。。」

「そんなの断ればいいだけじゃない！抵抗できないほど腕っ節が強い女なの？」

「いや・・そんなことは。。」

「じゃあ好きだってことでしょ？」

「それだけは違う。僕は三木さんに何の感情も持っていないよ。」

「もういい。一人にして。」

「ここにいるよ。ずっと。」

「私がイヤなの。お願い。出て行って！」

「・・・・うん。。ごめんね。。本当にごめんね。。」

僕は部屋を出るしかなかった。今はそうするしか。。

(続く)

その51 お互いのために

お互いのために

● 森田卓の視点

翌朝、ゆりかはすでにいなかった。

フロントに尋ねると、7時にはチェックアウトしたことがわかった。

僕だつてすぐに帰りたいのは山々だけど、会社の慰安旅行は別名、研修旅行でもあるため、この日は数箇所、各種工場見学の予定になっている。

組織の一員である以上、勝手に抜けて帰るわけにはいかない。

結局、夕方までのスケジュールをこなしたものの、ゆりかのことがたまらなく気になるあまり、どこを見学何したのかも頭の中から飛んでいた。

その間、三木さんの遠目視線は感じていたが、僕はそれを無視した。また、彼女の方から話しかけてくることもなかった。

帰宅は6時ごろ。

僕は玄関前で躊躇していた。入ろうとしてもすぐには入る勇気がない。

僕の先走りの妄想が勝手に一人歩きしてゆく。

ゆりかはショックのあまり帰宅してないんじゃないか？

それとも荷物をまとめてすでに出て行ってしまったとか？

だとしたらやっぱり実家に戻ってあの怖いお義父さんに報告するだろう。

（。口。；三。；口。）ヒイイイイ

こうしていつまで玄関先にいても仕方ない。

僕は覚悟を決めてそっと玄関の扉を開けた。

「おかえりなさい。」

ゆりかが目の前に立っていた。

「うわっ！いたっ！」

「どういう意味？」

「いや、その・・・」

言葉の出ない僕がすぐに思い立ったこと。何よりもそれは土下座することだった。

「ごめんなさいっ。もうしません！絶対しませんっ！本当にごめんなさい！」

十数秒間の空白の時間。やがてゆりかが口を開いた。

「とりあえずリビングに来て。少しお話ししましょう。」

至っておだやかな口調のゆりか。笑顔のないのは当然だけど、怒りの感情も感じられないのが気になった。

「いずみは？」

「まだ実家。さっきもう一日預かってもらうようにお願いしたから。」

「...そうなんだ。」

テーブルを挟んで座った僕とゆりか。

「卓さん、お茶飲む？」

「あ、僕が入れようか？」

「じゃお願い。」

「えっ？」

「入れてくれるんでしょ？お茶」

「あ...うん。」

こうもあっさり『じゃお願い』なんて言われたのは初めてだ。

今までは『私が入れるからゆつくりしてて』とか『いいの？ありがとう』

なんて、優しい返事をくれたもんだけど、今の僕の立場ではこれが当然の結果だろう。

お中元でもらった高級なお茶を、僕とゆりかは無言で最初の一口をすす。

少し間があって、ゆりかが第一声を出した。

「卓さん…私、少しここから離れて考えてみようと思ってるの。」
「！！！！」

それはわずかながら予想はしてた言葉だった。

けれどそれを直接聞いた瞬間、僕の心の奥底にその言葉がズシンと突き刺さった。

「ごめんね。僕が100%悪いよ。それは認めるからさ。」

「……………」

「別にあの子が好きじゃなければいいんだ。僕がいつも一緒にいたいのはゆりかだけなんだよ！だから。」

「信じたい。信じたいけど、あんな場面を見せられて信じることなんて…………」

「だから僕が大バカ者なんだよ。拒否すればいいことなのに、いつも決断する前に人に吞まれてしまうんだ。」

「卓さん…そこなの！そこも私には耐えられないの。」

「え…………」

「たとえ浮気が本当じゃないとしてもよ、判断が曖昧だと人に疑われても当然でしょ？」

「……………」

「今まであった卓さんのドジの数々はまだ許せた。でも騙されたり利用されるのは絶対にイヤ！」

「……………」

「卓さんは人が良すぎるの。あの写真にしてもまんまと騙されそう

になったわ。未だに誰が仕組んだのかわからないけど、なぜターゲットが卓さんなの？」

「それは…僕もわからないけど。」

「一難去ったと思ったら次はこれ。浮気が事実でもウソでも私が悩むのは同じこと。卓さんといったら色んなことに巻き込まれ過ぎるの！」

「・・・ごめんね。僕のこの優柔不断な性格のせいだ。」

ゆりかはここでお茶の二口目をすすった。

「私、ずっと考えてたの。昨日の夜から泣き明かした朝も…そして今日一日この時間までね。」

「……………」

「卓さん、私の方こそごめんね。」

「えっ？」

なんでゆりかが謝るだろう？僕の不安が更に高まった。それは紛れもなく、夫婦生活終焉を意味する最大の不安。

「人の持つて産まれた性格は直るものじゃないわ。私が卓さんにどうこう言うのは間違ってるかもしれないって思ったの。」

「そんなことはないよ。もっと言って…」

「いいえ、私が卓さんの性格をちゃんと把握できなかっただけ。理解してたつもりだけど、それに耐えられなかっただけ。」

「ゆりか…そんなこと言わないでよ。」

「ごめんね、卓さん。私が至らなくて。これからは伸び伸び生活してね。」

「そんなあ…離れるっても少しの間だけってさっき…」

「私の心の整理がつくまでね。」

「整理がついたら戻って来るんだよね？」

「・・・卓さん、好きだったよ。」

ゆりかの語尾が急に震えて…そしてあっという間に彼女の目から

涙が零れ落ちていた。

「ゆりか…そんな過去形な言い方しないでよ。。謝り足りないなら何十回でも何百回でも謝るから。。お願いだから。。」

僕も気づくと鼻がグチグチユになりながら泣いていた。

（続く）

その52 円満な別居

円満な別居

●森田ゆりかの視点

通勤にも便利なマンスリーマンションを見つけた。

とりあえず明日、いずみと私はここを離れる。

実家には絶対帰りたくなかった。

結婚当初から卓さんを好ましく思っていないパパが『ほらみろ、だから言わんこっちゃない！こうなるのはわかってたんだ！』と責められるのは目に見えているから。

でも私はあのとき、心の底から卓さんと結婚したいと思っていた。ずっと好きでいられると思っていた。正直それは今でも。。。

卓さんが会社の慰安旅行から帰宅したあの夜から今日で1週間。

そしてそれは夫婦生活の最後の1週間になるのかもしれない。

でも私たちはこの間、普通の夫婦でいられた。

普通の人が聞いたらおかしいと思うかもしれないけど、穏やかな1週間だった。

卓さんもあの日以来、泣いたり謝ったりはしていない。

でもそれは私が1週間前にそうお願いしたからなんだけど。。

「卓さん、私といずみの住む場所が決まるまでは幸せな家族でいましょう。」

「・・・幸せ？」

「別に私たち、憎み合って別れるんじゃないもの。」

「ゆりかは僕を恨んでないのかい？」

「恨んでなんかないよ。卓さんの性格からして、そういうもんなの

かなあつて思つてるだけ。」

「でも…許してもらえないんだよね？だから別居しちゃうんだよね…」

「ごめんね。私の精神が持たなくなっちゃいそうなの。わかって。だから卓さんももう謝らなくていいから。」

「全部僕のせいなんだよね。」

「ねえ、もうよしましょ。私、円満別居したいの。悩むのも疲れたわ。だから泣いて別れたくないの。」

「…うん。わかった。。なんとなく。」

こうしていよいよこの家から離れる日が来た。

マンスリーマンションの方は家財道具が大抵揃っているので、私といずみの荷物は最小限にまとめて出ることにした。

「ゆりか、足りないものがあつたらいつでも連絡して。すぐに持つて行くから。もちろんいつでも取りに来てもいいし。」

「ええ、そうするわ。」

「うんうん、そうしなよ。別に離婚するわけじゃないんだしさ。ただの別居だもんね。ハハ…（^ー^）」

いかにも苦し紛れな彼の言い分。

「そう…ね。今すぐにはまだ…ね。」

正直、私もまだ迷っているし、正式に離婚するかどうかの決断はできないでいる。

むしろこの1週間、彼の真摯な態度を見ると、余計に判断を鈍らせた。

私といずみは玄関の外に出た。卓さんは玄関の中で私たちを見送ろうとしている。

いずみにはちゃんと説明したつもりだけど、わかってくれたかどうか…。

どうか彼女がグレたりしませんように。

困ったときの神頼み。でも困ったときにしか頼まないなんて神様に失礼よね。

こんなことをふと思いつきながら空を見上げる。

曇り空・・・今の私の心境と同じ。

そんなとき、突然いずみが私に言った。

「ママ、卓くとチューはしないの？」

「え？何よいきなり。」

「だって、ケンカしたんじゃないんでしょ？」

「そうだけど・・・」

「今日までずっと仲良かったじゃん。ママと卓くん。」

「・・・」

「大人の事情はよくわからないけど、嫌いじゃないならお別れのチュークらいしなよママ。」

「でも・・・」

「卓くんはママが嫌いなの？」

「え？そ、そんなことはないよ。ママのことは…大好きだよ。いずみがママを大好きなように、僕もそれ以上にママが大好きだよ。」

「なんか変なの。それなのに何で別々に暮らすの？」

「…色々あってね。ごめんねいずみ。」

「アタシはママと一緒にならそれでいいけどね。」

「あら（ノ――）ノコケッ！！」

「でもね、ちよっぴり寂しいかな。」

「えっ？」

「卓くんのドジにはよくイラッとしたけど、いつも優しくしてくれたもん。」

「アハハ（――）…」

「学校の参観日に来たときは大嫌いになったけど、今は好きかもw」

「ありがとう。」

いずみが私の腕を引つ張って卓さんの元へ寄せようとする。

「じゃあお二人さん、お別れのチューをどうぞ！アタシはあっち向いてるから今のうちにね！」

「もう、いずみったら……」

私はいずみに目をやってから卓さんの方へ遠慮がちに向き直った。その瞬間、いきなり彼に抱き寄せられて唇と唇が重なった。反射的に目をつむってしまう私。抵抗などできなかった。

その二人の様子を気づかれない距離から双眼鏡で見ている人物がいた。

彼は憎らしそうにチツと口を鳴らして地面にツバを吐く。

「こりやまずい。。思い通りに事を進めるってのは難しいもんだな。」

「

そう、このバチ当たりな言葉を口にする男は、紛れもなく卓の同僚であり、仕掛け人でもある『是枝』その人であった。

「でもまあいい。まだここに切り札があるし（「ー」）フフ」

是枝は自分の内ポケットから、1通の封筒をちよっとつまんで目で確認した。

「これをあとでゆりかさんに見せてあげるとしよう。（「ー」）「

（続く）

その53 ゆりかの決意

ゆりかの決意

●森田ゆりかの視点

このマンションに移ってから初めての土曜日。

平日は仕事に追われて卓さんとのことを考えなくて済んだ。

正直、考えたくもなかった。私の人生、今まで悩みの連続だった。ひとつの悩みから解放されるのにどれほどの長い期間がかかったことか。。。

だから今回の件にしても、毎日が苦しくてたまらない日々を過ごすなんてこりごりだった。早々に別居を決めたのもそのせい。

でも、はつきりした結論が出ていない以上、今のままでも中途半端なのは確か。。

今日は何の予定もない休日。気が思いつけど、この先の私たちのことを本気で考える日にしなくちゃいけないのかもしれない。

今、私の目の前には1通の封筒がある。

先日、是枝さんからの連絡で手渡されたもの。

もう何日も経つのに開ける気にならない。

それは三木綾乃から私への手紙だった。

是枝さんの話によると、三木綾乃は私にこの手紙を直接手渡すべがなくて、どうしたらいいか相談を受けたとのこと。

卓さんを介して私に手渡すのは不自然。その点、是枝さんは、思い出したくもないあの場面の目撃者。事情を知ってる彼ならなんとかしてくれると思ったそうだ。

卓さんと三木綾乃のその後については、あえて私は是枝さんに聞かなかった。

とにかく私は今日、この手紙を読もうと決めた。読めば何らかの結論が出せる気がしたから。

以下、三木綾乃からの手紙の内容

“突然の手紙ですみません。私はご主人と同じ部署に勤務する三木綾乃と申します。

先日は宿泊先の温泉旅館にて、あのような恥ずかしい場面を見られてしまい、どうお返事をすれば良いのかわからなくて、私はかなり混乱していました。

まずは最初に奥様に謝らなくてはなりません。本当に申し訳ありませんでした。

奥様があの日、同じ旅館にしていると知りながら、私はあんな大胆で非常識な行動をしてしまったことを深く反省しています。

ただ、私と森田さんがお付き合いを始めてからかれこれ半年近くになります。

最初は私が森田さんを一方的に好きになりましたが、今では彼も私に思いを寄せてくれていると確信しています。

なぜなら彼はいつも私を拒んだり嫌がったりしたことなど一度もないからです。

初めてのデートは忘れもしません。○月×日の日曜日でした。

森田さんと夕方の待ち合わせで、一緒に個室のある和食屋さんで食事をしました。

私と森田さんが打ち解けるのにそう時間はかかりませんでした。彼は食事中に私に覆いかぶさってきました。

それを酔ってバランスを崩したせいにして、私を愛してくれたのです。

ちょうどそのとき、お店の従業員さんが部屋に見えて、恥ずかし

い思いをしたことが印象に残っています。

それを考えると、今回の旅館での一件も似たようなことの繰り返しをしてきたのだと、改めて反省している次第です。

森田さんは、会社でも私の作ったお弁当を毎日喜んで食べてくれていました。

奥様のお弁当もその後に食べていたわけですから、森田さんが最近太り気味になったのがおわかりかと思います。

これからの判断は、全て奥様に委ねます。私の軽弾みな行動で、ご迷惑をおかけしたことについては、心からお詫び申し上げます。でもどうか森田さんを叱らないで下さい。不倫とわかっていながら近づいたのは私なんですから。

つたない文章ですみません。簡単ではありますが、これにて失礼致します。

三木綾乃”

私は呆然としてその場から動けなかった。
なんて失礼な女！！

この女は不倫を反省して詫びているんじゃない。
自分が招いた軽はずみな行動を、人に見られてしまつてマズかったと言つてるだけ。

つまり、バレないようにしていれば問題がなかったと言わんばかり。

それなのに・・・そんな女に卓さんが。信じられない。

これって、卓さんと三木綾乃が両思いだつてことになるの？
単に卓さんがお人よしで断りきれないだけじゃなかったの？

本当に卓さんは三木綾乃を愛していたつてこと？それが本当の真実？

私は再度手紙を読み返した。

○月×日の日曜日…

卓さんがいずみの参観日に行った日…

そして午後からは得体の知れない謎の女にカップル喫茶に誘われた日…

でも…でも夕方からは確か、新入社員の歓迎会だったはず。そのために私は卓さんの要求に応じてお金を渡した。

“一体どういうこと？卓さんはまだ私に隠し事をしていたの？まだウソをついていたの？”

私はすぐに思いつくまま、是枝さんに直接電話した。

「ゆりかです。突然すみません。ちよつと確認してもらいたくて…」

「はい、いいですよ。なんでしょう？」

「○月×日って、会社の新入社員の歓迎会があった日なのか、わかりますか？」

「あゝ、ちよつと待って下さい。僕のスケジュール帳を見ればわかりますから。」

私の心臓の鼓動が高鳴った。

もしも歓迎会があったなら、三木綾乃の話は作り話。とんでもない詐欺師の女。

でも…もしなかったら。。

「あ、わかりましたよ。その日に新入社員の歓迎会はありませんでしたね。」

「Σ（□；…！！！！」

「そうだ！僕も思い出しましたよ。たしかその日は午後から僕がゆりかさんの家にお邪魔した日じゃないかと思いますが。」

「え、ええ…確かにそうですね。」

「なら間違いないです。僕はその後まっすぐ帰宅した記憶がありませんし。」

「そう…ですか。忙しいところどうもありがとうございます。」
「ゆりかさ…」

私はすぐに電話を切って放心状態になった。

もうこれ以上、誰の言葉も聞きたくなかった。

——その数日後

私は卓さん宛てに一通の封筒をポストに投函した。

（続く）

その54 空虚な独り暮らし

空虚な独り暮らし

● 森田卓の視点

カップ麺にお湯を入れた。ゆりかと別居してから毎日こればかり。でも今日の銘柄はちよつと違う。期間限定の海鮮黒ゴマとんこつラーメンなのだ。

コンビ二で最後の1個を手に入れたときはささやかな感動があった。

あとは4分待つだけ。。

ごはんもレトルトのやつ。レンジでチンして暖めるだけ。

まるで2年前の独身時代に戻ってしまったような気がする。

不意に、郵便配達人がポストに郵便物を入れてバイクで走り去る音がした。

ごはんも今レンジにかけたばかりだし、ラーメンができるまでにはまだ時間もある。

僕は玄関のポストから3通の郵便物を抜き取って、カップ麺のある食卓の前へと舞い戻った。

1通は家電店のキャンペーン広告。その次はケータイの請求書。

「請求書なんて見なくていいや…」

僕はラーメンのフタを空けて一口食べようとした瞬間、請求書の下から3通目の封筒の文字が目に入った。

「ゆりかからだっ！」

僕は割箸を置いて、真っ先にこの封筒から優先して中を開ける。そして取り出した1枚の書類に声を失った。

ガ　ΣΣ（。Д；）　ン！！　り…離婚届！！

恐れていたことが現実になった。離婚・・・僕が離婚。。

頭の中がグルグル回る。自分でも混乱してるのかよくわかる。

そんな中でも、その下にもう1枚の手書きの便箋があるのに気づいた。紛れもなくゆりかの自筆。

“卓さんへ

あつという間の2年間でしたね。楽しいこともいっぱいありました。

いずみとも仲良くしてくれて本当にありがとうございました。でもお互いがこれ以上悩み苦しまいために、これがベストの形だと思います。

同封した書類に卓さんのサインをして、封筒に書いている住所に返信して下さい。

ゆりか”

僕は口を半開きにしたまま、その場でしばらく固まった。たぶん30分は1mmも動いてないと思う。

頭の中が真っ白になって思考能力がゼロになった。

目の前にある期間限定のカップ麺。運良く買った最後の1個のやさやかな感動など一気に吹っ飛んでしまった。

僕は、のびてゆくラーメンに手もつけずに、ただ漠然とそれを見つめているだけ。

もうカップ麺など食べ物ではなく、置物でしかないように見える。

僕に反論は何もない。ゆりかと別れなきゃならないなんてたまたまなく悲しい。

たまらなくせつない。たまらなく悔しい。たまらなく自分が情けない。

たまらなく泣きたい。もう… たまらない。。

僕はゆりかに反論できない。反論できる立場じゃない。

僕はゆりかにそれだけの決意させるほどの行為をしてしまったんだもの。。

でもできるなら別れたくない。いや絶対別れたくない。

思考能力ゼロの今でも、かたくなにそう思っている自分がいる。

なんとかしたい… なんとかしたい。。 なんとかしたい！！

僕はどうすればいいんだ？ 一体僕はどうすればいいんだ？

病的なまでに僕は、同じ言葉を心の中で繰り返すばかりだった。

（続く）

その55 サヨナラ愛しい人

(エピソード)

サヨナラ愛しい人

●森田卓の視点

食卓に座ってどれくらい経ったろうか。。

泣きたい気持ちとウラハラに、なぜか1滴の涙も出ない。

泣く以上のショックで体全体が硬直してる感じだった。

でもようやく思考回路が少し回復し始めたようで、ふと置時計に目をやり時間を確認した。

午後3時20分。。。

お昼にカップ麺を食べようとしていたときから3時間以上過ぎていた。

「ハハ…ウソみたいな話だよまったく」

僕は苦笑いをしながら大きなため息をつく。

次に固まっていた体を意識的に動かしてみた。

イスから状態を起こしたり、手を曲げたり伸ばしたり。。

…なんで僕はこんなバカみたいなことしてんだろう。。

）

僕は立ち上がった。とたんに立ちくらみが襲ってきたけど、それは短い時間でなんとか収まった。

その後、もう一度ゆりかの文面を読み返してみた。

いや。。一度というのは間違った表現だ。

僕は10回も20回もゆりかの書いた手紙を繰り返し読んでいた。

彼女が決めたことだもの。。やっぱり僕がどうこう言えるわけはない。

僕がゆりかと一緒にいたら、きっとまた迷惑ばかりかけることになるんだ。

ゆりかはその都度我慢してきた。辛抱強く僕を支えてきてくれた。でもそれに対して僕は彼女に何ひとつお返しと言えることなどしていない。

頼もしい亭主には程遠く、ゆりかをいつも不安にさせてきた。

僕はゆりかの笑顔のおかげで、会社で嫌なことがあったときも常に救われてきたけど、逆に当の彼女はストレスを溜め込んできたんだ。

そう…僕は最初からゆりかにはふさわしくなかったんだと思う。

だいいち、こんな僕がゆりかと結婚できたことが奇蹟。同僚たちの言う通りだ。

この2年間、ゆりかがいたから幸せな家庭生活を味わえた。

いずみとも仲良くできて、夢のような2年間を経験できたんだ。

それに比べてゆりかにとっては不幸な2年だったのかもしれない。

僕と出会わなければ、もっと一流企業の人や青年実業家と結婚できたのに。。

裕福な家庭の中で毎日着飾ったり、社交界デビューも夢じゃなかったはず。

それなのに…それなのにさっきまでヨリを戻そうなんて考えていた僕はまさにバチアタリものだ。

僕がこれからゆりかに対してできること。。それは罪を償うことだ。

ゆりかにバツイチのレッテルを貼ってしまう張本人はこの僕。
人ひとりの人生を僕は狂わせてしまった。その罪はあまりにも大
きい。

正直、離婚なんて芸能人がよくするものだと思っていた。
なんという浅はかで愚かな僕だろう。救いようがない。

よし、決めた！僕はもう一生結婚しない！すべきじゃない！

僕には幸せになる資格はないし、人を幸せにできる人間ではない
のがよくわかった。

万が一、そんなチャンスが訪れたとしても、再び相手を不幸にし
てしまうだろう。

僕はゆりかと結婚できたことで、一生分の幸せと運を使い果たし
たんだ。そうさ、そう考えればいい。

出家して僧侶になるのもひとつの手かもしれないけど、僕が寺の
厳しい修行に耐えられるとは思えない。

これからはゆりかの幸せを願って過ごそう。

いずみの養育費もできるだけ援助していこう。

こう前向きに考えても正直胸が苦しい。胸が締め付けられるほど
苦しくてせつない。

恋愛小説によく書かれる表現だけど、本当のことだったんだと今
更ながらわかる。

きつとゆりかも同じ思いをしての決断だろうと思う。

そして円満な離婚への道を選んだ。そう望んでいるんだ。

感情的に別れたくないのは僕も同じ。憎まれて当然な僕だけれど。

この書類に印鑑を押せば全てが終わる。

ゆりかも相当悩んで決めたこと。ためらう時間は僕にはない。
この作業が終わったなら…そう、僕もここを引っ越そう。
僕ひとりではこの部屋は広すぎる。

ふと目の前のカップ麺を見た。麺がスープを吸い込んでなくなっている。

衝動的にあからさまな苦笑いをする僕。

あ…そういえばレンジの中にもごはん入れたままだった。

3時間も経ったごはんなんて、すでに冷たくなっているだろう。
全く、こんなときでもドジしかできない僕。情けなくて情けなく
て大笑いした。

何の前触れもなく、大声で涙を流しながら大笑いをするしかなかった。

さっきまで1滴の涙も出なかったのがウソのように。

翌日、僕は出勤途中のポストから、自分の手紙を書類に同封して
投函した。

見上げた空は秋晴れ。僕の心とは裏腹にすがすがしい朝。
顔にピチャツと何かが落ちてきた。

「あ…」

指でそれをぬぐってみる。ハトのフンだった。

ダメだこれじゃ…もっと強い男にならなきゃ…
運の悪い男から脱却しなきゃ…

そして何事にも動じない男に生まれ変わらなきゃ！！

僕は口を真一文字に結んで職場への道を駆け足で進み始めた。

● 森田卓からゆりかへの返信の手紙より

“書類に判を押しましたので、確認の程よろしくお願いします。

この2年間、こんな僕をよく亭主として盛り立ててくれたことを心から感謝します。

ゆりかと夫婦であつた夢のような2年間は一生忘れることはありません。

初めて人前で僕のことを“主人”と呼んでくれたときの感激は今でも忘れません。

短い間だったけど、僕を選んでくれてありがとう。

僕と結婚してくれてありがとう。

僕と一緒に過ごしてくれてありがとう。

可愛いはずみとたくさん遊ばせてもらつてありがとう。

どうか、二人が新しい人生を幸せに歩んで行けるよう、心から願っています。

大好きなゆりか。僕の人生でたったひとりの彼女であり、素敵なお嫁さんでした。

今まで本当に…本当にありがとう。

森田卓

こうして僕の結婚生活が幕を閉じた。

人は一個人として生きている以上、一生何かしらの物語が生まれ
ては消えている。

たとえそれが平凡で気にも留めない出来事であろうと、あるいは
波乱に満ちた複雑な出来事であろうと。

でも平凡で慎ましやかな生活なんて、そう長く続かないものなん
だろうか？

この僕が再び激しく感情を揺さぶられることになるのは、今から1年後の話。

当然だけど、この時の僕にはまだそんなことなど予期できるはずもなかった。

（完）

その55 サヨナラ愛しい人（後書き）

最後までご愛読していただきありがとうございました。

この物語は一旦完結いたしますが、時期早々に

続編・ファイナルエピソードの連載を予定しています。

できればほんの一言でも感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0411c/>

突然の彼女・エピソード2

2010年10月14日12時59分発行